
微妙な勇者と最強なヒロイン

柳条湖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微妙な勇者と最強なヒロイン

【NZコード】

N65560

【作者名】

柳条湖

【あらすじ】

俺は……駄目人間だった。そんな俺は、ある時『別の世界で人生をやり直さないか?』という何者かの声を聞く。その言葉に頷いた時、俺はどことも知れない草原に放り出されていたのだった。しかも、何故か全裸で。さらに、可愛い女の子までセットで……えっと、どういう状況?

異世界召喚系主人公最強物……でも実は主人公の強さ微妙。
「っていうか、ヒロインが最強過ぎて俺に出番が無いんですけど!」
?

一章 “始まりは現状認識から”

視界が開けた。

朦朧とした俺の脳髄はまだ活動することを拒んでいるが、しかしそんな呑気な事を言つていられる状況ではない事だけは分かった。

何が起こったのか、ちょっと冷静に考えてみようと思つ。まずは現状認識から始めよう。

俺

名前：來生賢人きすぎけんと……これは良い、問題ない

年齢：18歳さい……未成年万歳！イエーイ

体力：15／15……少ない

魔力：0／0……なんじゃそりや？

生まれ：一般庶民……父は普通のサラリーマンに母は専業主婦

装備：頭 黒髪ボツサボサ

　　胴 肌色の防具

　　腕 肌色のガントレット

　　足 肌色のレギンス ……つまり全裸。 そう今をときめく流行の最先端ZE・N・RA！

良し、自分についての認識完了。

どこへ出しても全く問題のない変態つぱりだ。

さて次。

周りの状況

ステージ・果てしなき草原……！」？

足元・シユウウツテ草が若干燃えてる……火事の後？

周囲・オオカミに似てるけどよく分からぬ生物が三五ほど……怖っ！

目の前・女の子（全裸）……めっちゃ可愛い

以上、現状認識終了。

どうしたことですかこれは！？

いやいや落ち着け。

とりあえず大切な事から始めよつ。

俺の真正面にいる女の子

名前・不明……だって初対面だし、一言もまだ交わしていないし

年齢・同じ年くらい？

肌・ガラス細工のよにきめ細かく、透き通るよに美しい……触つたらスベスベしそう

容姿・破壊的に可愛い……特記事項無し

髪の毛・紅色でストレートのセミロング……ファンタジック

スタイル・谷間の見える豊満なバストにキュッと締ったウエスト、そして括れを強調するよにお尻のラインは女性らしい丸みを帶びている……素晴らしいボン！・キュッ！・ボン！の体型。参考までに我が母のスリーサイズは上からB100・W100・H100という素晴らしいボン！・ボン！・ボン！である

ヤバい。

俺、この子のためなら死ねる。

「グルル……」

なんか唸つてる！

周りのオオカミみたいなの、めっちゃ唸つてる！？
女の子の事観察してる場合じゃなかつた！！

「あの……」

そこで初めて女の子が口を開いた。
ちょっと高めの可愛らしい声だ。

どうしたんだろう？

オオカミみたいなのをどうにかする方法でも教えてくれるんだらうか？

「いくら私でも……その……殿方に素肌をマジマジと見られては……照れます／＼」

わ～い、周りのオオカミもどき完全無視だー
頬を上気させてるの可愛いけど、それどうじやない。

今にも襲いかかってきそうなオオカミみたいなのを何とかしないと、俺はこんな意味の分からぬ状況で最後の時を迎えることになつてしまつ。

可愛い女の子に看取られて死ぬのなら良いかなーとも思つけど、その可愛い女の子も死んじゃうかも知れないとなれば話は別だ。
まずは生きなれば。

「グルル……ガウツ！」

吠えた！？

オオカミみたいなのが吠えた！？

痺れを切らしましたか？腹減りましたか？

俺と女の子はどうちらが美味しそうに見えますか？

女の子に決まってるよね？

だって三匹とも女の子の方に襲いかかる気満々っぽいもん！
助かる？俺、助かる！？

「そんなの駄目だ！」

俺、猛る。

俺の人生、俺が死のうが生きようが、俺の目の前で女の子が傷つくことだけは断固として許さない！

「あつ！」

俺は女の子の前に躍り出て、女の子を庇うように両手を広げる。しかし、勢いを殺せないまま三匹のオオカミみたいなのにタックルを食らい、地面に押し倒されてしまう。

そしてオオカミみたのは「まあ男でも良いか」と俺の肉を噛み千切るために口を開けた。

「...ヒサギ」

奇声を上げながら、俺のあんなとじれに噛みついたりしていたオカミみたいなのを膝で蹴り上げ、同時に俺の胴体の上に乗つているオカミみたいなのを右腕の肘でど突きながら俺は体を起こす。もう一匹は俺の頭に噛みついたりしていたので顎に頭突きをくれてやる。

たつたそれだけでオオカニみたいなのはキャンキャン言いながら逃げ去つて行つた。

「お前らの動きなんぞ止まつて見えるのや。」

「怪我はありませんか？お嬢さん。」

そこでビシッと格好つけるのだけは忘れない俺（全裸）。

「はい、ありがとうございます。」

と、先程までは何も危険を感じていなかつた様な口ぶりだつたくせに律儀に礼を言つてくれる可愛い女の子（全裸）。

待て待て待てえ！！

もう一回状況を考えるぞー！？

今の状況

ステージ・果てしない草原……やつぱりJJビJよっ。

人影・俺達以外には見当たらぬ…………つまり一人つきり

男・全裸……俺

女・全裸……可愛い

どうしてこうなつた！？

まずはここに至るまでの経緯から考えよう。
女の子に欲情するのはそれからだ……うん。

回想 “駄目人間とは俺の事”

例えば、人よりちょっと勉強ができないくて、人よりちょっとスポーツが苦手で、人よりちょっと変なポリシーを持つてている男がいるとしよう……つまり俺だ。

ちなみにここでいう“ちょっと”とは、蟻と百階建て超高層マンションの身長差くらいだと考えてくれて良い。

勉強は、平均点が70点のテストで赤点スレスレを低空飛行。平均点が60点を割るようなテストだと一桁だって珍しくない。お、俺が勉強出来ないんじゃないんだ……周りが出来過ぎるだけなんだ……

運動についてだが、身体的能力は決して低くは無いと思う。50メートル走のタイムでいえば5秒台前半を叩きだせる。高校生としては中々な数値なはずだ。拍手されたり。

さらに俺には特技がある。

名を『動体視力』……動きながら物を見る力、及び動いている物を見る力だ。

何故かやたらこの力が発達しているらしい俺は、あらゆる物の動きが写真通りに見えるのだ。

本気を出して一つの物に集中すれば、130km/hくらいの速度なら止まって見える。

ただ、生来の不器用さゆえかボールを使った競技など大の苦手。バットを振れば幼稚園児だってヒットが打てそうなスロー・ボールを空振り、サッカーボールを追いかければドリブル中にボールを踏ん

付けて転び、卓球をやつた時などボールの代わりに台を打つて手首を捻った。

……「うううの、宝の持ち腐れって言つんだと思ひ。

高校は中退。大学には行かず絶賛ニーート街道爆走中。

何故かというと、つい一週間前、教師の一人を顔の形が変わるまで盛大に殴りまくったからだ。

「うわー……なんという不良……

自分で思つて自己嫌悪。

でもあの時は仕方なかつたんだ。

あの教師、女の子に暴行しようとしてたし……

途中で他の教師が介入してきて三人がかりで俺を抑えつけた為に事なきを得たが、もしあのままだつたら教師は死んでたかも知れない。

一応女生徒を助ける為だつたといふことで、本来なら警察沙汰になるところを放校処分という温情措置で済んだらしい。
つてか「どうせその成績じや卒業できないし、金の無駄だからさつきとやめろ」つて親にまで正面切つて言われた。

……これはやめざるを得ない。

そう、俺には『俺の前で女の子が傷つくことを許さない』というポリシーがある。

ポリシーというか、もはや体質という次元にまで昇華しているといつても過言ではない。

キレるのだ。

女の子が傷つくという状況に遭遇すると、俺はキレてなんとしてでも女の子を助けようとするらしく。

らしき、といつのは時々記憶が飛ぶくらい完全にブチギレることだが
あるからで、今回の教師の件はそれ。

心配しなくともほとんどの場合は理性を保っている状態での行動
だ。

俺は自分で考えて自分で行動した結果、なんとしても女の子を守
るために行動をする男なのだ。

そんなポリシーがあるのならさぞかしモテることだらう、と思ひ
かも知れない。

が、残念ながら彼女いない歴『生まれてから今この瞬間まで（絶賛
記録更新中）』である。

なぜか？
俺が訊きてえ！！

強いて考えればキモいのだらう。

俺はブサイクではない（と信じている）が、決してイケメンという
容姿ではない……中の下といった感じだと自分では評価している…
…いや、これは重要な事じゃないな。

俺にとって『女の子を助ける』といつ行為に特別下心があるわけ
じゃない。単に幼い頃より女性をするのは男の務めだと教え込まれ
ていたことが原因である。

しかし彼女たちには、ちょっとしたことでも全力で助けよつとする
俺が気持ち悪く見えるのだらう。ってか、そうとしか思えない。そ
うでないと困る。それ以外の原因なんて俺には思い付かない……ま
あつまり、（良心的に解釈して）俺はせいぜい良い奴どまりなので
ある。

八ア

必殺『溜息トルネード』

効果・幸せが逃げる（自分のみ）

「もしかして、俺つて究極の駄目人間なのではないだろうか？」

と、マイホームの自室で一人じぢぢ。週に七回くらい疑問に思う内容だ。

- おい、駄目人間

なんか聞こえた。

「誰だ！駄目人間を俺なんて呼んだ奴は！！」

「どこから聞こえたのかも分からない不気味な声に俺はいきり立つ。馬鹿にされて黙っているほど俺は温厚じゃない。」

逆だ、逆…… ツツ 「//」の満載な奴め

なんか姿無き声にまで呆れられた？

まあ良い……おい駄目人間、一つ訊いてやる

なんか随分偉そうだ。

誰だよ？お前。

チツ、面倒くさい奴……」うちでは先に名乗らないといけ

ないのか……

なんかぶつくさ言つてゐるけど、名乗るのは重要な事だぞ！

-神だ-

ありがとう。

どこか遠い世界で幸せになつてくれ。

-待て待て！貴様の様な駄目人間に呆れられたとあつては末代までの恥になつてしまふ！話は最後まで聞け！！-

仕方ない、聞いてやろう。

-なぜ貴様、そんなに偉そうなのだ -

聞かなくてもいいんだが？

-うわ！待て待て！話す話す！…話を聞いてくれ！…-

分かつた分かつた、焦らなくて良いから。

そんなに俺に呆れられるのが嫌なのか？

-クソッ……まあ良い。我はある世界を支配する神だ -

…………寝て良いか？

-駄目だ。さて、名乗つたところで一つ訊いてやる -

全然、納得できないんだが……

- 黙つてろ。おい駄目人間。貴様、やり直したくは無いか？ -

うん？

どういうこと？

- つまり、勉強はできず、スポーツでは折角の特技を持って余し、おまけに奇異な信念のせいで人には忌み嫌われる…… -

待つて！？俺って忌み嫌われてるのー？ショックだ……

- ああ、死んだ方が良いとまで思われてるよつだな。貴様、友達いなう？ -

言われてみれば、俺に友達……いたつけ？

……………いない。

「鬱だ。死のう。」

俺はタンスに仕舞つてあるタオルを適当に揥ると首に巻き付け……

- 待て！だから、そんな駄目な人生を別の世界でやり直してみたくはないか？と訊いたのだ！！ -

俺はその言葉を聞き、ゆっくりとタオルから手を離すと、

「やり直したい！」

即座に答えた。

・良かれ・

そんな満足そうな姿無き声が聞こえた後、俺の目の前の風景がグニヤリと歪み、やがて視界がホワイトアウトした。

現在に至る……意味わかんねえ！！

一章 “とりあえず服を着たい”

「どうしようわけが分からない……」

冷静に自分の行動を振り返つてみたけど、あの意味不明な声に「人生をやり直したい」って答えたならこんな状況だつた、っていうことにしかならないよなあ……

「どうしたら良いんだろう?」

独り言は癖だ。

友達がない(ついでつき自覚)俺には、俺自身が数少ない話相手である。

だから、独り言に心の中で答えるとこつのは一つの俺の「ミコニケーション手段なのだ。

ただし、自分一人に限る。

「あの……」

その時、女の子から声をかけられた。

破壊的に可愛い、紅い髪の女の子だ。

ただし全裸……当然、俺には直視できません。

「お名前を、教えていただけませんか?」

そう恐縮気味に俺に問うてくる。

確かに、お互いこんな意味不明な場所で全裸で出会つた人間同士だ。コミコニケーションを取るためにも名前は必需品だよな。

「あー私、フイニフイアンって言います。フイニフイアン・

シユルツです。長じのでフイーつて呼んでください。」

人に名を尋ねる時は先に名乗る礼儀だと思い出したのか、女の子は丁寧な口調で自身の名を告げる。

「分かつたよフイー。俺、來生賢人。後に来るのが名前で、前のはファミリー・ネームね。」

「ケントさんですね……わあ、変わったお名前なんですね。」

日本ではまったく珍しくないんだけどね、やうやくお会いとしてやめた。

その代わり、「俺は『フイー』って呼び捨てにさせて貰うし、フイーも俺の事は『ケント』って呼び捨てで良いよ」と言つておぐ。フイーは「じゃあそつさせて貰いますね、ケント。」なんて良い笑顔で言つてくれた……めっちゃ可愛い。

「ところで、フイーってどうこう状況でいるの?」

そこで俺は一番気になつてゐる事を聞く。

なぜならフイーは俺と同様にこの場所で全裸でいるのだ。

俺がここへ来る際に巻き込まれたこの世界の人か、もしくは別の世界からこの世界へ来た俺と同じ境遇の人か、といついつの可能性があるからだ。

結果として、予想通りフイーは後者だった。

「私は……その……」

「……でフイーは口うる。

「ああ、いや、言いにくい事は言わなくて良いんだけど……」「いえ、信じていただけるか不安で……」

その時のフイーは随分と弱々しく見えた。

「心配しなくとも、大概の事は受け入れる器をもつてゐると思
うが、俺は。なんせ俺自身も、つこさつき信じられない体験をした
ところだしね。」

だから俺はそう極めて明るく言つてやる。

俺の予想が正しければ、フイーはほぼ俺と同じ境遇なのだから。

「ありがとう、ケント。私、実は自分の周りの世界に嫌気が
差して……そんな時に不思議な声を聞いたんです。『別の世界で
人生をやり直してみないか?』って……気付いたらこんな場所に……
」

やはりそうか。

「でも、信じられませんよね。別の世界なんて……」

「いや、信じるよ。実は俺もなんだ。」

「え?」

驚いた様な声は出したが、表情はそれほど驚いているようには見えない。

恐らくフイーも俺の質問や言葉から、俺の大凡の境遇は当りをつけ
ていたのだろう。

「俺も自分の世界が嫌でさ。俺って駄目人間じゃないのかな
?なんて悩んでたんだよ。そしたら『別の世界でやり直さないか?』

なんて変な声が聞こえて、気付いたらここにいたってわけ。「

「そなんですか？じゃあケントは、また私とは違う世界からここに来たんですね。」

俺にとつてもフイーことつても、もつこの場所が自分たちの住んでいた世界ではない事は疑いようが無い。

謎の声は『別の世界』と言つてゐるし、口振りからして世界は沢山あるようだから、俺とフイーのいた世界もまた違うのだろう。

「うへん、あの声は自分の事を『ある世界を支配する神だ』なんて言つてたから、今いるこの世界が多分その世界なんだと思うけど……」

「私も聞きました。でも、その神様は何がしたいんでしょう？」

困った。

何に困つたかと云ふと、手を顎に当てる顔を傾げるフイーが可愛過ぎることに。

しかも全裸。

そうだ、いつまでも全裸でいるのは良くない。

特に女性の裸なんて直視できない初心な俺の精神衛生上良くない。

だけどここは草原のど真ん中。

大事な所だけでも隠そうにも、ここには細長くて丈の低い雑草しか生えてないっぽいから、それすらできない。

「ひつひつ時はアレだ！」

「何ですか？アレって……」

俺はそこにある妙案を思い付いたが、どうやらフイーには分からなかつたらしい。

「簡単だよ。責任者出てこい！」

そう例の“声”を呼び出したらしい。
神様なんだし、人生をやり直すにしても、今どうなつてゐるかの説明くらいはさせるべきだろう。

後、服も用意させよつ……これ重要。

「…………」

「あの…………何も起きませんね。」

静かだつた。

「なんだ？」

「うわっ！ ピックリしたあ…………」

まさかの時間差攻撃だ。

きっとこの神様は性格が悪いに違ひない。

「あの、ケント？ どうしました？」

すると、そこにフイーが心底不思議な物を見る表情で声を掛けてくる。

あれ？ この自称『神』の声聞こえてない？

・自称ではない。私は本当に神だ……まあ良い。今は貴様だけに声を掛けておる・

ふうん。

で？

- 我を呼んだのは貴様であるひつへ -

そうだよ。

だから納得のいく説明を要求する。

- どうもこうもあるまい。私は貴様の様な駄目人間に人生をやり直す機会を『えてやつたのだ。感謝しろ -

分かつた！

お前馬鹿なんだ！

や～い、バアカバアカ！

「あの……ケント？」

そこでフィーが怪訝な表情で再度俺に声を掛けてくる。

「ああ、なんか例の“バカ声”が俺だけに話しかけてるみたい。」

「え……と……アハハ。」

だから俺は包み隠すことなく真実を答える。

俺のあまりにもの言い方に流石にフィーも苦笑いをするばかりだ。

- 齒に衣着せぬ小僧だな、まったく……だが、そこまで真実を求めるならば仕方あるまい。教えてやるひつ。貴様ら二人は元の世界の神に嫌われた存在なのだ。嫌われた経緯は違うがな -

え！？

俺つて神様に嫌われたの！？

-うむ。生まれてくる前から嫌いだつたそうだ。だからそんなにも駄目人間なのだな。ちなみに我も貴様の事は嫌いだぞ -

「つ、セ、……泣くぞ。

-貴様らの世界の神は貴様らを世界から手放したかったのだ。物の都合、我も自分の世界の事で悩みがあつたのでな、解決のためにも貴様ら一人を引き受けたことにした -

悩みつて？

-今は知らなくて良い -

そうかい。

まあ何だかんだで俺がこの世界に来る破目になつた経緯は分かつた。で、俺達はどうしたらいいんだよ？

-やれやれ……その場所から西に10キリほど進んだ場所に小さな村がある。そこで勝手に情報収集しろ -

なんてぞんざいな神なんだ……

ところで、キリってどういう単位？

-1キリは貴様の世界で言うべ、467キロメートルに相当するこの世界の距離の単位だ。分かつたな？では我は行く。我も忙しいのでな。わいばだ -

あー消えやがった……

「待ちやがれー!」

そう叫ぶが、 “声” が応える事は無かつた。

「ケント?」

突然叫んだ俺にフイーがやや不安げに声を掛けてくる。

「ああ、何でも無いよ。それよりここから西に行つたところに村があるらしい。目的も分からぬし、とりあえずそっちに行つてみようか?」

『元の世界の神に嫌われた』といつフレーズが嫌に引っかかつたが、しかし俺はそれをフイーに告げる』とせず、“声”が教えてくれた方向を指差しながらフイーにそう提案する。

「そうですね。 そうしましょう。」

フイーは何を疑問に思つ事もせず、俺の言葉に柔らかく微笑んで同調してくれた。

「あー服どうしようー!？」

なんかだんだん自然になつてきて忘れていたが、俺もフイーもまだ全裸なんだつた……

なんで全裸なんだよう……肉体しか世界を転送できなかつたつてどうせ言うんだろ? 神のくせに……

こんな可愛い子に全裸を見られるなんてトライアウスマだよ? よく考えた

ら自殺もんだよ……

まあ、代わりに可愛い女の子の裸が見れたから、それで帳消しだけ
ど。

「あ、それなら大丈夫です。」

「大丈夫って？」

「私とケントに服を」

「へ？」

瞬間、温かな光に包まれたと思つたら、気付けば俺の体は確かな布の感触に包まれていた。

簡単なイラストの入った白地のTシャツに前を止めずにジャケットを羽織り、下は『二ム生地のパンツ』という俺の私服だ。

「わあ、それがケントの世界の服なんですね。」

そう感心したような声を出すフイーも衣服に包まれていた。
なんだか服を着ちゃつて残念な気もするけど、そこは考えない。

フイーの格好は日本人の俺からすれば一風変わった格好に見えた。黒っぽい色をした簡単なブラウスの様な物に袈裟掛けのスカーフをつけ、何かの獣の毛で編み込まれたであろうシンプルな柄のマントの様な外套を羽織り、セミタイトスカートを思わせる赤っぽいが落ち着いた色合いの下衣であつた。

よくフイーに似合つていて可愛らしかつたが、今はそれどころじやない。

「え? フイー今……何した?」

三章 “言靈術師”

ほんとに今何が起きた？

だってフイーが一言口にした瞬間に俺とフイーが光に包まれて、そしたら服着て……

で、折角の女の子の裸なのに……じゃなくて…！

「何したの？」

「あの私……実は言靈術師なんです。」

そんな世紀の秘密暴露みたいな顔されても、『コトダマジュッシ』なるものに全く聞き覚えのない俺としてはどう応えて良いか分からぬ。

「コトダマジュッシって何？」

仕方なく、俺はそのまま問い合わせ返す。

フイーは気を悪くした様子もなく、むしろ分からなかつた事が嬉しいような表情で、それなりにぱと説明を始めてくれた。

「えーとですね……私の世界では言葉には魂が宿るという信仰があるんです。」

それは何となく分かる。

日本にも似たような風習はあるからだ。

「その言葉に宿る魂を具現化する術がありまして、それを『言靈』と呼びます。」

「なるほど。その言霊を使える人を『言霊術師』っていうわけだ。」

「フイーはそこで頷く。

「クという擬音が聞こえてきやうな控え目な頷きで、なんとも可愛らしい。」

「それで、言葉に宿る魂を具現化するってどういう意味？」

「例えばですね…… 案山子よ 」

フイーが何もない空間を指差しながらそう言つと、途端にその場に人型に象られた木の人形が現れた。

「 燃えよ 」

次いで、フイーがその案山子を指差しながらそう告げる。

すると、いきなりその案山子が凄い勢いで炎を上げて燃え始めた。ほんの十数秒で案山子は燃え尽き、そこには単なる燃えカスだけが残る。

「え……と……まさか……」

「はい。私は自分の言葉をほぼ何でも現実にする事が出来ます。」

「例えば、フイーが『死ね』って言つたら……」

「……死にます。」

それ、なんてチート？

「ちなみにさ、言霊つてフイーの世界じゃ珍しいものでもな

いの？なんかや、誰でも使えるものではないけど、割と使える人もいるよ的な……さ？」

最後の方は俺も不安になりながら訊いた。

「いえ、言霊は忘れ去られた過去の遺物です。恐らく、使い手は私だけかと……」

フィニーが自身を『言霊術師』だと名乗った時のあの苦渋の表情は、つまりはそういうことなのだ。

行き過ぎた力は恐怖の象徴であり、侮蔑の対象……

同時に俺はフィニーが『神に嫌われた』ということも理解した。言葉を現実にするなんて、いかにも神の所業……フィニーは神に近付き過ぎたのか……

「あのケント……私は、その……」

俺が衣服について困った表情を作ったのを見て、思わずフィニーは言靈を使ってしまったのだらう。

それはフィニーの優しさだ。

それでフィニーが傷付くなんて間違っている……そして俺は女の子が傷付くのだけは決して許さない男だ。

「そんな悲しそうな顔すんなって。言葉を現実に出来るなんて凄いじゃないか！羨ましいぜ！」

そう極めて明るく言つ。

実際、俺は嘘を言つていない。

そんな事が出来たらどんなに良いか、なんて一度も考えた事が無い

奴がいるはずがない。

「でも……私は……化物なんですよ？」

きつと元の世界で心無い連中にそんな風に呼ばれたんだろう。
それこそ言靈の力で住み易い世界にでもしてやればいい物を、優しい
「イフイー」にそんな事は出来なくて……

「フイ、か化物なら、俺は黒鹿者だな。ほら、俺の方かよ」

おどけて言つ。

あくまで「冗談」という色を強く、同時に言霊なんて物は大した事じやないという俺の本意を乗せて。

「ブツ、クスクス。」

「お、笑つたね。その方が良いよ、うん。」

可愛い子は笑つてるともつと可愛いね。

「可愛い子は笑つてるともっと可愛いね。」

え？ あの / / / / /

はつ！？

思つた事をそのまま口に出してしまつた！！

俺の言葉を聞いて思わず赤面するフイー……めっちゃ可愛い。そつこぎなくて!

俺、今フリーに正面切つて何を言いました？

「可愛い子は笑つてるともつと可愛いね」……死んだ方が良いですか？つていうか死んで良いですか？

「うー、めん。つい本音が……」

何を言つてゐるんだ俺え！

本音で！おしゃべり

もうフィニーの顔が湯でダコみたいに真っ赤で、このままだと頭に血が上って氣絶する勢いだ。

だから俺はこね

ながら僕はこれ以上墓穴を掘らない内は頭を下げた

「ごめん！悪気があったわけじゃないんだ！」

ちょっとフイーは泣き顔だつた。

でも傷付いた感じの泣き顔じやなかつたので俺は安心した。

これがもし、傷付いた泣き顔だつたら、俺は自分が女の子を傷つけたという事実に耐え切れず自殺したことだろう。

「ほんと、ごめん！」

「そんな……謝らなくて、良いよ。ビックリしただけだから

……そんな事、言われた事、無くて……」

その言葉には思わず顔を上げる。

「ハイ、ほどの可愛い子が『可愛い』って言われた事が無いって？」

そんな馬鹿な。

フィニーは元の世界でいつたいどれだけ酷い扱いを受けたんだ……

「でも、そんなこと悪気があって言えたら凄いかも、クスクス。」

でもフィニーは笑ってくれている。

今、笑ってくれるのなら大丈夫さ。

俺の傍にいる限り、フィニーがこれ以上傷付く事が無いよう俺は全力を尽くすのだから。

「じゃ、じゃあ、村の方、行ってみよつか?」

「う、うん。」

まだいろいろと顔の赤い俺とフィニーだが、とりあえず西にあると言つ村へ向かつて歩き始めた……歩き始めよつとした。

「で、西つてどつち?」

「その……どつちでしょ?」

見渡す限りの果てしない草原には方角を示す様な物は一つ無かつた。

「どつじよつ?」

「大丈夫ですよ、ケント。 方角 西を示せ …… あつちみ
たいですね。」

傷付けないと誓つたその場で俺はフィニーの言霊ヒカラに頼ることになってしまった。

「なんか……」めん。」

「アハハ。謝らないでくださいケント。心配せすとも、私は言靈を使う事にそれほど抵抗があるわけではありませんから。」

そう言つフイーの笑顔だけが救いだつた。
良かつた、傷付いてなくて。

ホッと俺は息を吐き、そして俺はフイーの指差した方向へ向かつて、フイーと共に今度こそ歩き始めたのだつた。

四章 “無氣力な村”

俺とフィーは相変わらずの草原が続く代わりない景色の中を歩いていた。

「そりいえば、さつきの獣は何だつたんだと思つ?」

「私たちがこの世界に来る際に都合悪く近くにいたこの世界の生き物なのではないでしょうか?」

フィーがそり予想を言つてくれる。

俺もそう思う。

なんせ、気付いたらあのオオカミみたいのに囮まれていたのだ。もしかしたら彼らのテリトリーに入り込んでしまっていたのかも知れない。

彼らは侵入者を排除しようとしただけだ。
食われるところだつたけど……

「元の世界で、あの獣に似た生物つていた?」

「そうですね、私の世界にはオオカミという生き物がいまして、それに近かつたような気はします。」

「そうなの?いや、俺の世界にもオオカミつてござ。やつぱり似てるよ。」

「そりなんですか?」

ソリして話をしながら俺達は世界についての情報を交換していく。

話の中で分かった事だが、生物については俺の世界とフィーの世界では大きな違いは無い。

イヌやネコ、今の話で言えばオオカミなど俺の世界にいる生物はフイニの世界にもいるようだ。

ただ、俺達の世界では伝説の存在とされているドラゴンとかペガサスとかいう存在はフイニの世界では割と普通に生息しているらしい。また機会があれば詳しく聞いてみたいところ。

「あーあれがそうじやありませんか?」

三時間も歩いた頃だろうか、果てしない草原の中にポツンと孤立するように一つの集落が見えた。
自称『神』が言っていたように、確かに小さな村だ。
恐らく人口は500人にも満たないであろう。

「ケント、行つてみましょ。」

「あ、ああ。」

何が嬉しいのか、フイニは俺の手を引きながら少し歩調を早めた。

そんなことしなくても村は逃げないって……と、手を握られて気が恥ずかしさ百億パーセントの俺は呴かなかった。

村の入口らしき場所に立っていた老人に「旅の方ですか?」と訊かれた。

老人は見た感じ70といった風体で、腰を大きく曲げて杖を突いていた。

服装は貧乏な農夫といった感じで、半袖で継ぎだらけの薄い生地のシャツのような上着にクウォーターパンツのような下衣。

老人は遠慮なく俺とフィーを舐めるように見渡し、そして怪訝な表情を作つての先程の質問だ。

多分、見慣れない服装の俺とフィーに警戒心を抱いているのだろう。

旅人がどうか、なんと答えるか迷つた俺はフィーに視線を送る。フィーも困ったような視線を俺に返してきた。

「まあ何でも良い。我々は余所者を歓迎しない。きみたちが、特段拒絶もしない。」

そう呟くよつて言つて老人の声は甚く弱つて聞こえた。

「だから、せめて村の者だけは傷付けないでくれ。」

老人は祈るようにそう言つて、村の中へ消えて行つた。

「……」

「どういう……意味なんでしょうか？」

俺は何も言う事が出来ず、フィーも言葉の真意が分からないつうで俺にそう投げかけた。

勿論、俺はそれに答える事は出来ない。

「ま、まあ拒絶しないって言われたんだし、とりあえず入つ

てみよつぜ。」

「そうですね。何か分かるかも知れませんし。」

疑問は残るが、とりあえず俺達は村の中へ足を踏み入れた。

現代日本で暮らしていた俺にはある意味新鮮な景色だつた。
藁で編み込まれた屋根を四本の木が支えているだけの、壁さえ無い
ケントの様な家屋が並び、どの家も大きさも形も大して変わりがな
い。

どの家にも近くには5メートル四方ほどの田畠が備えてあり、まさ
に農村と言つた風体だ。

だが……

「なんか……おかしいな。」

「ええ。」

違和感にはすぐに気付いた。
村人たちに一様に霸気が無い。
脱力しきつて動きが無く、まるで人形の様だ。

畑もまるで荒らされ放題で、新鮮な野菜など一切見当たらない。
形の崩れたキャベツらしき野菜などが申し訳程度に転がっているだけだ。

「ケント！ あれを。」

「つ！」

その時、何かに気付いたのかフイーがある方向を指差す。俺も即座にそれに気付き、二人でその人物に駆け寄った。

その人物は完全に腕が折れていた。

腕がまつたく有らぬ方向に曲がり、骨が皮膚を突き破る寸前なのか
薄らと白い色が肌の上から見える。

だというのに、痛そうな素振りさえ見せず、切り株の上に座つてた
だ空を無氣力に眺めていた。

「あのー。」

フイーが声を掛ける。

腕の折れているその人はフイーの声に微かに反応を示した。

「ああ……旅の人……か？」

声は消え入りそうなほど力が入っていない。

男性だった。

全く整えられていない無精髪を伸ばし、髪もクシャクシャで脂っぽ
い。

頬はゲツソリとしていて今にも死んでしまいそうだ。

「その腕、大丈夫なんですか？」

俺は男の質問には答えず、腕を指差しながらそう問うた。

「ああ、何でも無いよ、こんなのはね。」

男は何かを諦めたかのようにそう答える。

「……治れ」

フィーがその痛々しさを見ていられなかつたのか、男の腕を指差しながらそう口にする。

その瞬間男の腕はみるみる内に元の形に治つた……医者いはずなんだな、なんて場違いな事を思つ。

男は一瞬目を見開いたが、すぐに無気力な眼差しに戻る。

「これは驚いた。お嬢さん魔術師だつたのか。ありがとうございます。
でも……」

魔術師といつ单語は気になるが、それよりも男が言葉を切つた話の続きの方が気になる。
どうも楽しい話ではなさそうだが……

「意味が無いよ。この村は今日、滅ぶからね。」

どいか遠くから耳を劈く様な甲高い生物の鳴き声が聞こえた。

五章 “国崩しの竜”

一気に村の雰囲気が変わった。

何をするでも無く惚けているだけだった村人たちが、鳴き声が聞こえた瞬間両掌を合わせて何事かを祈り始めたのだ。

それは異質な光景だった。

村人たちは皆が皆頭を足れて、そして涙を流しながら鳴き声が聞こえた方向に向かつて一心に祈っているのだ。

それはどこか宗教染みていたが、しかしそれは神の降臨を尊ぶ人間の表情ではない……終わりを向かえる顔だった。

「な……何だ！？」
「ケント！見てください！－！」

フィーが促した方を見る。

すると、そこには山と見紛うほど巨大な生物の姿があった。
いや、今まで遠くに見える山だと思っていたのだろう。

それが見る見る内に大きくなり、やがてその姿の全容を現した。

それは竜と形容すれば良いのだろうか、それとも別の何かだろうか……

極めて獰奇的な鋭い牙がずらりと並ぶ巨大な口を広げた“そいつ”は、羽撃けば辺り一面を吹き飛ばしそうなほどの広大な翼を広げ、天を向いて一度大きく鳴き上げた。

「ハハ……なんだよ、アレ……」

自然と口から笑い声が漏れた。

人は恐怖の限界を超えるとむしろ笑えてくると誰かから聞いた事があつたが、まさか体験するとは思つても見なかつた。

足が譸々と震える……咆哮によつて震えた空氣の振動は容赦なく俺の体を叩き付け、逃げなければならぬといつ考えすらも押し込めさせてしまつ。

一瞬、あの龍に踏み潰されて死ぬ光景が克明に頭に思い浮かんだ。

「ケントーしつかりーーー！」

今にも氣を失いそうな俺の意識を踏み留めたのはフイーの声だつた。

フイーも泣き出しそうな表情で俺の服の袖を摘んでいた。

「あれは私の世界でも生息しているカレイプスという種のドワーフンです。あの巨大さと、一匹で国に甚大な被害を起す事ができるほど強靱さから『国崩しの龍』と呼ばれています。」

しかしフイーは氣丈だつた。

なんとか俺を落ち着けようとしているのか、震える声で巨の前の巨大な竜について教えてくれる。

フイー自身も、そう口にする事で怯えていた自分を必死に鼓舞しているようだ。

そのおかげで、俺は何とか冷静さを取り戻す事が出来た。

「ああ、ありがとフイー。」

落ち着く事のできた俺はフイーに礼を言つ。

「いえ……それでケント、どうしましょい?」

「フィーが問うてるのは逃げるかどうかということだろう。どういうわけか、この村の人間は誰も彼もが全てを諦め、あの竜に踏み潰される事を受け入れているようだ。」

それに、あんな生物を相手に立ち向かえるとは思わない……

卷之二

ケント!?

しかし俺は見つけてしまう。

ついに村を踏みつぶせる位置にまで差し掛かったカレイブスの足下に、死にたくないと言きじやくりながら母親であろう女性に必死に縋りついている女の子を。

「 フイーの声すら耳に入らず、俺は全力でその親子に向かって走る。幸いな事に、何とか親子が踏み潰される前にカレイブスの間に躍り出ることが出来た。」

同時に俺“”と親子を踏みつぶさんと足を振り上げるカレイapus。

あれ？女の子が傷付かないために割り込んだは良いけど……どうやつて助けんの？

もしかして、俺……ここで死ぬ？

ପ୍ରକାଶକ ମନ୍ତ୍ରୀ ଏବଂ ଅଧ୍ୟକ୍ଷୀ ପାଠ୍ୟଗୁଣ୍ଡର ପାଠ୍ୟଗୁଣ୍ଡର

死のイメージを頭から叩きだした俺は声を張り上げて守るように

両手を広げる。

たとえ俺が死んだって、女の子だけは傷付けさせないために。

だが、どうやら神は俺の事を見捨ててはいなかつたらしい。
まあこの世界の『神』つてアレだけど。

「 守れ ！ 弾け ！」

フィニーの澄んだ声が響き渡つた。

俺を踏み潰さんとしていたカレイプスの足は見えない壁に阻まれた
ように止まり、そして押し戻されるように足を弾かれたカレイプス
はたたらを踏む。

「 ケント！ 大丈夫ですか？」

「あ、ああ……た、たす、助かつた……」

自分が助かつたという実感が湧かなくて、俺はしどりもどりにな
りながらフィニーに返事を返す。

フィニーはその様子を見て、安心した表情を作る。

「 ケントは優しいですね。」

フィニーは俺を見てそう柔らかく微笑んでいった。

そんな仕草に俺は思わず心臓が跳ね上がつたが、しかしそんな場合
ではないと思い直す。

カレイプスは足を弾かれた事で崩した体勢を持ち直し、新たに現
れたフィニーを邪魔者と認識したようで、再び踏み潰さんと足を振り
上げた。

「『い』めんなさい。」

フィーの呟きは小さくて、それは隣にいた俺にしか聞こえなかつただろう。

今にも泣き出しそうな表情で、しかししつかりとした意志を持つてカレイブスを見つめるフィーの表情を見る事が出来た俺にしか……

「 倒れなさい 」

瞬間、カレイブスは何も無い空間で足を踏み外したよつにひっくり返る。

ドシン！といつ衝撃が襲い地面が揺れたが大した事は無い。

「 本当に『い』めんなさい…… 」

最後にフィーはやたらに小さくなつた呟き、そして……

「 消え去れ 」

その光景は衝撃だつた。

カレイブスがまるで空気にな溶けていくように消え去つたのだ。

サラサラと砂が舞つように体が欠けていくカレイブスの姿はやがて完全に消え去り、後には影一つ残らなかつた。

回想 “願いを叶える力”

私は一人、商店の連なる通りを歩いていた。
単に夕食のための食材を買うためだ。

「あの……すいません。」

いくつかの店を見て周り、やがて田当ての魚屋に辿り着いた私は控え目な小声で奥にいる店主に話しかける。

「はい！なんでしょう……おっと、これはこれはフイーフィア
ン様、今日はいかがいたしました？」

私の顔を見て、今まで威勢の良い大声で客に対応していた店主の声が一転して慄懾な物に代わる。

「はい、この魚とこの魚を……ください。
「ありがとうございます。」

他の客が相手であれば「へい、まいど！」と声を張り上げる店主が、まるで氣味の悪い人形の様に丁寧に腰を折つて挨拶をしてくれる。

「お値段は？」

「いえいえ、フイーフィアン様から金など取れませんよ。無料で結構です。」

そう言って頑なに私が財布を取り出さうとするのを防ごうとする店主には折れて、一度だけ礼を言つと、私は魚を受け取つて店主

に背を向けた。

背後で「チッ」と舌打ちをするような短い音が聞こえた。

「おじ見ろよ。シユルツのお嬢様だ。」

「馬鹿。指を差すな。それで機嫌でも損ねられたらどうする
気だ？」

そんなやり取りが聞こえた。

私は溜息を吐きたいのをグッと我慢し、気付かぬふりして通り過ぎる。

「ああ悪い。でもさ美人だよな。お近づきになりたいぜ。」

「救国の英雄だぜ？死ぬ覚悟があるなら、俺は止めないけど

よ。」

「ああ、御免だね。女に命を賭けるにしたって、あんな化物
はな。」

「同感だ。」

背後からそんなやり取りが風に乗って私まで届いた。

「……フウ」

今度こそ私は小さく溜息を吐いたのだった。

私には物心付いた頃から不思議な力があった。

ものを願い、そしてそれを口にする事で、どんなものでも叶うとう力だ。

言葉にすればどんな願いだって叶う……それは言葉には言い表せない喜びだった。

一言でどんな人だって助けてあげられる。一言でどんな難問だって解決する。一言で国を襲う驚異すら退けられる。

やがて人は私を恐れた。その恐れが初めて形になって私に向いたのは、私が国を滅ぼすほどの強大な嵐を一言で鎮めた時だった……

一度とその力を使わないで欲しいと母に言われた。

「なぜ？」と訊き返しても母は首を振るばかりで何も答えてはくれなかつた。

「なんで使っちゃ駄目なの？私、人を助けたよ？国を救ったよ？それって悪い事なの？」と……私はあまりに幼い……あまりに幼い衝動的な感情で母に詰め寄つた。

母の怯えた顔がやけに瘤に障り、気付けば私は一言呴いていた……

「教えてよ」と……

結果、母の口から告げられた、私に対する恐怖と戦慄は、幼い私の心を碎くには十分だつた。

言靈は失われたはずの伝説の魔法である。もはや、風化が激しくて何が書いてあるのかさえ分からぬ様な歴史書に薄らと書かれているという程度にしか現代には残っていない。故に、もはや言靈がどんな物であつたかすら、現代では分からぬとされている。

古代蔵書図書館の禁書庫の奥の奥。

一国の王ですら閲覧することを許されぬ領域に、私は願つて侵入した。

母の言葉に受けたショックで茫然自失状態だつた私はこの時の事を良く覚えていない……ただ、ここなら過ぎた力が人に受け入れられる方法だつて見つけられるかも知れないと、そう思つただけだった。

時に置き去りにされたかの様な空氣の流れる禁書庫のさらに奥、封印指定とされた数々の古書の中に『言靈』とだけ題された簡素な揃えの本が一冊あつた。

私は惹かれるようにその本を手に取り、震える手で一頁ずつ捲つていった。

書かれていた内容は、私の持つ『願つた言葉を現実にする力』について。

そう、私の持つ力は古代に失われたとされた伝説の魔法『言靈』だつた。

涙が出てくる思いとはこの事だろう。

本の中には言靈術師の宿命まで書いてある。

『ただ一言で世界を救い、ただ一言のために嫌われよ……と。

思えば私は人のため以外には言靈を使った事が無い。

今回、ここへ侵入するためだつたのが最初と言えば最初だ。

私はいつだつて言靈術師の役目を果たしていた。私はそのために生まれた存在だつた。

それが何とも誇らしくて、それで私は涙を流したのだ。

だつたら、私は嫌われたつて良い。どれだけ傷付いたつて良い。人を助け、国を救つて、そして世界を守る。それが言靈術師として生まれた私の宿命だと感じたから。

でも、数年の時が経ち、私の決心は鈍つっていた。

人を助けても感謝されない、國を救つても恐れられるだけ。見返りを求めたわけではないけれど、言靈を使うたびに私に向けられる忌諱の視線が強くなつて行く事に、私は段々と辟易していった……それでも私は言靈を人のために使う事を辞めなかつた。

やがて両親は死に、私一人が残された。

その頃には私は『救国の英雄』なんて呼ばれていた……人に忌み嫌われる救世主なんて笑つてしまつ。

そう、いつだつたかも忘れてけれど、私は急に気付いたのだ。言靈が……いや、私がこの世界で誰からも必要とされていない……されていなかつたことに。

-別の世界で人生をやり直さないか？ -

だからだらうか……私はどこからともなく聞こえて来たそんな言葉に、自然と頷いていた。

私と言靈が必要とされる、そんな世界を夢見て。

回想 “願いを叶える力”（後書き）

地の文ばかりで読み辛かつたですかね（汗
すいません^ ^；

六章 “ フィーの優しさ ケントの優しさ ”

一つ思つ……言靈つてスゲー！

何と言えばいいのか分からぬ。その凄さを言葉に出来ない。
ただ凄い。

フィーはカレイプスが一匹で国に甚大な被害を与えると言つた。
つまりカレイプスは 少なくともフィーの世界では 国が総力を挙
げて倒さなければならぬレベルの相手だつたといつ事だ。

それほどの敵を一撃……いや、一言で屠る力……

忌み嫌われると言つのも分かるが、それ以上に俺はそんな力を扱え
るフィーを尊敬した。

「う……う……ううう……」

しかしどうしたことか、フィーは泣いていた。

大粒の涙を眼からポロポロと溢し、手で口元を抑えるも止まらない
嗚咽の声が甚く俺の耳に残る。

そう……フィーが傷付いている。

それは言霊術師であることによつて元の世界で受けた扱いを思い出
したのか、それとも今フィーが“消し去つた”カレイプスを想つて
なのか……

きつと後者だ。

フィーは優しい。それこそ俺なんか足元にも及ばないくらい、その
心は慈しみに満ちているんだろう。

人を簡単に殺す、ただいるだけで人にとつて害悪を撒き散らすような、そんな存在であつたカレイプス相手にだつて、殺してしまつ事を本当に悔い、涙するほどだ。

「フイー……」

傷付いたフイーに何と声を掛けて良いか分からぬ。

ハツ……女の子が傷付く事を許さない、なんてとんだお笑い草だ。現にこうしてフイーは傷付き、その傷を癒してやる事すら出来ないなんて……

何が、フイーが傷付かぬよう全力を尽くす……だ！

俺は……俺は……

「ケント……どうしてそんな泣きそうな顔をしているんですか？」

涙は止まつたらしく、やや充血した眼を俺に向けてフイーはそう訊いてくれる。

今まで泣いていたのは自分のために、泣き出しそうな俺の心を救うために、フイーはそう声を掛けてくれる。

「フイー……っ！」

そこから先は言葉にならなかつた。
フイーがまだ涙を流していたから。

「あれ？あれ？おかしいな、ちゃんと止まつたと思ったのになのに、なのに……だって、ケントが泣きそだから、傷付い

てるから、私が泣いてちゃ駄目なの!」……」

どこまでフイーは優しいのだろうか。

自分が傷付いて悲しい時に、人の事を想うだなんて、言葉にするほど簡単な事ではないのに……

「良いよフィー。俺は傷付いてなんかない。フィーが傷付くのを助けられなかつたのが悔しかつただけだから。」

俺がそう言つて、フイーは顔をあげた。

「そんな！私は傷付いてなんか！」

やや語氣を強めて、フィーは意地を張つてそれを叫ぶ。

「じゃあついには……言靈で生物を殺した事が……あるのか

「二二」

そういう事なのだ。

フイーは元の世界で生き物を殺した事が無い。その重圧がフイーを今押し潰そうとしている。

「殺してなんか……」

同上

フイーは無言で頷いた。

「 フィーが口にした言霊は 消え去れ だった。
だから文字通り、存在ごと消し去ったのだろう。」

それはある意味において、命を奪うよりもさらに残酷な行為なのかも知れない。

でも、フィーは敢えてその言葉を選んだ。

なぜか？そんなもの答えるまでもない簡単なこと。
フィーは優しかつたのだ。

優しいから、フィーは村の人を殺そうとするカレイップスを止めた
かった。

でも優しいフィーはカレイップスにだつて苦痛を与えたくなかった。
だから、例えそれが命を奪うより残酷であろうと、フィーはカレイ
ップスを“消し去る”事にしたのだろう。

それらは全て俺の推測だけど、その後で大粒の涙を流したフィー
を見ていれば、俺の考えが間違つていないのであることは分かるは
ずだ。

「 フィー。悲しいなら言つて欲しい。傷付いたのなら強がら
ないで欲しい。」

強がるという行為は己を強く見せる為の行為であり、つまり心の
傷を見て見ぬふりをする行為なのだ。

それを女の子が傷付かぬようにと行動していた俺は経験的に知つて
いる。

「 フィーには傷付いて欲しくない。傷付いたのなら、その傷
を広げて欲しくない。」

「……」

口を挟まず、噛み締めぬけた。「いいわ。

「だからさ、そんな悲しそうな顔で人の事まで気に掛けるのはやめろよ。まずは自分の傷を癒してから……それからだろ?」

「…………うん。分かつた。」

もうフィニーは泣いていなかつた。
やや腫れぼつたい眼をしていたが、でももつとの表情に憂いは残つ
ていない。

「やつぱそりだよ。可愛い子は笑つてないと。
「フフ。もうそんな言葉で取り乱したりしませんよ。」

と、ちゅうと顔を赤くしたフイーからの返事だった……めりも

むしろ俺の方が赤面した。

「そりや残念。」

と、軽く肩を竦めて誤魔化した。

「ケント。」

「ん? 何?」

さて、祈った状態のまままだ状況が分かつてない村の人たちに何を言おうか、と考えているとふいにフィニから声を掛けられた。

「ありがとう。」

「つー／＼／＼／＼」

完全に不意打ちだつた。
今までの様な微笑みではなく、しつかりとした笑顔に思わず俺は顔
を背けてしまうほどに動搖したのだった。

「ああ、いやいや、どういたまして……」

囁んだ……

「ブツ、クスクス。」

笑われた！？

悔しいので反撃する。

「うわちこわありがとな。」

「ふえつ！？」

俺の感謝の言葉にフイーは素つ頓狂な声をあげて驚いた。

「ほら、カレイップスに踏み潰されそうになつた時を、助けて
くれたる？」

「ああ、いえ……はい、どういたしました。」

そう言つて頭を下げる。

「あ、あんた達……もしかして……カレイップスをやつつけち
まつたのかい！？あの災害の竜を！？」

その時になつて、漸く状況に気付いたのか、俺が守りうとした親子の母親の方が俺達に声を掛けて來た。

七章 “村長宅にて”

この世にはどうしようもない事がある、その体現だった。

フィニの世界で『国崩しの竜』と呼ばれていたというカレイブスは、この世界では『災害の竜』と呼ばれており、実際その有り様は災害その物と言えるだろう。

カレイブスは普段は自身の住処で大人しく寝ているだけの竜だが、至極たまに起き出して人里を襲う事があるのでそうだ。それがここ最近活発になっていたらしく、この近隣にあつたいくつもの村や町があのカレイブスに襲われて見るも無残な姿に変えられてしまつていたのだ。

当然、人は抵抗する。反撃もする。倒そうとする。しかし、人智の到底及ばぬ絶対的な力の前に、成す術もなく人は散つていくのだ。

先程の腕が折れていた人物は、他の村がカレイブスに襲われそうになつた際に急遽その村の救助に向かつた人物であった。しかし、そこにあつたのはカレイブスが畠を荒らし、家屋を吹き飛ばし、人を踏み躡る凄惨たる地獄。

男は打ち壊された家屋の一つの下敷きになつて腕を折り、しかし運良くカレイブスに踏み潰されずに生き残った人間の一人であつた。

男は助かつた数名の仲間と共に命からがら村に戻つて来られたが、村の中の空氣は生き残つた英雄を迎えようと言つ物ではなかつた。男が村に辿り着いた日から三日後、今度はこの村をカレイブスが襲うだろうという“予言”があつたからだ。

もう村の人たちは諦めた。

どれほど抵抗しようとも、人間などは紙屑の様に蹴散らしてしまつ
カレイプスの前では無に等しかつたから。

また、カレイプスの恐ろしさを直接その目で見た男たちが、カレ
イプスが今度はこの村に来ると知つた瞬間、幼子の様に恥も外聞も
なく泣き出してしまつたことも大きい。

絶望は瞬く間に村中に伝播したのだった。

「なぜ、逃げなかつたのですか？」

フイーが問う。

「逃げた後、我々に生きしていく場所は無い。この村が我らが
生まれた場所で、そして死に場所なんだ。」

入口からは見えないが、村の裏手には墓地があるという。
この村ができるから、この村の中で死んだ人間全員の眠る歴史の刻
まれた広大な墓地が……

それが、村で産まれ、村で生き、村で死ぬ我々の覚悟なのだ、と
村長は語つた。

「おにーちゃん、助けてくれてありがとね。」

ふいに脇から声を掛けられた。

俺が守つた……守りうとした、泣いて母に縋り付いていた女の子だ。

そう、親子は偶然にも村長の配偶者と娘だった。

だからこゝにして感謝の言葉と手厚い歓迎と共に俺とフイーは村長宅に招かれている。

ちなみに村の入り口にいた老人は前村長であり、現村長の父親。この村では村長はこの家の長男がなるという決まりがあるとのことなのだ。

村長の奥さんは旅人らしき人物が村に来たという前村長の話を聞き、すぐに立ち去るよう俺達に警告をしてくれるために外へ出、それに娘が付いて来てしまったところでカレイブスが現れた……そういうことらしい。

ちなみに今、奥さんは家の奥に引込んでしまっている。
なんでも腕に縫をかけて俺達を歓迎する料理を作ってくれるのだと
か……なんか、申し訳ありません。

「だが、何度も言わせてもらつが、娘と妻を……そして村の
者を助けてくれてありがとう。君達にはどれだけ感謝しても足りない。」

娘が俺達に感謝の言葉を告げたのを見て、また感極まつたのか村長は涙ながらに俺達に頭を下げる。

「（実際、何度もだつける？）
「（アハハ……何度もでしょうか？）」

「うそり、聞こえない様にフイーと言葉を交わす。

村長はカレイブスについて話してくれながら、話の途中、何度も

何度も礼の言葉を繰り返してくれた。

勿論、助けた側として礼を言われることはちがくではないし、嬉しい事だ。

でも、数え切れないくらい同じ内容で頭を下げられては、いくらなんでも居た堪れなくなつてくるという物だ。

「いえ、そんな大したことはしていませんので。」

俺は掌を振りながら村長に応える。

実際、俺何もしてないし……

「カレイブスを倒した事を何でも無いだなんて！…そうだお聞かせ願いたい！一体、どんな方法でのカレイブスをやつつけたのですか！？」

村長がやや興奮した面持ちで俺に詰め寄つてくる。

「あ、あの……それは……」

フィーがまた思い出してしまつたのか顔を暗くしてしまつ。

フィーを傷つけた村長を思わず殴つてしまいそうになる。が、村長は言靈の事など知らないのだ……当然、フィーがカレイブスを消しそうした事でどれほど心に傷をつけたのかも……

だから、俺は何とか殴つてしまつ事だけは思い直す。

どうやら村長は俺が倒したと思い込んでいるようだし、これ以上フィーを傷付けないためにもここは全て俺の手柄にしておこう。それが優しさと言つ物だ。

「！」の俺がグルッと投げ飛ばしてスパコーンと吹っ飛ばした
んですよ。」

「……」

最低だつた……まさかのダダ滑りだつた……泣いて良いですか？
フィニだけが、気を使つてくれてありがとう、とでも言つような表
情をしてしてくれたのが救いだつた。

「あーそりですか！これはお察しえきずに申し訳ありません
！」

すると村長による謎の謝罪。

まさか！俺のギャグを察せなかつた事を！？

やめて！ギャグを察せなかつた事を謝るのはやめて……むしろ死に
たくなるから！！

滑つたのならスルーしてよ！フォローとかやめよ？ね！？

それもう虐めだから！滑つた人をギャグを言われた側がフォローす
るとか虐めだから！

「勇者様は自身の力をそつ軽々しく人に教えたちは出来ませ
んよね……すいません。」

時間が止まつた気がした。

「はい？コウシャ？コウシャって勇者？
何それ？新手の虐め？

「勇者って俺が？」
「はいー。」

村長はいい歳して屈託のない笑顔でそう呟いた……言い切った。

「わーーおこーちゃん、 ゆーしゃれまなの？」

女の子がキラキラした眼で俺を見ている。

その田の中に輝くお星様やめて…眩し過ぎるよ…

「えへと……勇者って何ですか？」

その俺の疑問が解消される事は無かった。

村長が何か答える前に、 村長宅の扉がノックされたのだ。

「おや? どなたでしょ? 少しお待ちくださいね。」

村長が席を立ち、 扉に手を掛ける。

しかし、 扉は村長が開くよりも前に、 扉を跳ね飛ばさん程の勢いで開け放たれた。

そこには若い端正な顔立ちをした金髪の美青年が立っていた。

青系の装飾の施された鎧を着込み、 腰には剣を携え、 背中に盾を担いだ騎士然とした青年は、 その表情を厳しく引き結んでいる。

差し詰めは初任務に張り切る若い兵士と言った風体だ。

「私は帝国騎士団シュレン隊隊長シュレン=クル=ルグタンスと申します！ 貴殿の依頼を承り、 カレイップス討伐のため馳せ参じた！」

いろいろ言いたい事はあるが、 とりあえず一つ思つ。」

「ひとつ……めんどくさい

八章 “口は災いの……”

村長は嬉しさ(反面、困惑したような表情を浮かべていた。

「おや？ 来ては頂けないものと聞いておりましたが？」

何となく察した。

村長はカレイプスがこの村を襲うと知った時、国に救助を依頼していたのだろう。だが、国からの返事は芳しいものではなかつた……つまりこの村は国に見捨てられた村だつたわけだ。

「なんか……あの神様殴りたくなつてきた……」

「あ、アハハ……」

俺のそんな呟きにフィニーは苦笑いを洩らすが否定はしなかつた。

「自分が無理を言つて部隊を出させて頂きました！ 民を守るのは我々の務め！ 国が民を見捨てるなどあつてはならぬ事です！ ……」

美青年……………シュレンはそう熱く語る。
なるほど…………空回り野郎か……

「それで？ カレイプスはどうですか？ 我々シュレン隊が蹴散らしてくれましょー！」

お一言い切つたよ。

国崩しの竜だぜ？ 災害の竜だぜ？

それを倒すだけならいざ知らず、蹴散らすときたか。

「ちなみにフィーの世界ではカレイプスを倒すにはどれだけの人間が必要だった?」

「そうですね……国の最強クラスの精銳たちが200人……といったところでしょうか?普通の兵士では1000人は欲しいですかね。」

つまりフィーは文字通り一騎当千というわけだ。

さて、このシュレン隊とかいうのがどれほどの規模か知らないが、扉の外の気配からして一個中隊もいるとは思えない。

当然、俺に気配を読むなんて高尚な事はできないが、まあ百人單位で人がいればさすがに俺みたいな一般ピーポーでも分かるよ……多分。

「それはそれは、わざわざこんな辺境の村にまでありがとうございます。ですが御心配には及びません。こちらの勇者様が既にカレイプスを倒してしまわれました。」

「勇者?」

そこでシュレンは初めて気がついたと言わんばかりに怪訝な表情を俺達に向かた。

いや、睨んでいると言つても過言ではない。

「貴様ら、何者だ?」

まあ見るからに怪しい俺達だ。警戒するのも分かる。

でもさ、いつだって抜刀出来るように手を剣の柄に添えるくらい敵

意を剥き出したくなるのはやつ過ぎだらう。

そんな目で睨むなよ……反抗したくなるだろ？

「人に名の聞くならまずは先に名乗るのが騎士道つてもんだろ？まさかそんな格好しておいて、自分は農民です、なんて言わないよな？」

「なー貴様！」

ショーレンのその端麗な表情を怒りに歪め、語氣を強める。

え？ なんでわざわざ怒らすのかって？
イケメンは敵だ！……とか思つていませんよ。ええ、思つていませんとも。

元の世界でイケメンに好きな子盜られた恨みとか全く持つていませんよ。持つてないって。

「け、ケント！？」

俺の露骨な挑発にフィニーが不安そうな表情を俺に向ける。

大丈夫だつて。

今時こんな挑発、小学生だつて乗らないよ。

と、そういう意思を込めて軽くフィニーに手を振つて応える。

「よからい。私はショーレン……」

「ショーレン＝クル＝ルグタンスさんだろ？ 知つてるぜ。」「あ、まあ……馬鹿にしているのか！？」

シュレンの表情が怒りのあまり見る見る赤く染まっていく。

「ああ、俺ケントリーの。よろしく。」

最後にあくまで軽い口調で名乗る。

騎士道を重んじるタイプにはこいつのも結構イラッてくるんだよね。

まあそれだけなら俺の立場はちょっと嫌なやつ程度で済んだんだ
るうけど……

「貴様ら臆病者の役立たずが国で尻込みをしているうちにこの勇者様がカレイブスなどやつつけてしまったわ！ほれ、帰れ帰れ。」

村長が火に油を注いでいた……おいおい。

まあ考えてみれば、この騎士達の到着はカレイブスがこの村にやつてくるのに間に合っていない訳で、俺達がいなければこの村は間違いなく滅んでいたんだよね。

そこへいくと、村長からすれは国から見捨てられたと感じる訳でまあ実際見捨てられていた訳だけど 国への恨みはこの若い騎士に向く訳だ。

となれば、俺の挑発に乗つかつて言いたいことを言つてしまおつとこう村長の……まあなんだ？よく言えれば子供心つてやつだ。

「だいたい貴様のような若造などカレイブスに敵うか！馬鹿者。」

いやー シュレンって俺よりは年上に見えるけどねー

あ、ちなみに女の子はシュレンが家に入ってきたのを見て、大人の話だと察したのか奥へ引っ込んでいった。

空気が読める子って素敵だよね。

「貴様など勇者様の手にかかればちよいのちょいだー！」

あれ？ 話が変な方向に……

と、思つたときには遅かつた。

「つまり、私はそこの男よりも劣つた存在だと、そういうことですね？」

あれ？ あれ？

なんかシュレンの握り拳がプルプル震えてません？ 頬に青筋生えてません？

こういうのって何て言うの？

いわゆるキレた状態ですか！？

「ケント、私の国には愚か者を戒める『戒訓』というものが

あるんですよ。」

「へえ、そうなんだ。」

日本で言う諺みたいなものかな？

でも、なんでフィニーは今そんな話を？

「その中に『諺には口から起くる』といつものがあります。」

あーなんかそれ聞いた事ある。

日本にもあるね。『口は災いの元』っていうの。

「私、ショレン＝クル＝ルグタンスは貴様に決闘を申し込む
！！」

へ？

「ケント、頑張ってください。」

ニッコリ微笑みながら俺にそつそつハイ一の口調には、なんだか責めるような気配が漂っていた。

九章 “決闘つて……喧嘩？”

シュレンが「表に出ろ!」と言ひので仕方なく後ろについて外へ出た。

そこには一十人余りの似たような格好をした兵士たちが並んでいたが、どうもその表情は微妙な物だ。

まあそういう。カレイブスなんて強大な敵に立ち向かうと思つて氣を引き締めてやつて来てみれば、そこにあつたのは喜び勇んで涙を流す村人たちの姿だったのだから。

つてかむしる、シュレンは村長の家に着くまでこの空氣に氣付かなかつたのかと問いたい。

多分氣付かなかつたんだろうなーなんかシュレンつて顔は良いけど馬鹿っぽいしー

「また隊長の悪いクセが出ちまつたぜ。」

「ああ、あれさえなければな……」

「全く……鬼神の様に強いくせに、なんでああも頭が弱いのか……」

そんな周りの騎士たちの話し声が聞こえる。

やつぱりか、と呴きたい。つてか、それで良いのかシュレン隊の諸君……

「それにしてもあの男は何者だ?」

「シュレン隊長との決闘に応じるなど正氣とは思えんな。」

「隊長と一緒に打ち勝てる人間など、帝国内には一人しかお

らぬところの」……

聞こえてるよ皆さん……

この人そんな強いの！？

悪いけど、俺つて一般人ですよ？

ちょっと喧嘩は強いかなーってくらいの、素人なんですけど！？

「なんでも村長があの男を勇者だと仄めかしていたとか。」

「勇者つて、あの『鳳印』^{ホウイン}のか！？御伽話じゃないのか！？」

「それは分からんが……しかし、もし伝承通りの勇者だとすれば……あるいは……」

すまん……期待には応えられそうもない。

だつて俺つて駄目人間なんだもん。（自虐）

あと、仄めかしてないぞ。盛大に言い切ったよ。

あーあ……調子に乗った結果がこれだよ……

「ケント！頑張って！」

なんかファニーの応援が辛い……
謝つたら許してくれないかなあ。

「ね、ねえファニー？」

「何ですか？ケント。」

「ごめんなさい、許してください。」

「駄目です。挑発したのはケントなんですから、ちゃんと責
任取らないと。」

厳しかった。

でも一つ言わせて貰いたい…… 実際ブチギレさせたのは村長ですよ
ね？

「勇者殿！どうぞグルツと投げ飛ばしてSPAコロンと吹っ飛
ばしてやつてください！！」

つか村長テメエ、それが見たいだけだろ！

それが見たいためだけにシュレンを俺に喰けやがったな！

「では、行くぞ。」

シュレンは腰の剣を鞘から抜き放つて右手に握り、左手に盾を構
えて言う。

剣は真っ直ぐな両刃の刀身が80センチほどある、確かロングソー
ドとかいう西洋風の剣だ。

いつの間にか俺とシュレンは他の騎士たちに囲まれた円の中で向
かい合つていた。
つまり彼らが立会人にして、逃がさないための柵つてわけか……

村人達も流石の物々しい雰囲気に、なんだんだと野次馬の様に
集まつて来た。

「おい待て！お前は丸腰の人間相手に剣を抜くのか！？」

今にも襲いかかつて来そうな雰囲気のシュレンに向けて俺はそう
叫ぶ。

「フッ。グルツと投げ飛ばしてSPAコロンと吹き飛ばす男に

武器がいるのか？

「……」
「……村長の言葉聞いてたのか……」

「では、参る……」

ショレンは右手の剣を大上段に振り被り、俺に向けて叩き付けて来た。

あーこれは直撃したらしゅなーと、俺はどうか他人事のようにその動きを観察していた。

剣の切つ先が俺の脳天を掠め、刃は迷つ事無く俺の眉間にめり込むだろう。

そんな剣の軌道が見えた。

「メタルスライムつてきつとこんな心境なんだろ？　当たつたら死んじゃう。」

某有名なゲームの凄まじい回避率を誇る敵キャラの名前を呟きながら、俺は体を半身にして、また少しぎりす事で難なくその剣を回避した。

「なに！？クツ！」

ショレンは驚いたようだが、すぐに振り下ろした剣を切り返し、俺が避けた方向へ今度は横薙ぎに振るつてくる。

剣の切れ味とショレンの実力次第だが、とりあえず当たれば俺の上半身と下半身が両断される軌道だ。

「でも、まあ当らなによね。」

しゃがんで避ける。

避けられるとは思つていなかつたであら「シユレンは、剣を思い切り振り抜いたせいで体勢を崩した。

「とりやつ！」

「アグツ！？」

流石に鎧部分を殴つては俺の手が壊れてしまつ。
そんなわけで、俺が最も気に入らない部分、すなわちイケメンの顎に思い切りアッパーカットをブチ込んだ。

シユレンは吹つ飛びぶよつた事は無かつたが、流石の衝撃にフフフラと二三歩後退した。

「俺つてさー実は地味に喧嘩だけは強いんだよねー」

駄目人間かも知んないけどさー、と付け加えよつとして……やめた。理由は……推して知るべし。

「ふん、戯言を。この程度で倒れる私ではないーー！」

まあ若いっぽいけど、むしろ若くして隊長なんて役職についているだけにそれなりに歴戦の勇士なんだろう。油断していたから今一発入れたけど、多分もうそんな隙は出来ないよな……

「うわっーおつとーうひっー！」

迫りくる止まらない斬撃を俺は全てギリギリで避ける。

ロングソードは片手で扱うための剣だと、昔誰かに聞いた事がある気がするけど、それにしたってこんな速度でガンガン切り返せるなんて異常だ。

俺には一応動体視力って言う特技がありし、身体能力もそれなりに自信あるから何とか避けられるけど、これはそこの奴ではあつていう間に細切れにされてしまうだろう。

俺だって気を抜いたら一瞬でこの世からサヨナラだ。

いや待て待て……『俺だって』って……調子に乗るなよ俺……今こいつして俺が避けられてるのが既に奇跡だらうがよ。

とか考えていたら、ふいに斬撃が止まる。
うん?と思つてシュレンを見ると何やら不敵な表情で俺を睨んでいた。

「なるほど、その身こなしさは素人ではない。」

素人ですけどね。

「カレイップスを倒したというのもまんざら贔と云つわけではなさそうだ。何か切り札があるんだろうな。」

倒したのは俺じゃないし……まあ、切り札って言えば確かに最強のがあるけど……

「ふん。私の剣術はそれほど褒められたものではないが、そ

「それでも」」まで避けられるのは流石に悔しいな。

え？ 壊められたものじゃないつて？

でもあんた、『帝国』とやらで「一番田」強いんだろ？
さっき部下達が言つてたぜ？

「ならばもう小手調べはやめよう。少し力を出そう。」

出でなくて良いつて…！

「おい！隊長がアレを出すぞ！」

「一分が二てる！総員！村人に被害が出ないよ！全力で守れ！」

ああなるほど。俺達を囮んでいる騎士は何も俺を逃がさないための柵だけじゃなく、シュレンが実力を出した時のとばっちりが周りに行かないように守るためでもあるのか……

……そんなに危険なのかよー シュレンのアレとやらせーーー

「【精靈よ】」

シコレンは剣を腰の鞘に戻し、空いた右手を上空にかざしながら
そう囁く。

「【破壊を求める業火の理】」

その右手に何やら言い知れぬ力が収束していくのを感じる……言うまでもなくヤバげだ。

「【獸を象りて敵を撃ち碎け】」

シュレンが上空にかざしていた掌を地面に叩き付ける。瞬間、地面から噴出した何本もの火柱がグネグネと蠢いて何かを象り始め、最終的には何匹もの炎の獸が出現した。

うん……俺、ピンチ……

十章 “喧嘩両成敗”

えーと…… 1、2、3、…… 6匹……

何度も数えても6匹の炎の獣がシュレンの足元に出現している。
何だよそれ…… 反則でしょ？

「卑怯だぞ！ 決闘つてのは一対一じゃないのか！！」

「何を言つか！ 魔術は我が技術であり我が身の一部！ 故にこれらは全て私の分身たちだ！！」

マジユツね…… あーはいはい、魔術ですか…… なるほどなるほど。

「つまりシュレンとやらは丸腰の人間相手にも大勢でないと怖くて戦えない臆病者と言う事でオーケー？」

「貴様…… まだ私をそもそも愚弄するか…」

あれ？ プライドを煽つて魔術とやらを引っ込めさせる作戦だったんだけど……
もしかして、失敗？

「許さん！ その罪！ 全靈をもって贖わせてやる！ …… 掛れ！ ……」「つてえ！ …… やつぱりそいつら嗾けてくんのかよお… ……」

シュレンが右腕を振つた瞬間、6匹の炎の獣が一斉に俺に向かつて襲いかかつてくる。

俺は右方向に身を投げ捨てるように飛び込んで何とか初撃は回避。次の攻撃が来る前にすぐさま立ち上がる。

炎の獣は散開し、6匹で円を描いて俺を取り囲んでいた。

「これはアレですか？逃げ場無しつてやつですね……」

そんな事をぼやく。

炎の獣は俺から絶妙な間合いを取りながら、いつでも飛びかかる体勢を取つて俺を睨み続けている。

俺が一瞬でも隙を見せようつものなり一気に襲いかかってくるだろう。

「謝れば、今なら許してやるが……」

そこにシュレンのありがたいお言葉。

「うだ謝つてしまえ。

そつすりや騎士道を重んじるであれシュレンの事だ。
戦意の無い相手に襲いかかるよつな真似はしませ。

だから俺は一度ぐくっと喉を鳴らし……

「御免だね。お前みたいな頭の悪そうな奴に下げる頭は持つてねえんだよ……」

気付けばシュレンに向かつて一気に駆け出していた。

丁度炎の獣同士の隙間にシュレンは立つていて、即座に殴りかかるば炎の獣に襲われる前に一発くらい殴れるかも知れない。

「愚かな……だが、その心意気は認めてやるが……」

シュレンは腰の剣に再び手を掛け、抜刀する。

同時に、周囲から炎の獣が襲いかかって来た。

予想より動きが速い。

俺とシュレンの距離は約2メートル……一步で踏み切れなくもない距離だ。

だが、この速度では俺の拳が届くより、炎の獣が俺に突撃する方が早い。だから……

「だからテメエはアホなのぞ!」

「何!?」

俺は殴るのではなく、そのままダイブしてシュレンの脇下を潜り抜ける。

殴るには口スタイルがあるが、もともと身体能力の高い俺だけに、そのまま飛び込むなら殴るよりも遥かに速い。

結果、俺を追いかけていた炎の獣はシュレン自身が壁となり、そのまま“壁”に激突する。

「ガツ……ハアツ！」

シュレンは右手の剣を一閃、炎の獣を薙ぎ払った。

故にシュレンにダメージは通っていない。

しかし、切り札まで避けられては、シュレンの精神的ショックは相当だらう。

そう思つたのだが……

「なるほど。これでも駄目か。面白い。」

なんかむしろ良い表情をしていた。

あれ？切り札って破られたらショックなもんじゃないの？

「ハイラルにはとても敵わないが……貴様、ケントと言つたな？」

「ああ、そうだけど？」

「良いな。貴様、一度良い。私は実力が近い相手と戦いたかったのだ！！」

ヤバい！？なんか凄い良い顔してる！

「いかん！隊長は本気を出す氣だ！」

「総員！命を捨てる覚悟で挑め！－！」

「－－－ハッ！－－」「－－－」

待つて！？とばっちりが周りに行かないようにする人たちが命懸け！？

銃口を直接向けられる俺はどうすればいいの！？
死にたくないんだけど！－－

「【精靈よ】」

今度は剣を握ったままシュレンは唱え始める。

「ケント、反省しましたか？」

しかし、そこでシュレンの動きなど何でも無いかのような気楽な

口調で背後からフィーに話しかけられた。

「うん…反省した…もう一度と軽々しく挑発なんてしません…」

とてもシュレンから田話を事など出来なかつた俺は、その姿勢のまま心の底からそり出す。

「やうですね。それなら……」

フィーはやじで一田言葉を切つた。その間にもシュレンの詠唱は続く。

「【崩落を求める破滅の理】」

「ガガガガと地響きが鳴り響き、シュレンの持つ剣が向やう座して輝きを帯び始める。

「【剣に纏いて大地を切り裂く力となれ】」

ピッカー！と眩しいほどの輝きを放つ剣をシュレンは上段に振り被り、俺との間合になど関係なくそのまま振り下ろす……振り下ろそうとする。

「止まれ」

フィーが小さくそう眩いた瞬間、シュレンは剣を上段に構えた体勢のままピタリと制止する。

「なつ…なんだこれは…！貴様！何をした…？」

俺は何もしてないけどね。

この後、何が来るか何となく分かった。
だから俺は何とか堪えようと両足を踏ん張ることにした……意味無
かつたけど。

「喧嘩両成敗」

「ブゲツ！」

「グハツ！」

上からの膨大な圧力が俺とシュレンを纏めて叩き潰した。

十一章 “帝都への招待”

勿論、フィニーが俺達を殺そうとするはずなんて無いから、言靈の威力も俺とシユレンの意識を奪つ程でもなかつた。

「痛い……」

痛くて泣きそうだ。

きつとフィニーは分かつてないんだ……意識が飛んだ方が楽な事もあるつて……

「う……くつ……今のは一体？」

シユレンはそんな事を呟きながらゆっくりと体を起こします。同時に俺もシユレンに隙を見せぬよう起き上がつた。

「おい今の……」

「ああ、隊長を地面に倒れさせたなんてハイラル騎士団長以外に出来る奴がいたのか！？」

「ケントとやらと一緒にいるあの女が何か言つていたが、魔術が発動した形跡はないし……まさかあれが勇者の力だと言つのか！？」

「しかし、その割にはケントも一緒に倒れたぞ？」
「力が膨大すぎて扱えていないのか？」

次々とそう囁き始める騎士達。

なんだか話が勘違ひの方向に収束し始めているような気がする。

「いや、今は……」

「凄いなお前……」

全部フイーの仕業です。俺は何もしていません。と、セリフをつ
として、その前にショレンに割り込まれた。

地面にキスする余地になつたところに向て良い笑顔なんだろう
……

「すまない。私は君を……ケント殿を見くびっていたようだ。
無礼を説ぎさせて頂きたい。申し訳なかつた。」

セリフをつてショレンは俺に頭を下げる。

その表情は本当に申し訳ない事をしたという反省に満ちていて、
もの凄く心苦しくなつた俺は思わず謝り返した。

「いや、じつちじやくいません。よくわからない意地を発揮
して変に挑発したりして……『めんなさい。』

悪い事をしたときには素直に謝れる男になれ、とは俺の父の教え
だ。

残念ながらショレンに先に謝られたけど……

「そんな！ケント殿は謝らなくても良いのです！！大体私が
ケント殿に武器を向ける事自体既に間違つていました。」

ああ、うん……それは確かに。

「カレイプスを討伐したのはケント殿だと村長も言っておられましたからね。我々が間に合わなかつたのに、この村が無事なはあなた方がいたお陰だつた……まさかそのような方に一時の感情だけで決闘を申し込むなど……どうか、この未熟な私を許してほしい。」

そう言つてショレンは再度頭を深々と下げる。

「うーん……悪い奴じやないし真面目な人なんだけど……挑発したのは俺だし、嗾けたのは村長だし……あれ? シュレンってどこが悪いの?」

「ああ、そうか……そもそも俺達が恩人であるといつそこに考えが回つていなかつた頭が悪いのか……」

は。

「では!」

「ああ、許すさ。だから、挑発したりした俺の事も許してくれれるか?」

「はい!」

そこで俺とシュレンは握手を交わす……友情の誕生だ。

「大丈夫ですか?」

「ああ、フィーにも迷惑をかけたよな。悪い。」

まさか罰として文字通り叩き潰されるとは思わなかつたけど。

喧嘩両成敗か……フィーつてどことなくお母さん的大だよな。

「ところで、貴女は？」

そこでシュレンがフィーに声をかける。……」につはフィーにすら気が付いていなかつたのか……

「あ、はい。私はフィーフィーと申します。」

フィーはフルネームを名乗るつとして、途中で止めた。

フィーのフルネームは『フィーフィアン・シユルツ』。対してシュレンは『シュレン』『クル』『ルグタンス』。ついでに俺は『來生賢人』。

つまり名前の違ひのせいで変に疑惑を持たれなくするためだらうと俺は勝手に推測した。

「そうですか。ではケント殿、フィー殿。先程は大変迷惑をおかけしました。どうか、お詫びをさせていただきたく、帝都までご一緒していただけないでしょうか？」

そう、シュレンは言つた。

まあなんだ？

シュレンのフィーを見る目が若干熱っぽいのは、まあフィーは美人だし許してやるとして、俺とフィーを帝都に招くつて？なんか……どつかおかしい気がするぞ？

……ああ、分かつた。出会いて五分で決闘騒ぎがヒントだ。

シュレンは行き当たりばつたりなんだ……もしかして、俺より馬鹿なんじや……

ほんと、困難が隊長で大丈夫か？帝国騎士団とやらの諸君……

「ああ分かつた。折角だからそいつをせしむるよ。フィーも良いだろ？」

「ええ。」

フィーも笑顔で頷いた。

シュレンの皿線に気付いている様子無し。

ちょいと鈍いんじゃないかい？

「たださ、ケント殿なんて他人行儀な呼び方やめるよ。さつきまで貴様とかお前とかだつたじやん？仲直りもしたわけだし、ケントって呼び捨てにしろよ。な？シュレン。」

「そうですか？ではそつさせていただきましょ。」

なんか堅い奴だな。

実直と言つか何と言つか……

「それでしたら、私の事もフィーと呼んでください。その……敬称をつけられる事に慣れていないので……」

そこにフィーがおずおずと発言する。

きつと化物なんて呼ばれる事に慣れ過ぎているんだひつ……
フィーだつたら様をつけて呼んだつて良いくらいなのに……

「はい、分かりました。」

シュレンはそれだけだつたら思わず見瀧れてしまふ。そんなほど爽

やかな笑顔でそうフイーに応えた。

「隊長、帰還しますか？」

セイに隊員の一人であるう騎士がひとつそつとシコレンに声をかける。

「ううだな。カレイブスを討伐したという勇者を迎えての帰還だ。そつ伝令を飛ばしておこしてくれ。」

シコレンはその言葉に少しだけ黙考し、そして、そつ隊長の表情で告げた。

隊員はそれに敬礼で応え、すぐに他の隊員に内容を伝える。

「さて、ではケント、フイー、我々は今から帝都ランクルートに帰還するが、よろしくか？」

伝令の手段が伝書鳩なのか、携帯電話みたいな遠距離通信機器なのか、それとも別の何かなのか、帝都とやらの文明レベルが気になるところだが、それを見る前にシコレンに声を掛けられた。

『帝都ランクルート』か……多分町の名前なんだろうな。

「えーと……ああううだ。村長さんとにには挨拶しないとかないとな。」

「ううですね。」

そういうわけで、俺とフイーは村長の前に並ぶ。二つの間にか村長の奥さんと娘さんも一緒にいた。

「そんなわけで村長さん、お世話になりました。」

「お世話になりました。」

そう言いながら俺とフイーは一緒に頭を下げる。

「とんでもない……」ちらりと命を捨てねばならぬ所を助けていただいて、本当に感謝してもし足りないほどです。また我々の村にお越しください。その時は村人総出で歓迎いたします。」

村長は、そう笑顔で返事してくれた。

わざわざカレイプスを倒した手段見たさにシュレンを挑発したような子供っぽい村長とは思えないほど、それは大人な返事であった。

「おにーちゃん、行つちゃんの？」

村長の娘である女の子が俺の服の裾を軽く抓みながら、やや涙目で俺にそんな事を言つ。

「…………」俺が出発したら女の子が傷付いてしまう……だからって残つていては何も分からなし、連れて行くわけにもいかない……

だったら、俺は絶対にこの女の子を傷付けないよう……

「ごめんな。俺は行くよ。」

「そんなあ……おにーちゃん、行かないで?」

そんな泣きそうな顔で俺を見ないでくれよ。

「俺は君の事を忘れない。君も俺の事を忘れないでいてくれ

よ。そしたら、俺はやつとまた君に会いに来るからだ。」

「ほんと?」

「ああ、本当本當。俺のせか……国ではね、嘘を吐いたら針を千本も飲まなくちゃいけないんだ。だから俺は嘘をつかない。君も嘘ついちゃ駄目だよ?」

「うん!私嘘つかない!! 私、おにーちゃんのこと絶対忘れないからね!」

「ありがとう。」

やう言つて笑つて、女の子は俺の服から手を離した……それで女の子は傷付かないだろつ。

「……」

気付くと、フイーとシコレンが畳然とした表情でこちらを見ていた。

「どうかした?」

「いえ、ケントは……育児の経験でもあるんですか?」

「ブツー?」

まさかのフイーの爆弾発言だった。

「ケントは聊か子供の扱いが手慣れているように私にも見受けられるな。まさか、ケントは倒錯嗜好の持ち主なのか?」

シコレンまでそんな事を言つ。

倒錯嗜好って何だ? 口リコソツて意味か!?

「そんなわけあるかい！？」

とつあえずセシル「まだわざわざ得なかつた。

十一章 “帝都への招待”（後書き）

書き貯めしていた分はこれで最後です。
試験も近く、なかなか小説を書いている時間も少ないので、以後更新は不定期になります。

申し訳ありません。

さて、ここまで割と一気に更新してきましたが、皆さんの小説いかがでしょう？

感想などおありでしたら、一言でも残していただけると嬉しいです。

十一章 “とりあえず必要なのは地理”

帝国騎士団シュレン隊は隊長シュレンを始めとした十五人からなる分隊で、シュレンを除けば副隊長のウルナ＝タイ＝カナルが指揮系統の頂点に立ち、下級騎士から順に一級騎士六名、二級騎士四名、特級騎士三名で構成される。

シュレン隊は帝国騎士団の中では最小の部隊になるが、強さのランクで言えば上から三番目。それは少数精銳による隊員間の連携の速さということもあるが、それ以上に隊長であるシュレンが帝国内でも屈指の実力者である事に依るところが大きい。

帝国内でも帝国騎士団を統括するハイラルという人物以外、シュレンに太刀打ちできる人間すらいないのだそうだ。

以前、どこか別の場所で尖角竜と呼ばれるシャルバイアを討伐したという功績もあり、今回シュレンが強引に押し込んだカレイプス討伐に出向くことを認められている。

なお、フィニの世界にもシャルバイアは存在し、脅威度で言えばカレイプスより上であるとのこと……何者なんだよ、シャルバイア……

ちなみに、シュレンが魔術を使おうとした際に被害が周りに出ぬよう指示を飛ばしていたのは副隊長のウルナである。

「では君達は異世界からの訪問者であると?」

「Jの世界での主な移動手段は馬車……馬はいるよつだ。」

帝国は馬車で一日と半分ほどの距離にあるとのこと。

シュレンとウルナのみが乗る事を許される隊長用という特別な馬車と、他の隊員が丸」と押し込められる八人乗りの大型の馬車が二台、計三台の馬車が移動手段であった……なんて嫌な勝ち組と負け組の縮図なんだろう、とか考えてしまつ俺は負け組みなんだろうな……

俺とフィーはその隊長用の馬車に乗る事を許され、もともと四人用である隊長用の馬車にシュレン、ウルナと共に乗せて貰っていた。ウルナは御者台に座つて栗毛の丈夫そうな一頭の馬の手綱を握っている。

ウルナはシュレンと同じく金髪だが、割と短く切り揃えているシユレンとは違い、肩口まではありそうな長い髪を後ろで一纏めにして尻尾のように垂らしている……ポーテールつてやつだ。

碧眼で掘りは深く、優しさを感じさせるゆつたりとした印象を受ける。美形だが実直に眉根を引き結んだシュレンとは、また違った方向性な顔付である。

声色は男としてはやや高く、女としてはやや低いくらいの中性的な感じ。お陰で見た目や声から性別が判断し辛い。騎士なんだし、多分男だと思われる。

ちなみに一人称は『オレ』だった……カタカナ表記な感じのインтоネーションが良い感じ。

「まあ、概ねそんな感じです。」

とりあえずシュレンは信用できると判断した俺とフィーは「ひらりの世界の情報を探るためにもシュレンと、シュレンが信用している」というウルナに事情を打ち明ける事にした。

もつとも、フィーの言霊についてと、謎の声が神だと名乗った事

は念のため伏せておいた。

「なるほど。どうも見かけない格好だと思ったら、そういう言ひ事か。私はてっきり遠方のカテアテ辺りからの旅人だと思っていたよ。あそこは変わり者が多いと聞くしな。」

俺の話に対し、まずシユレンが理解を示す。

変わり者扱いされた事に対しては怒るべきなんだろうけど、そんなことしてたら話が進まないのでここはスルーしておく。

「隊長！そんな簡単に鵜呑みにして良いんですか！？」

やや樂観的な感があるシユレンにウルナが切迫した声を出す……なんか苦労人の空氣があるよねウルナさん。

「まあ半信半疑といったところではあるがな。」

異世界から来ましたなんて話をいきなり信じたらそれこそ変人だわい。

「だが、彼らはカレイプスを倒し村を救っている。ケントは私の申し込んだ決闘を正々堂々受けてくれた。悪人ではない。それに、そんな嘘を吐く意味があるとも思えないしな。だから、信じるよ。」

爽やかな笑顔でシユレンは言い切った。

「隊長がそう言つのであればオレは逆らこませんよ。」

そんな迷いのない様子のショレンにウルナは折れた。

「やつか。では」の世界では知らぬ事も多いだらう。何でも聞いてくれ。」

期待通りの反応のショレン。

「ではまず、ここがどこなのか地理的な物から教えて欲しいのですが……」

地理を知っているのと知らないのでは大きく違う。そういう考え方からか、フィーがまずそつ口を開いた。

「ふむ……」

どう説明すれば良いか迷いつゝにショレンは顎に手を当て少し考える。

やがて考えが纏まつたのか、一度頷き、ゆうべつと口を開いて……

「分からん。」

俺とフィーは思い切りずつにけた……アホなのかこいつは……ああ、アホでしたねえ!!

「ウルナ、説明してやつてくれ。」

「隊長……オレ、別の部隊に移ろつと最近考えているんですけど、どう思いますか?」

「ふむ、悩みもあるのか?まあその話は後でじつへつしようじゃないか。今はこちらの方が重要だ。」

「ハア……」

村に来た時は実直で随分と格好良い感じのしたショレンだが、こうして話してみると結構残念な感じである事が分かつてくる……ウルナさん、ドンマイ！

「では隊長に代わり説明させていただきます。まず今オレ達がいるのがガルバーナ大陸の中心に位置するルヴィス帝国になります。ルヴィス帝国は北にフイガル神国、東にアメリカ王国、南にネルト宗国、西にカテアテ集合国と四つの国に囲まれる形で存在しています。」

ふむふむ……何となく簡単な地図は頭に描けた。

「さうに、國に屬さない自治州や、魔人や亜人と言った者達の住む異人領などが國の境界線同士の隙間や、時には國の中などにいくつかあります。」

馬車を引きながら走る馬達を巧みに操りながら、ウルナはゆっくりと言葉を紡ぎ続ける。

とても分かりやすい説明で、覚えるという事がとても苦手な俺でも、何とか理解は出来たと思つ。

ちなみに今いる場所は帝國領内では帝都であるワングルートの南方に位置する草原で、そのままランクルート草原と呼ばれているらしい……現代日本に生きていたせいか、町を出るとそこは草原と言うのがどうにも実感が湧かなくて困る。そもそも、町と町を行き来するのに一日掛るというのだから驚きだらう。

「さて、他に聞きたい事は？」

ある程度ウルナの地理に関する講義が続き、一段落した所でシュレンがそう口にする……確かに聞きたい事は沢山あるんだが、なんだかシュレンには聞きたくない気分だ。

「勇者とは何ですか？村長が頻りにケントの事をそう持て囃していたのですが……」

何を訊こうか、シュレンに訊いても良いものか……なんて悩んでいたら、そうフィニーが疑問を口にした。
確かにそれは俺も気になる事だ。

「勇者か……それならば私が説明しよう。『ホウイン鳳印』は幼い頃

よりよく親にも聞かされたしな。」

「『ホウイン？』」

俺とフィニーの声が重なった。

十一章 “とつあんす必要なのは地理”（後書き）

『世界観説明章 地理編』でした。

こいつやって話を進めながらゆっくりと世界観は明かして行くつもりですでの、まあ推測など程々に楽しんでいただけたら幸いです^ ^

物語 “鳳印”

『**鳳印**』^{ホウイン} とはルヴィス帝国、フィガル神国、そしてアメリカ王国に良く広まっている英雄譚であり、特にフィガル神国では知らぬ者などいないというほどに有名な御伽話である。

親が子に寝物語として語る御伽話の中では最も一般的であり、古くから語られ続けられる伝承の一つでもある。

歴史が長いために沢山の解釈が存在し、物語の展開や顛末などは多岐に渡るため、最早『鳳印』の正確な原書は分からないとされている。

しかし、どの話の中でも中心として描かれるのは『勇者』という一人の男。

解釈によって、悪鬼の如き強さを誇る戦士であったり、敵を翻弄する策略謀略を張り巡らせる軍師であったり、万人の心を動かす人心掌握術に長けた政治家であったり、とその在り様は様々であるが、共通しているのは『勇者』が何かしらの巨悪に立ち向かう物語である事。そして、『勇者』が常に他者を圧倒する絶対的な存在として描かれている事である。

舞台は『鳳の地』と呼ばれる土地。これも解釈により、未開の大でであつたり、王の支配する領地であつたりするのだが、問題なのは『鳳の地』がかつてのガルバーナ大陸の事をいう古い地名である事である。

それ故、『鳳印』の原典にはかつてこの土地で起こった史実が描かれていた可能性がある、とルヴィス帝国にいる歴史学者は言う。

対して、単に実在の土地を舞台に描いてあるだけの御伽話である、という歴史学者もいる。

一つの意見は対立しているが、どちらが正しいのか、『鳳印』の原典が存在しない現在では確かめようがないために両者の意見の主張はすっと平行線を辿っている。

「これが大まかな『鳳印』についての話だ。私が知っている物語で良ければ、内容も語るうか?」

「是非。」

かつてルヴィス帝国には『鳳の地』全土を我が物とするために、あらゆる国と戦争を起こした愚かなる支配者がいた。その愚かなる支配者は自らを『魔帝』と称し、その圧倒的な力により他国を次々と蹂躪していくた。

田の前を横切つただけで一族郎党まで皆殺し、とこゝう凄まじいまでの恐怖政治体系を作り上げた魔帝に逆らおうなどといふ者はおらず、ルヴィス帝国および魔帝に蹂躪された数々の国々は完全に魔帝の支配下にあつた。

ある時、そんな魔帝に逆らつ者が現れる。齡15歳にもならない少年であつた。当時の人々はこの少年の事を『蛮勇を奮う者』として『勇者』と蔑んだ。そう、『勇者』とは最初は侮蔑の言葉であった。

「魔帝様、貴方の行動はおかしい。私利私欲のために罪のない他の民を蹂躪するなど間違つていい。」と、少年は魔帝に謁見を求めて、そして謁見の際に正面切つてそう魔帝に告げた。

当然のように魔帝は激怒した。「なんだ小僧!—この魔帝に意見し

「どうとは何事だ！一族郎党まで皆殺しにしてくれる……」「

家臣たちでさえ震え上るほどの剣幕で激怒する魔帝に、しかし少年は怯みすらせずに言葉を重ねた。「それには及びません魔帝様。もつ私に家族と呼べる人間は残つていませんので。」

少年の声音に込められていた刀剣の様に冷たく鋭い感情に、怒り狂っていたはずの魔帝は思わず言葉を失つてしまふ。

さらに少年は続ける。「魔帝様の怒りに触れた私がこの先も生きていらるるとは思つていません。いつだつて処刑を受ける覚悟はできております。ですので、一つだけお聞かせください。魔帝様は『鳳の地』を全て支配して、何がしたいのでしょうか？」

そんな少年の真つ直ぐな問いかけに、魔帝は言葉で応える事が出来なかつた。かと言つて、魔帝には何故かこのまま少年を処刑しろ、とこう指示を出す事が出来なかつた。

自分の気に触れた者など殺してしまえば良い。もし、少年が魔帝の前を横切つたりすれば、それだけで魔帝は少年の首を刎ねただろう。実際、少年が魔帝に向かつて言葉を発し、怒りに触れた時、魔帝は確かに少年を家族ごと殺してしまつつもりだったのだから。

だといつのに、何故か魔帝には今この少年を殺してしまつ事が何か重大な罪を犯すことになつてしまつ様な気がしてならなかつた。

魔帝は少年の質問に答えず、代わりに別の質問を少年に返した。「少年よ。貴様にはなぜ家族がない？」

「父も母も、兄も姉も……戦争に行き、殺されました。少年は

即答する。

いつもならば、たつたそれだけの事と一笑に付す「魔帝が息を呑む。

「魔帝のために戦い魔帝のために死ね」と一定の年齢に達したえすれば男女問わず、魔帝は自国の民のほぼ全てを戦争に投下していた。

少年はさらに続ける。「私は明日をもって徴兵される規定の年齢に達します。」

そこで魔帝は初めて少年の心の底に秘められる感情の冷たさの正体を知った。

「少年よ。我が憎いのか?ならば刃を持つてこの『魔帝』に立ち向かって来るが良い。しかし心せよ。貴様が怒りをほんの少しでも私に向けた時、貴様の体は首から上を失くすことになる。」と、いつまでも物静かに冷たい感情だけをぶつけてくる少年を不気味に思い、いつそのこと激情を向けられた方が楽になると考へ、そう口にする。そうすれば、今まで通り、逆らう者などただ処刑するだけになるのだから。

しかし少年は静かに首を振った。「だからこそ、私は魔帝様に教えて欲しいのです。『鳳の地』全てを支配した暁には、何を成す御積りなのか。」と、少年は最終通告であるかのように告げた。

魔帝はしばし考え、そしてゆっくりと、自身が『鳳の地』全土を支配しようとした論など最初に理由を思い出す。

それは幼い頃の記憶。当時、魔帝はどうでもいるような、そん

な普通の少年だった。普通に産まれ、普通に生き、普通に幸せになるはずだった、そんな少年だ。

魔帝は両親を戦争で亡くしていた……奇しくも、今魔帝の前にいる少年と同じように、魔帝の両親は当時のルヴィス帝国の支配者によって強引に戦いに出向かされ、そして殺されていたのだ。

魔帝は当時の支配者を憎んだ。殺してしまいたいほどに。やがて魔帝が成人した時、魔帝はその支配者を暗殺し、自身がその支配者に成り代わった。

最初はそう、戦争なんて悲しい事をやめさせるためだった。

しかし、戦争を失くす事は出来ない……その理由を国が複数あるせいだと判断した魔帝は、自身が恐怖の対象として世界に君臨、世界の全てを支配し一つの国とする事で争いを無くしようと本気で考えた。

「私はどうで間違えたのか……」魔帝はそんな事を小さく呟いた。

そんな魔帝に少年は今までの様な冷たさを孕んではいない、優しい声音で声を掛ける。「魔帝様……魔帝様は間違えたのですか？」

そんな少年の声はスルリと魔帝の心の奥底まで滑り込んだ。

「私は……魔帝は、間違えてなどいない！世界を統一し、悲劇を生む争いなどなくしてしまおう！その曉には、犠牲になつた我が国の民、そして蹂躪した他国の民に酬い、魔帝は自らの命を断つ！」と、魔帝は少年の真っ直ぐな言葉を受けて、初めて魔帝は自身の心の底からの叫びを口にした。

少年はその言葉を聞いて一度微笑み、「だから、私は魔帝様を憎

んではないのです。」と一言もつれて頭を下げ、魔帝との謁見を終了して退室した。

この日以降、戦場に一人の伝説が現れる。

その人物は他者を圧倒する絶対的な力を駆使して戦場を駆け、迫り来る敵を薙ぎ払い、まるで鬼神の如き強さを持つて戦場に君臨した。

やがて他国の大兵はその存在に恐れ戦き、一人、また一人と武器を捨て、ルヴィス帝国に投降していった。
気付けば、いつの間にかルヴィス帝国は『鳳の地』全土を支配していた。

そう、魔帝が目指した大陸の掌握という偉業は達成されたのだ。

晩年、目的の全てを達成し、今まさに刃を自身の腹部に突き立てるその刹那、魔帝は一つの言葉を残している。「『勇を以て義を成す者』……それが伝説だ」と。

「これが私の知る『鳳印』の物語の一つだ。」「……」

知らず、俺とフイーはシユレンの語る話にのめり込んでいたのだった。

物語 “鳳印”（後書き）

どこでもありそつでなさそつな、そんな物語を目指しました^ ^ ;
感想を教えていただけると嬉しいです。

十三章 “なぜ言葉が通じる？”

ガタガタと揺れながら走っていた馬車が急に止まった。

「うん？」

「もう日が暮れます。今日の所は、ここで野宿しましちゃ。」

俺が不思議そつな声を出すとウルナが一いつ朶ぱを振り向いてそつ言った。

野宿……つまりはキャンプってことだらう。

「隊長、よろしくですか？」

「ああ、結構。では隊員に野営の準備をするよろしくててくれ。

」

「はい。」

それだけの短いやり取りを交わした後、ウルナは後ろから着いて来ている大型の馬車の方へ駆けて行つた。

「ところで、ケントとフィーは食事はどうするんだ？良ければ、一人分多めに作るよろしくてくるが？」

そう、シュレンに言われ、そう言えばこの世界に来てからまだ何も口にしていなかつた事を思い出す……結局、村長さんの所で何も食べれなかつたしなあ……

「お願ひします。」

「心得た。じゃあ、少しの間ここで待つてくれ。」

セウ・ヒツヒ・シユ・レンも馬車を降り、後の馬車の方へ去つて行く。

「『勇を以て義を成す者』か……」

「だから村長はケントを勇者と呼んだわけですね。」

だから駿して勇者……って、ちょっと待てよ?これ……おかしくないか?

だって、漢字は日本と中国、その他いくつかのアジアの国々独自の文化だろ?

なのに、『勇を以て義を成す者』を駿して『勇者』だなんて漢字的な表現はおかしい。

一応可能性として、この世界やフイーの世界での文字文化が偶然にも漢字であるということは考えられるけど、『フイニフイアン・シリツ』や『シユ・レン=クル=ルグタンス』やらとファンタジーな名前表記から考えると、とてもそうとは思えない。

日本国内だって地域が変われば、方言だってはや他国語に聞こえるくらい変化するのに、まさか世界が変わつても言語が同じなんてことは無いだろう。

「なあフイー?」

「どうしましたか?ケント。」

「いや、ね……ふと思つたんだけど、俺達が言葉通じるのつておかしくない?」

「え?何故ですか?」

分からぬいらしこ。

心底不思議そうな顔で首を傾げるフイーは可愛らしこが、今はそん

な天然な所で萌えている場合ではない。

「だつてさ、国」とにだつて言葉が違つたのに、世界が違うのに言葉が通じるのはおかしいでしょ？」

「えー？ ケントの世界では国」とに言葉が違つたんですか！

？」

「ええー？ フィーの世界では違わないのー？」

フィーの新鮮な驚愕^{ビックリ}に、俺も新鮮な驚愕を返してしまつ。

「……」

お互い、暫し沈黙の時間が流れた。

「いじりう時はさ……」

「やつですね、神様を頼りましょ。」

「出でこいやー！」

とこつわけで、自称“神”を呼び出してみた。

「我が直々に選んだヒロインは氣に入ったか？」

メッシュヤ可愛いーってそうじやなくて……出たな元凶！

「我が悪い様な言い方をするな。それより、聞きたい事があつたのではないか？」

「ああ、何で言葉が通じるの？ 今更だけども。

- 貴様は『バベルの塔』という話を知っているか？

聞いたことがある。

確かに、神が降りて来やすいように高い塔を作ったけど、それが神の怒りに触れて言語がバラバラにされたって感じの話でしょう？

- 細部が違うがまあ良い。分かっているじゃないか。そういうことだ

え～と……つまり……？

- これだから駄目人間は……

つるさい！

- 『バベルの塔』自体は神話だが、言語は神によって統治されている。故に、言語を分けられていらない世界も数多くあるのだ

だからフィーの世界では国ごとに言葉が違つてことは無いのか

…それは納得。

でも、それじゃあ俺とフィーが言葉が通じる理由にはならないよな？

- 簡単な話だ。貴様の耳と口に同時翻訳機能をつけておいた。それで聞こえる言葉は全てお前の知る言語となり、話す言葉は相手の理解できる言語となる

へえ、至れり尽くせりでビックリありがとづ。

- 感謝などするな駄目人間。気持ち悪い

うわ〜 酷い。

「ケント、神様はなんと?」

そこでフィニーが横から声を掛けてくる。

そういえば、神との会話に夢中になつてつかり忘れてたよ。

「ああ、いや。基本的にいつの話だから問題ないよ。」「?」

フィニーは良く分かつていなさそうだったが、特段問題ないと判断した上で、食い下がる事もしなかった。

「で? もう用は済んだか?」

あーじゃあ一つだけ。

「何だ?」

地獄に墮ちる。

「我が一体何をした。むしろ貴様は我に感謝して然るべきでいきなりあんな崩壊寸前の村に放り出すとはどうこいつ見だ!死ぬところだったぞ!」

「うせえ!」

仕方あるまい。我とて自分の世界の民が無碍に死ぬのは忍

びないのだ。言霊術師ならばカレイプスが相手でも問題ないと判断したしな -

あーはいはいそうですか。“立派”立派。

- 本当に腹の立つ小僧だ……そんなんだから元の世界には友達すらいないのだ -

俺が悪いんじゃない……

-まあ確かに貴様は悪くない。神の意志は世界の意思だからな。神に嫌われるという事は世界に嫌われるという事、引いては世界に住む全ての生物に嫌われるという事だ -

むしろ俺が悪くないと救いが無を過ぎるだろ、それ……

-ふん。まあ良い。これ以上大した用事でないのに呼ぶな。我とて忙しいのだ。じゃあな -

と、自称“神”的声は吐き捨てるように呟いて消えた。

「なんか、こいつの世界で生きて行くの凄い不安になつて来た……」

「何を話したんですか？」

フィーがそう訊いてくる。特段深い意図はなさそうで、単に話をしようとした軽いものだ。

そういうえば、なんで“神”は俺にばかり話し掛けでフィーに声は掛けないのだろう?

「いや、鬼かれ者の辿る末路はいつも一緒に来て話す……」「ケントは嫌われ者ではないです！」

優しいフイーのフォロー。

でもさ、なんで俺って神に嫌われたんだが……

「ケント、フイー、食事の用意が出来たぞ。こりから来てく
れ。その後は悪いが野喰の準備を手伝ってくれないか？」

そこに空氣を読まないシコレンが現れて有耶無耶になる。

「言葉が通じて良かつたな。」

「え？」

「いや、何でも無いよ。」

「そうですか？」

俺のちょっとした呟きにフイーが反応したけれど、俺は適当に言
つて誤魔化した。

言葉を操るフイーに言葉が通じるなんて全く意味のない事だらうし
……とか、フイーなら 言葉よ 通じよ の一言で問題なさそ
うだし。

「とにかく、晩飯つて何？」

「うむ。さあほど良い大きさの鹿が狩れたのでな。鹿鍋だ。」

この世界にも鹿がいる事を知った瞬間だった。

このなると、動物の類は俺の常識に照らし合わせてみても大丈夫そ
う。

まあ目先の問題は鹿なんて食つた事のない現代人たる俺の口に合うかどうか……なんだが、塩とコショウでシンプルに味つけられた鍋に毛皮を剥ぎ取られた鹿肉が一匹分丸々放り込まれ、そこに適当に刻まれた野菜の類が突っ込まれた鍋の味は最高だった。

十四章 “言葉を使つ理由”

野営の準備の手伝いと言われたので何をさせられるかと思ひきや、客人に疲れるような事はさせられないといふシユレンによつて俺達の仕事は火の管理となつた……だつたら手伝つて欲しいとか言うなよ、といつ言葉は呑み込んだ。

さらに俺とフィーには客人といひことで個室を用意された。俺とフィーは同室で。

何故かと問うたら、シユレンに「え? 一人は恋仲じゃないのか?」と素で問い合わせてしまつた。

真つ赤になつて、小声で「ち、違いますよ」なんて否定するフィーは可愛かつた。

どうもシユレンやその他隊員さん達の間では、勇者たる俺の旅に恋人のフィーが付き添つてゐる、といつ感じに認識されてゐるようだ。

フィーが俺と恋人である事を否定した事にシユレンが顔を輝かせた事が気に入らない……が、ここで喧嘩を売つても何も進まないので俺が堪える事にする。

さて、そんなこんなでフィーは個室、俺は隊員達の寝るタコ部屋に押し込まれて雑魚寝することになつた。

騎士団なんて花の無い集団に属しているせいか、その夜の会話は素晴らしく色めき立つていた。

隊員の方々は随分とフィーに御執心の様子で、俺はフィーとの関係

を夜通し聞かれる破目になつた……恋人だと公言したいところだけ
ど、フイーが否定した以上、適当に誤魔化しておく……

その代わり、シュレン隊の人達とは随分と仲良くなれたと思う。皆結構気さくな人達だし、修学旅行の夜に今まで話した事のない人とも仲良くなれるあの空気に似ていたと思う。

まあそんなわけで、俺はぼほ徹夜で夜が明けた。

新たな発見だが、この世界での時間の流れ方はおよそ俺の世界と同じ二十四時間周期になつてているようだ。

「ケント?なんだかくまが凄い事になつてますけど、昨日寝れなかつたんですか?」

体感時間的に朝の六時ごろであるう時刻。

野営用に作られた巨大テントを片付ける為にせかせかと働いている騎士たちを眺めている俺の顔を、心配そうにフイーが覗き込んできた。

「いやあ、ちよつとね。他の隊員さんとの会話が盛り上がっちゃつてさ。」

嘘は言つてないよ、嘘は。

むしろ嘘なのは、徹夜明けなのにくま一つ作らず、しかも元気にテントを片づけている隊員さん達だよ、うん。

「心配しなくてもさ、俺つてちょっとくまが出来やすいんだよ。」

「そうなんですか?」

「でも……眠い……」

流石に眠かった。

夜更かしに慣れてる現代日本人の俺でも徹夜すれば流石に眠い。

しかも悲しい事に、この世界では朝食を摂る習慣が無いようだ。
飯さえ食えれば多少は元気が出ると呟つ物を……

ちなみにフイーの世界にも朝食を摂る習慣は無いそうだ。
「朝つてご飯を食べるものなんですかー!?」なんて驚かれた……
力ルチャーショック

「辛いですか?」

フイーがそんな事を聞いてくる。

「辛いよ。だから……」「

ちょっと寝かせて、と続けよつとした。

「では……眠気よ 去れ」「

スッキリ爽やか!…………じゃねーよ!

これぞ言靈の無駄遣い……

「大丈夫ですか?」

「眠気は取れたけど…………うへ、なんて言つの~寝る事で得ら
れる快感とかさ。俺はあると思つ……」

ちよつと落ち込む。

「さうでしたか？じゃあ 睡眠の快感をケントに譲りますよ」

「十時間くらい寝ていた気持ち良さー…しかも寝覚めスッキリ！！…じゃねーよ…」

「なんでも言靈で解決しようとするんじゃありません！」

「あれ！？駄目でしたか？」

なんか予想外と言つ表情で驚かれた。

そんなに俺つて理不尽な事で怒りますか？

「つひいうかせ、フイニつて言靈を使うの嫌じやないの？前の世界で化物とか言われたんでしょう？」

それが疑問だ。

口にするだけで何だつて現実にする化物……世界さえ歪める神に嫌われた女……後者は微妙に俺の脳内補正が入つてること、決して大げさじゃないと思う。

だからフイニは別の世界で人生をやり直したいと願ったはずなんだ……だったら、言靈を使って、また化物呼ばわりされるのは嫌じやないのか？

「あ、いえ……むしろ私は喜んで貰えるなら積極的に言靈を使つて行きたいと思つてます。」

優しい……優し過ぎる…

その優しさも「マザーレサ……いや、聖母マリア様すら超越している」と言つても過言ではない！

フイーは化物と呼ばれる人生をやり直したかつたんじゃない……例え化物と呼ばれても、人に喜んで貰いたいがために人生をやり直したかつたんだ……

なんて健気な…………そして、なんて一途なんだう。もう俺感動で泣いけやう？

「さて、出発しましち。」

いつの間にか出発の準備は整つていて、馬車の御者台からウルナが俺達を呼び寄せる。

思えば、なんで副隊長のウルナがわざわざ御者なんとしているのだろう……他の馬車は騎士じゃない御者さんがちやんといってるのに……という俺の疑問は、ウルナの「単純にオレが好きなんですよ。」についての。「下手な御者なんかに任せつけません。」といふ答えによつて搔き消えた。

「後どれくらいで着くのですか？」

帝都とやらに着くのが待ちきれないのか、フイーが期待に輝いた顔でウルナに問うた。

「もう幾許の時も経たずに到着しますよ。そうですね……昼食は街の中で摂れるでしょう。」

そのウルナの言葉通り、幾許の時間（俺の体内時計的におよそ五

時間）が過ぎた頃、遠くに町の形らしき何かが見えて來た。

巨大な街壁に囲まれていて街の中は見えないが、しかし遠目に見ても分かるほど巨大な城がその壁の中に聳え立っている。それは質実剛健と表現すればいいのか、良くファンタジーな物語に出てくる中世ヨーロッパの城に似ているようで決定的に違うとでも云つような……自分の貧弱な語彙が恨めしく思えてくるほどに立派な城だった。

「あれが、帝都ランクルートだ。ルヴィス帝国の首都であり、皇帝の統治する街さ。」

そんなシュレンの解説が嫌に耳に残った。

十五章 “帝都ランクルート”

馬車はそのままランクルートを目指して進み、やがて街壁の前で止まる。

高くて立派な門扉が構えられていて、そこには一人の番兵らしき人物が槍を持つて立っていた。

「シユレン隊だ。今、帰還した。」

ウルナがそう番兵に言つ。

「ああ、はいはい。」

番兵はそう気の無い返事をして、槍をカチンと一回石の地面の上で鳴らす。

途端、ガガガガガという音と共に門が開いて行く。

「ご苦労。」

「いやいや。」

そんな短いやり取りをウルナと番兵は交わして、そして馬車はゆっくりと門の中へ入つて行つた。

まず広がった景色は住宅街だろうか。

一見して対して大きさも変わらない家々が立ち並ぶ。

整えられた平坦な地面をガラガラと音を立てて馬車は行く。

道の広さは大体一車線分ほど……後ろから着いてくる大型の馬車だつて苦も無く通れる。

先程まで道端で遊んでいた子供達は馬車が通ると知つて脇に寄つてゐる。継ぎだらけの襤褸い服を着た子供達はとても裕福そうには見えない。

同時、馬車が通る音を察した大人が慌てて家から出てきて跪いて頭を垂れた。

子供にも同じようにすることを強要している。

「えーと……どうしたらいいわけ？」

「うん？ 何もしなくて良い。」

居心地の悪い俺の声にショレンは何でも無いかのように答える…
…ちょっと嫌な感じ。

「ランクルートは大きい街だからな。どうしたって街の中に格差が生まれてしまつ。ここは所謂貧民街スラムといつやつだ。」

格差社会ですか…

どこの世界に行つてもこいつのは……やれやれ…

「門の前は大型の魔物に襲われた際に真っ先に被害が広がる。故に入気が無く、地価が安い。そうなると、自然に金銭的に余裕のない人たちが集まつてしまつ。格差は悲しい事だが仕方が無いんだ。仕方の無い事なんだろうか？」

「

ショレンの性格上、こいつの見過せない性質だと思えるが、しかし彼らは自ら望んでここに集まつている以上、やはり言つ通り仕方の無い事なんだろうか？」

「じゃあ、皆が一様に頭を下げてるのは？」

村での村長さんの対応しか見ていない俺としては、シュレン達がそんなに偉いと思えなくて、恭しく跪く人々に戸惑いが隠せないんですけど。

まさかシュレンって、実は下々の民が気安く話しかけれないくらい偉い人だったりします？もしかして俺ってとっても失礼なことしてるんじゃない……

「騎士団は実際に命の危険を伴う危険な職だ。故に騎士団所属の、特に一級騎士以上の騎士には下級貴族程度の暮らしは約束されている。そのせいか、騎士団の事を詳しく知らない人々には騎士団は貴族で構成されていると思われている。誤解は解いておきたいのだが、我々が話しかけても彼らは恐れてしまう。」

權威ある人間には傳いておく方が賢い……か。
嫌な考え方だと思うが、しかし否定は出来ない。

「貴族制度……」

フィーがそう口を洩らす。

ファンタジーではお約束のアレだろう。

簡単に言えばお偉いさんってやつだ……それも、王以下政治家以上という性質の悪い奴ら……

下手に権力があるから面倒なんだな。

「まあランクルートは皇帝が直々に治めている町だから、特段貴族が幅を利かせているということはない。彼らが頭を下げるのは実際に貴族に対する敬意によるものだから、気分を悪くするものじゃない。」

と、シユレンは最後にそう締め括った。

「俺、貴族じゃないんだけど。」

「わ、私も……」

生まれてこの方人に跪かれるなんて経験は初めてな俺としては気まずいことこの上なし。

「私だつて貴族じゃないさ。最初は誤解を解こうと話しかけたもんだが、彼らは『滅相もない』なんて言って話を聞いてくれないからな。重圧に苦しんでいるわけでもないし、こいつなつたらもう諦めてしまった。」

えー……そういうもんなの？

「さて、^{スラム}貧民街を抜けますよ。」

その時、ウルナがそう呟いた。

確かに、ある所を境に急に街の雰囲気が変わっている。
軽い坂を上った先には、大きな広場があつた。

露天商があちこちで敷居を広げ、色取り取りの果実や食糧、武器や鎧、分厚いハードカバーの本などが並べられている。
まさに市場といった感じのこの場所は、賑やかな喧騒に包まれて何とも楽しげだ。

さらにその広場から伸びる何本もの小道の奥には、コンクリートらしき材質の家が並び、先程の貧民街との違いが思い知られる。^{スラム}

広場で賑やかにしている人々の服装も先程とは打って変わつて洒落た物になつてゐる。

まあ俺のセンスではないから良く分からぬのだけど。

「イリは……まあ説明するまでもないだひつへ。」

確かに。

「イリを抜けて大通りを真っ直ぐ行けば、いよいよランクルート城だ。」

莊厳に聳え立つ立派な城が目の前にある。

馬車はゆつくりと広場を進み、そして抜ける。その途中でも野菜などを抱えた主婦らしき人物や恰幅の良い男性なども、馬車が通る際には必ず跪く。

どひやら確かに尊敬されているようだ。

「イリの大通りから、あちらの坂を登ると貴族街があるが、まあそちらは今は良いだろう?」

城へ向かう途中にある坂を指差してシュレンがそう言った。

確かに、今は貴族なんどひでも良い……つて、ちょっと待てよ?

「別に俺達、皇帝様とやらに会う必要は無いんじゃ……」

「何を今更。君達を勇者として城に歓迎する、と先程報告があつたよ。」

え！？ いつ！？

「なんか聞こえた？」

「いえ……」

フィニーも良くな分かっていない様子。

「まあそんなわけで、是非城に足を運んでくれたまえ。」

やや強引に、俺とフィニーは城へ連れられて行く事になつたのだった……良いんだろうか？

十六章 “ランクルート城”

皇帝への報告には隊長であるシュレンと副隊長であるウルナのみでいくらしく、他の隊員を乗せた場所は途中でどこかの道に折れたのか、気付いたらいなくなっていた。

「皇帝ってどんな人だろ？……なんかちょっとでも口心えしたら、それだけで首が飛ぶような、怖い人じゃないと良いなあ……」「心配せずとも、まずは国民の平和を第一に考えてください立派な方だ。」

俺の不安にシュレンがフォローするように葉を返していく。

でも“帝国”だぜ？
俺の中で帝国って言つたら、もつ侵略戦争の嵐みたいなイメージしかないんだけど。

「私の生まれるよりも前であるが、前皇帝の代は確かに隣国との戦争は絶えなかつたと聞く。その時には多くの国民が命を落とした。現皇帝はその先代の失敗を生かし、武力を用いない外交によつて国力を維持しているのだ。」

ふうん。

つまり、帝国騎士団とやらは自衛隊みたいなもんだといつ解釈で良いわけね。

「でも、攻め込まれたりもするでしょ？」

フイーがどこか不安そうにうそうそう尋ねる。

「勿論。その際に武力の行使はやむを得ない。私も前線で戦つた事だって一度や一度ではない。だから、せめて戦争で死ぬのは自らの誇りを胸に戦える者だけにしようと言つ皇帝陛下の計らいによつて、帝国騎士団は成り立つてゐるんだ。」

そのシユレンの言葉には、皇帝への敬愛と騎士としての誇りが見て取れた……そんな誇りがあるなら、丸腰の俺相手に剣を抜くのはやめて欲しかつた……

基本馬鹿なんだね、悲しい事に。

「さて、こゝからは歩く。付いて来てくれ。」

街の中に聳え立つ城を取り囲むように立派な城壁が敷かれ、そこには象だつて余裕で通れるアーチ状の入口がある。

そこを馬車で潜つて少し行つたといひで、シユレンが馬車から降りるよう促した。

馬車はウルナが引つ張つて隅にある馬車小屋の方へ向かわせた。そこには筋骨隆々の体躯をした大柄な男が待機していて、男はウルナから馬車を引き継いだ後、小屋の中へ消えた。

ウルナは何か用事があるのか、こちらを一瞥したが、シユレンは全てを察しているようで軽く手を振つてウルナに合図する。ウルナは一度だけ頭を下げるどどこかへ去つて行つた。

俺とフィニーはシユレンについて暫く歩き、やがて立派な門構えの城門に辿り着いた。

大型トラックが突つ込んでもビクともしなさそなほどに莊厳に構えられた城の入り口としては、まさしく申し分のない構えだ。

「帝国騎士団シュレン隊隊長のシュレン＝クル＝ルグタンス。ただ今、カレイプス討伐の任より帰還した。報告のため、皇帝陛下へお申通り願いたい。」

「はい、聞いております。どうぞお入りください。皇帝の間は……」

「真っ直ぐ行つた所にある両開きの扉だりうへ。」

「はい。」

シュレンが門番とそりやり取りを交わす。

そのやり取りの後、門番はランクルートの入り口の門と同様とに手に持つた槍で地面をカツリと叩いた。

それだけで、重そうな鉄扉の門がガガガガガと音を立てて開いて行く。

「では、行こう。」

シュレンについて俺とフイーは城の中へ入った。

城門は一重構造になつていたようで、一つ目の扉の後、小部屋で区切られた先にもう一つ扉がある。

そこが開いた先にある景色はまさしく絶景と表現して差し支えない。

広大なホールの床は大理石の敷き詰められ、ピカピカに磨かれて顔が映りそうで、人が歩く部分には真紅のカーペットが敷かれ、土足で踏み込むのを躊躇わせるほど。

日本人たる俺なんて思わず靴を脱ごうとしてしまつた程だ……つてか俺が履いてるのって泥とか付きまくつてるボロ靴じゃん……申し訳ない。

天井は高いし、天窓まで付いてるし……『もつ』『ほん』の異世界ですか？……ああ、異世界でしたね』状態である。

「おやあ？これは不出来な騎士様がいらっしゃる。」

城の内景に見蕩れていたら、シュレンが横から声を掛けられていた。

「三日ほど前にカレイプスの討伐に出向いたと聞いたのに、こんなにも早く、それも無傷で帰つて来ているとは、途中で憶して引き返して来たのではないのかな？ そうだろう？ シュレン殿。」

シュレンに声を掛けたのは中年くらいの年であろう男。

丸顔で人の良いにこやかな笑顔を浮かべてはいるが、その実、顔中傷だらけで、歴戦の戦士を思わせる。

シュレンに似た鎧甲冑に身を包んでいるが、シュレンが青系の装飾であるのに対し、男の鎧は赤を基色とした装飾がなされている。

「おお、ナーグ殿ではないですか。お久しぶりです。お変わりないようで。」

シュレンはその男、ナーグの言葉は無視した。

それに対してナーグが気分を悪くした様子は無いから、これは二人の間の挨拶みたいなもんなんだろうと推測する。

「カツハッハ！ 変わるものか！ そちらこそ、冴え渡る魔術の腕は幾分もサビ付いておらぬと見える。まさかカレイプスを一日と経たずに倒してしまふとは！」

ナーグはシュレンの肩をガシガシと叩きながら称賛する。

なるほど、何となく二人の関係を把握。

恐らく、先輩後輩関係。

「いえ、私が辿り着いた時には、既にカレイップスは倒されておりました。そちらにいるケントの手によつて。」

ナーグの目がこちらを向く。

何となく、俺は姿勢を正した。

すいません、倒したの俺じゃないです…… フイーです……

「ほう。では、お主、ケント殿が伝令の中にあつた勇者というわけか。」

まじまじと俺の顔を眺める。

「はあ…… 勇者とかは良く分かりませんけど、とりあえず俺がカレイップスを倒しました。」

実際に倒したのはフイーだと言つてしまつても良かつたが、彼らが言靈なんて使えるフイーを化物だと罵り、傷付けないとも限らない。

だから、とりあえずは俺の手柄と言つ事にしておく。先にこいつそり話した際、フイーもその方針に賛成してくれた。

「ふむ。良い顔付をしていい。」

嘘だ。

俺みたいな駄目人間が、こんな百戦錬磨つぽい人から見て凜々しい

顔をしている筈が無い。

お世辞なんか言つたつて騙されないぜ。

「度胸もありそうだ。」

むしろ小心者ですよ。

「それに、何と書つても、奥深い澄んだ眼をしている。」

奥が見えないと、濁つてると思つますけどね。

意外と人を見る目が無いナーグさん。

「なるほど、勇者か……私の名はナーグ＝レイ＝フォトスといつ。以後よろしく。」

そう言つてナーグは右手を差し出した。
握手のサインだらう。

「どうも。ケントです。」

そう言い返しながら、俺はナーグの右手を握り返した。

「ふむ。よろしく。して、そちらのお嬢さんは?」

手を離した後、ナーグの視線はフィーの方へ向いた。

「フィーと申します。ケントの旅に付き添わさせていただい
ております。」

「斐伊一はナーグが何か言つ前に自分で澄ました聲音で名乗つた。

それにしても、いつから斐伊一は俺の付き添いになつたのだろう

……

「なるほど。夫婦で旅路とは、なかなか粋な事をしなさる。「ブフツー!?

ありえないナーグの一言に思わず俺が噴き出した。笑つたんじゃなくて、驚いて、ね。

「え? え?」

斐伊一は一気に顔を赤くして動搖する。

さつきまでの澄ました可憐な女性の態度はどうへ行つたのか……

「何々、照れる事は無い。素敵な事じやあないか。」

その後、ナーグは斐伊一と握手を交わして、「ハッハッハ!」と豪快に笑いながら去つて行つた。
反論をする間も無く……

「あの……ケント……」

未だ顔の赤い斐伊一がぼそぼそと呟くように話しかけてくる。

分かつてゐて。俺みたいなのと恋仲どころか夫婦なんて言われたら、俺が勘違いしてしまわないよう釘を刺しておきたくなるというものだらう。

「勘違いしないでよねつー別にケントの事なんかなんとも思つてな

「いんだから！」って……良いねえフイーのシンデレバ。つていうか、可愛い子はどんなキャラでも可愛いよ。

「ハハ。夫婦だつてさ。そんな風に見えるんかな？」
「えつと……どうでしょ？」「

フイーの控えめな返事。

「俺なんかとそんな風に思われるのは心外だろ？以後、ちょっとだけ気をつけるかな。」

「あ、いえ、そんなことは、決して……」

優しいフイーは俺を傷付けないようこそそんな風に言つけれど、でもだからって俺と夫婦なんてあまりにフイーに失礼と言つものだ。

俺はフイーに軽く手を振つて応えると、空氣を読まずに「では、皇帝のいる場所へ案内しよ。」なんて言つシユレンに後に着いてすたこらと歩き始めた。

「もつー」

後ろでいじけた様に憤慨するフイーの可憐な声が聞こえた。

十七章 “ルヴィス帝国第92代皇帝”

『皇帝』……その言葉を聞いて何をイメージするだらうか。

王、貴族、支配者、etc……まあ、なんにせよ絶対的な権力をを持つ、決して逆らってはいけない相手。

概ね、そのような意味の言葉として『皇帝』と言つて言葉を捉えてい るのではないだらうか？

少なくとも、机にぐつたりと突つ伏しているゲル状の何かではあるまい。

通された場所はまさに執務室といった風体だった。書斎と言つても良い。

シユレンに着いて歩き、両開きの扉を超えた先は、隅々まで背の高い本棚に囲まれて中央には大きな木製の机置かれ、そして大量の書類に漬されそうになりながら机に突つ伏しているゲル状の何かだった。

「陛下！？」

扉をシユレンが軽くコンコンと叩き、それに対して「入れ」という返事が聞こえたので入った。その瞬間に目に飛び込んできた光景に、シユレンが慌てたような声を出す。

「おー……？」

そのドロドロした何かは間延びした間抜けな声を出した。
どうやら、人らしい。スライムみたいだけど。

「また液化したんですか！？」

「うーむ……」「うしておると、気持良い……」

良く分からぬが、皇帝とやらは『液化』とやらをして体をゲル状にしている……のだろうか？

「陛下……」

「あー分かった分かった……」

そのスライムは氣だるそうにシコレンに一度答えた。

「仕方ない。」

そう一度呟くと、そのスライムは急にうねうねと動き出して人を象り始め、やがて一個の人体を作り上げた……裸の。

若々しく、どことなく幼さは残るが精悍な顔立ちに、ビシッと引き締まつた体躯をしている。

シルバーブロンドの髪はオールバックに後ろへ流され、前髪が何本かずつ束になつて上方へ跳ねている。

「……」

無言の俺とフィー。

個人的に言えばフィーには「キャー！」とか、少しばかりっぽい反応をして欲しかった所だが、思えば真っ先に俺とフィーって全裸で向き合つてゐるんだよね……その時もフィーって……

「ふむ。反応が芳しくないようだが？」

元スライム男が声を発す。低くて渋いダンディーな声だ。

「えーと? もしかして……」

流石に困惑つたが、このまま声を発さないと失礼になるかと思い、ゆっくりと言葉を絞り出した。

「察しの通り、我がルヴィス帝国第92代皇帝ウルティール＝ダガ＝ルヴィス様です。」

全裸で胸を張り、ショレンに紹介を受ける皇帝……とりあえず、ショレンの話を聞いて俺の中に出来上がりかけていた『立派な皇帝』像は木つ端微塵に砕け散った。

「ふむ。つまらんな。仕方ない。」

そう言つと皇帝は掌をパンパンと一度鳴らした。
すると、どこからともなくメイドさんらしき女性が現れ、一瞬で力一テンの様な物で皇帝の体を覆い隠す。
すぐにその幕は取り払われ、そこには豪奢な格好をした、まさに若い皇帝然とした人物が立っていた。
メイドさんは即座にどこかへ消えた。

「おや? 誰かと思えばわざわざ無償でカレイップスの討伐に出向いたショレン君ではないか。」

無償ね。

そりいえば、もともとあの村は見捨てられる予定だったのをショレンが無理強いてカレイップス討伐に乗り出したって言ってたな。
つてことは、あの村を見捨てた諸悪の根源はこの皇帝……

まづいな……どれだけ考へても、シユーレンの『國民の平和を第一に考えてくださる立派な方』をイメージできないんだが……

「はい。シユーレン＝クル＝ルグタンス、ただいま帰還いたしました。」

シユーレンは敬礼して皇帝に応えた。

「あーそうか……では、そちらの一人が報告にあつた勇者とその恋人か？」

「サラッと恋人とか言つんじゃねー！」

「ちとら華も恥じらう健全な男子生徒じゃ！つて、あれ？なんか違う？」

まあそれは良い。

ほらーまたフイーが顔を真っ赤にしちゃつたじゃないか！

「はい。」

シユーレン、テメー＝コラ＝肯定してんじゃねーよ……

肯定されて俺は内心超嬉しいけど、それは別の話……

フイーを傷付けたりしたら、いくら皇帝でも殴り飛ばすからな！

「そつか。じゃあ仕方ない。とりあえず、そちらへ掛けたまえ。」

またも皇帝は掌を鳴らす。

すると、先程のメイドがチソツ張りの豪奢な椅子を三脚アツと言つ間に並べてくれた。そして、またしてもあつと言つ間に消えてしま

う。

俺の動体視力でも捉えられないなんて……あのメイド……何者…?と、凄腕ぶつてみる俺……無様。

「では、まずは細かい報告から訊こうかなシュレン君。」

椅子に座った俺達を見て一度頷いた皇帝は、まずシュレンに氣だるそうにそう声を掛けた。

「はい。我々帝国騎士団シュレン隊は三日前、ランクルート草原を南に280キリ先にある村を襲うカレイプスを討伐するため、帝都を出発しました。到着した時には、既にカレイプスはこちらのケント、フィーの両名により討伐された後でした。我々帝国騎士団の到着は間に合わず、彼らがいなければ村への被害は甚大であつたと思われます。その功績を讃え、また異国の旅人である彼らを歓迎すべく、じつしてお連れしました次第です。」

異国の旅人ねえ……一応シュレンは信用できると思つて俺達が世界から来たという事を話したけれど、だからって皇帝が信用できるとは思わない。

だから俺はシュレンに頼んで、俺達の事情は出来るだけ伏せて貰うよう頼んでおいた。

「ふむ。先の伝令の内要とほぼ同一だな。それで?報告はそれで全てか?」

「はい。」

「そつか。仕方ないな。」

「どうやらいの皇帝は『仕方ない』が口癖らし。どうも皇帝として信用できないなあ……」

「とりあえず、勇者君との決闘騒ぎは不問にしてやるわ。」「……」

あ、シュレン固まつた。ピキッて感じで固まつた。
良い氣味だつて思つてしまつのは俺の性格が悪いからではないと信じたい。

「いえ！」

あ、シュレン復活した。

「その騒ぎは自分の未熟さが生んだ物一喜んで罵を受ける所存です！…」

いや、確かにシュレンが短気だつたせいもあると思つたが、挑発したのは俺だし、全然シュレンは悪くないよね……
と、そうシュレンをフォローしようとしたが、それはシュレンのこちらに向けられた視線によつて遮られた。

「分かつた。だが、それは後回しにしよう。」うちの案件の方が重要そうだ。」

そうして、皇帝が今度は俺とフィーの方を向く。
その眼光は予想外に鋭く、氣だるそうにゲル状化していた人物と同一だとは思えなかつた。

「私の方からも言いたい事はあるが、その前に君達の方が私

に言いたい事がありそうだ。まずはそれを聞こへ。」

そして、そんな事を宣た。

「では、一つだけ教えていただきたいことがあります。」

俺の隣でフイーが明らかに怒りを孕んだ聲音で皇帝に言葉をぶつける。

「あの村はなぜ見捨てられたんですか?」

フイーのその聲音は怒りどりとか、その勢いは敵意と言つても過言ではない。

村を助ける事の出来る力を持ちながら、なぜ村を見捨てなければいけなかつたのか……どうしても聞いたかつたのだろう。だからその怒りは、そのままフイーの優しさなんだ……

どうでも良いけど（良くもなにけど）や、この後で断頭台行きとかになりますんよね?

十八章 “異国民？貴族？”

気付けばフイーは大粒の涙をまた溢していた。

まったく……ろくに言葉も交わしていない人のために泣けるなんて……

それはもう優しいなんて次元じゃないよな。

「あー……まあ、なんだ？ 分かってくれってなあお嬢さんには酷な話だつてのは分かる。仕方ない。」

泣き出したフイーを見て、皇帝は困ったように言葉を紡ぎ出した。

「でもな、やつぱり分かつてくれ。私だつて訳もなく自国の民を見捨てるような非道ではない。出来ることなら助けたかった。」

「では、なぜ？」

涙を拭いながらフイーは問い返す。ただ、そこには皇帝としての並々ならぬ理由があつた事を悟つたのか、先程の責めるような気配は無くなっていた。

「それは国政事情であるがゆえ異国民である貴女に話す事は出来ない。」

しかし、皇帝はそこだけはきつちりと断つた。

先程までのだらけたイメージを一蹴する様な、そんな毅然とした皇帝の言葉だった。

「だから、私の事は民を見捨てた冷たい皇帝と受け取つても

「うつて結構だ。」

「……いえ。」

その皇帝の言葉にフイーは何も言ひ返せなかつた。

皇帝がどれほどの葛藤を経て『民を見捨てる』という決断に踏み切つたのか、フイーなりに何か思つ所でもあつたのかも知れない。

フイーはやや冷静になつた面持ちでゆつくりと椅子に座り直した。

「ところで、血口紹介して貰つても良いかな?」

その言葉で、俺はまだ自己紹介もしていなかつた事に気が付いた。

そういえば……いきなりのゲル状に直面したせいで何も言つてない……

うわー……なんて俺つて失礼な……血口嫌悪。

「あ、すいません……名乗りもせずに失礼な事を……」

フイーも同じことを思つたらしい。

ここはフイーが血口嫌悪に陥つてしまつ前に俺から名乗りつきつちりフイーをフォローすることが大切だろ。

「俺はケントつてています。どうぞよろしく。」

うつて頭を下げる。

「私は、フイーと申します。」

聊か安心した様子でフイーが続いて名乗つた。

「いや、名前は分かっている。姓名と称^{シヨウ}、それに出身国を教えて貰いたいんだ。」

ベキッと固まつた。

どうやら皇帝殿は名前だけじゃ不服な^{ハシマツル}様子。

だからって……姓名は、まあ苗字のことだらうナゾ、ショウツイで何だ？章？称？それとも賞？

それに出身国……『日本です』じゃあ通じないよな……

「ああ、いや……深い意味は無い。」

固まつた俺達を見て何を勘織ったのか皇帝は慌てたように両手を振つた。

「我が国では見ない異国の装束であったから、純粹に興味があつて聞いただけだ。言えない理由があるのなら、無理に訊きはない。」

どうやら皇帝が変に勘織つてくれたお陰で無用な説明はしなくて済みそうだ。

「だが……その服、相当良い素材で出来ている。我が国であれば貴族の装いくらいにしか使われないほどだ。……」

しかし、皇帝はそれだけで見逃す気はなさそうだ。

俺やフイーの服をジロジロと見渡しながら、勝手な推測を次々と口にする。

「もしかして君達は貴族なのか？」

「いいえ、違います。と答えた方が良いんだろうか？」

「だとしたら、旅をしている事にも相当の理由がありそうだ。名乗れないという事にも合点がいくし、出身国など当然明かせねだろ？仕方ない。」

最後に皇帝は自分で納得して完結させてしまった。
どうやら随分と思いこみが激しいらしい。

「（まあいいか。）」

「（アハハ……そうですね。）」

隣のフィニーとこゝそり言葉を交わす。
フィニーも大分落ち着いたらしく、笑顔で応えてくれた。

「さて、シュレン君。先程の罰の件だが……」

「はいーなんなりとーー！」

俺達と皇帝の会話に口を挟まず黙っていたシュレンが皇帝に言葉を向けられた途端、背筋をビシッと正して規律姿勢を取りながらハイハイとした口調で応えた。軍人の鏡だ……軍人のことなんて知らないけど。

「そりだな。カレイップスを討伐し、かの村を救つた勇者と決闘騒ぎを起こすなど言語道断だ。」

さつき不問にするつて言ったのになあ……なんでシュレンはわざわざ罵を受けたかな？俺には分からん。

「よつて、罰としと……」

「ちよつと待つてください……」

しかし、挑発したのは俺だ。

悪いのは俺なのにそれでシュレンが罰を受けるなんて、そんなの倫理的に間違っている。

俺は駄目人間であるかも知れないが、それでのほほんとしていられるほど人間失格ではないつもりである。

「シュレンを挑発したのは俺です。シュレンは悪くないんですけど。俺が意味もなくシュレンに喧嘩を売りました。」

「ケント！ それは言わなくて良いとつ……」

「言つてないよね。

「ふむ……」

皇帝は俺の言葉を聞いて少し考える仕草をした後、再び口を開く。

「だからとこつて軽々しく挑発に乗るなど騎士としてあるまじき行為である。よつて罰としと……」

そこで皇帝は一端言葉を切つた。

「今日の日が暮れるまで騎士昇華訓練を受ける事を命じる。」

「は……はい……」

「うん？ 一瞬シュレンが言い淀んだ？」

罰を貰ってくれと懇願したのはシュレンなんだから、むしろ「はい

喜んで…」へりこの返事をするもんだと想っていたんだが……

「わたくし、ケント殿とフィニー殿は今夜の晩餐に招待しよう。それまで時間もある。時間がきたら迎えを寄こすから、それまで帝都内をゆっくり探索でもしていいぞ。」

皇帝は最後にさう言つて話を締め括つた。

十八章 “異国民？貴族？”（後書き）

村を見捨てた理由は語られず……。びひしまじょい？（オイ

十九章 “騎士昇華訓練 其の壱”

皇帝はこの後事務仕事があるついで、あのメイド忍者（俺命令）に席を外すよう丁重に申しつけられた。

「自由に見学してろって言つたってなあ…… フィーー?..」

「やうですね。この街の事も何も分かりませんし……」

案内人無しでは間違いなく迷子だ。

「やうだな。私が案内できれば良いんだが……」

そこにシユレンが申し訳なさそうに口を挟んだ。

絶対にシユレンは悪くないのに、全て自分のせいだとでも言いたげな、どこか気に障る言い方だ。

「こんな言い方されたら謙虚を美德とする日本人たる俺は許すしかないじゃないか。」

「まあ気にするなよ。わざわざ四分から脚を抜けようなんてやつやう出来ないことだつて。」

「やつ言つてもらべると助かる。」

遠まわしに『生真面目で損をする馬鹿』って言つてるんだけどね。

「それよりもや、騎士昇華訓練つて何なわけ?..」

「え……騎士じょつ、騎士昇華訓練といつのは……だな……」

「……」

なんかシユレンの声が震えている。

「騎士見習いや劣級騎士が一段階上に昇格するために受けなければならない訓練の事ですよ。」

ランクルート城から出で、広い庭園を外に向かつて歩いている俺達の背後から声を掛けられた。先程別れたウルナだ。

「えつと……つまり？」

「つまりですね、これを申し付けられるということは、騎士失格だと宣告される様なものです。名誉はこの訓練を騎士見習いや劣級騎士と混ざつてやり抜く事で回復します。」

公開処刑の恥晒しつてわけか。

「まつたく……隊長らしいですよ。真面目なのは良いですが、生真面目過ぎるのはどうか、とオレは何度も言つたでしょう？」

「すまんなウルナ。そういうわけで、私は訓練場の方へ行く二人の案内を任せられるか？」

「了解しました。」

ウルナが敬礼でシユレンに応える。

それを見たシユレンは即座に飛びよろよろと去つて行った。なんだか逃げ出したみたいに見える。

「さて、先程は一人勝手に抜けたりして失礼いたしました。」

途端、ウルナは急に俺とフィニに向かつて頭を下げた。

「あ、いや。別に何とも……なあ？」

「はい？ はい！」

困った俺はフィニーに助けを求めて話を振った。

フィニーは困惑しながらも力強く肯定した。

「そうですよ。何か用事があつたんですね？」

「はい。」

それだけウルナは頷いたが、詳しい内容は教えてくれなかつた。
…まあ仕方ない。ってあれ？ もしかして皇帝の口癖、移つた？

「では案内をさせたいだけますが、何か希望はありますか？」

フィニーと皿を合わせた。フィニーも大体俺と同じ考え方っぽい。

何か希望はあるか、なんて決まつてゐるじゃないか。

「騎士昇華訓練を見学したい。」

「はい。では、露店の方で適当に昼食を摂つてから訓練場の方へ行きましょう。」

ウルナも良い表情で同意してくれた。

「訓練をやり通す事で名譽を回復すると言いましたが、そもそも騎士として階級を上げて行くにはこの訓練を受ける必要があるのです。私も二回ほど同じ訓練を受けています。なぜそれが罰になるのかと言いますと……」

焼きそばの様な味がする焼きそばの様な何か（それはもう焼きそばじやないのか？と思うけど、どこか焼きそばじやなかつた）を昼食として食べて、俺とフイーはウルナに連れられてサッカー場のような橢円形のフィールドへ連れて来られた。

「この訓練が百戦錬磨の隊長でも倒れそうになるほどキツいものだからです。」

፲፻፱፻፷፻

エリジに訓練で騎士魂を磨いていた事らしいのだ。

でもまあ、以前に一度乗りきった訓練に参加するだけなんだから、名誉の回復なんて完全な出来レースだよね。

多少辛くとも、それを乗り切るだけで不問にならうといふなら、どうぞ。つてことは無いだろう。

「丁度始まるよつです。」

観客席なのか、扇状に広がつていくつものベンチが並べられた場所に俺達は腰を下ろした。

芝生の敷き詰められたフィールドには14人の似たような甲冑に身を包んだ男女が一列になつて並んでいる。

「これが見て右の列の一體後にハーフンかしる表體はどじとなく嫌そうだ。

その一列に並んだ先に一際高い台座がある。

その上に一人の男性が立っていた。

黒衣に身を包んだその男性はサディスティックな表情で並んでいる

騎士達を見下している。

やがてその男が口を開いた。

「テメエらはクズだ。」

いきなり何なんだ！？

「クソの役にも立たねえクズだ。どうしようもねえクズだ。
戦場に出たら何も出来ずに死ぬようなクズだ。」

なんという凄まじき罵倒の嵐……

「これはテメエらみてえなクソの役にも立たねえクズをクソの役くらいには立つクズに鍛える為の訓練だ。テメエらみてえなどしようもねえクズをどうにかなるクズに鍛える為の訓練だ。テメエらみたいな戦場に出たら何も出来ずに死ぬようなクズを何とか戦つてから死ぬ事が出来るクズに鍛える為の訓練だ。」

壇上の男はそこまで一気に言い切り、そして一度大きく息を吸い込んだ。

「分かつてんなら突つ立てねえで今すぐその場で腕立て伏せ1000回やりやがれ！－！」

返事すらせずにフィールド上の騎士達は一斉に地面上に両掌を着いて腕立て伏せを始めた。

「何？あれ……」

「人間が疲労を忘れる感情は何と言つても『怒り』だそうで。

ああやつて騎士達を発起させて訓練を乗り切らせよ、といつのがあの教官殿の談ですが。」

嘘だ。あのうつぶりは絶対に素だ……楽しんでやつてゐに決まつてゐ。

それにしても、いきなり腕立て伏せ1000回か……多分俺には出来ないな。

「終わつたら立ち上がり！崩れたらやり直せ！死んだら生き還れ！テメヒらみたいなクズは勝手に死ぬ権利すらねえんだよ……！」

黒衣の教官は500回を超えて苦しそうになつていてる騎士達を順に踏みつけながらそつ声を張り上げている。

しかしまあ、何と言つても騎士だ。

あんな重そうな鎧に身を包んでいるのに、それでも腕立て伏せを1000回やり切れそつのは流石と評するべきだらつ。

「おや？ シュレンか？ 面白い。よし特別だ。私がお前の背中に乗つてやう。」

さう言つと教官は涼しい顔で腕立て伏せを続けていたシュレンの背中へ腰掛けた。

途端、シュレンの表情が苦しそうな物に代わる。

「あつがとつじれこますー是非やらせていただきまーすー！」

ややヤケクソ氣味にシュレンはそつ唇んで、我武者羅に腕を曲げ伸ばします。

それでも出来るのがシコレンの凄いだろ？

やがてチラホラと腕立て伏せが1000回終わつた者が立ち上がり始める。

それを見て教官は満足げに微笑むと、

「よし！1000回できた者は次だ！指立て伏せを2000回！できたら片腕立て伏せを各4000回！最後に片手指立て伏せを各10000回ずつやつたら立ち上がって良し！…」

そう叫び、また当然のようにシコレンの背中へ腰掛けた……鬼だ。

そんな調子で地獄の騎士昇華訓練は続く。

一十章 “騎士昇華訓練 其の弐”

地獄とはまさにこの事なのだろう。

腕立て伏せだけであの鬼のメニューであるところに、それだけで
もまだ半分も終わっていないというのだ。
この先どんなメニューが待っているのか、想像するだけで……

「楽し過ぎるぜ。なんたって『他人の不幸は蜜の味』つてい
うべりいだしな。」

「それはケントの世界での戒訓ですか？」

「まあ諺だね。似たような物だよ。」

「人の心理をよく突いた言葉ですね……それだけに、心の冷
たさが私は悲しいです。」

訓練 자체が厳しいのは仕方が無いとしても、それを見て楽しんで
いるのは人としてどうかと思う……ってことか。

「ああ、いやじめん。冗談。俺だって頑張ってるシユレン達
は心から尊敬できると思つし、こいつなるとちょっと茶化したくなつ
ちゃつてさ。ごめん。」

「やつ……ですよね。」

やれやれ……まあ確かに、人でなしな発言だった事は反省しどこ
う。

「さて、次はどんな訓練なのかな?」

「随さん頑張つてください!」

やつと片手立て伏せに入った騎士達にファイーが応援の言葉を掛

ける。

反応は無いが、しかし皆さん（特に男性陣）の腕立て伏せの速さが加速した所から見ても、どうやら応援は届いたようだ。

「テメエらみたいなクズに声援が送られたぞ！！鈍間な愚団共おー！これで体力も回復したな！良し！メニューを三倍にしてやるー！」

そこへ教官の檄が飛ぶ。うわ……鬼だ。

声援を送ったせいでメニューが三倍になつた事を気にしてか、フイーはしおらしく沈んでしまつた……可愛い。

「全員終わったかあー！」

気付いたら、どうやら全員やり切つたらしい。

流石は騎士……あの地獄の腕立て伏せをやり切るだけでも相当だ。皆して顔が死にそうだけど……特に人を一人担いでいたショレンが

……

「走れ！」

いきなり教官はそう指示を飛ばす。

「倒れるまで走れ！潰れるまで走れ！死ぬまで走れ！－」

そこまで言い切つてから教官は指を鳴らす。同時に騎士達は訓練場の中を走り始めた。

何故か、まるで50メートルを走り抜けのような全力疾走で。

「【妖精よ】【強化を求める幻惑の理】【立ち止りし者に罰を与えよ】」

そこに教官が何事かを呟いた。
途端、薄桃色の霧の様なものが走っている騎士たち一人一人を包み込む。

「その全速力の速度を一瞬でも落としてみる。死ぬほど後悔するぜ。」

そんな教官の声が不気味に轟いた。

さりに速度が上がる騎士達……何が起こるか分からぬ状況がより恐怖を加速させ、足の動きを自然と速めるのだろう。

「無制限全力走……つてやつか。」

文字通り、ゴールの見えないマラソンを延々と全力ダッシュするトレーニング法……

精神力と瞬発力、そしてスタミナが付く無駄のないトレーニング……ただしそれは、膨大な体力がもともと備わっていることが前提……でないと怪我するし、危ないし、倒れるし……
でも、彼らは騎士だし、確かにもともと膨大な体力はあるんだよね……可哀想。

「ゼエ……ゼエ……」

先程の腕立て伏せ地獄の直後である。いくら体力のある騎士とはいっても、流石にスタミナは限界だろ。目に見えて速度が落ちて来た。

やがて一人の女騎士が立ち止ってしまいます。
見るからに苦しそうで、肩で息をしていました。

「止まつたな？じゃあ、死ね。」

そこに静かに落ち着いた声音の、それだけに恐ろしい教官の声が響く。

「キ、キヤアアアアアア……！」

ちょっと可愛らしい悲鳴を上げながら、その女騎士は頭を抱え、
そして先程の疲労感など消し飛んだかのように再び全力疾走の速度
を取り戻して我武者羅に走り出した。

「何！？」

「妖精魔術ですね。立ち止まる事で起爆するよう教官殿が仕掛けたのでしょう。効力は、恐らく……立ち止つた者に恐怖の幻覚
を視させる事……」

ヨウセイマジュツ？ 妖精魔術？ 固有名詞はよく分からん。
また後で説明して貰おう。

兎に角、その光景を見た騎士達の間にその幻惑の恐怖が伝播した
のか、さらに駆け足のペースが上がる。しかし、そうなれば当然疲
労感は増すわけで……一人、また一人と体力の限界がきて足が止ま
り、そして恐怖の幻覚に発狂した様な叫び声を上げながら再び駆け
出す……

それはなんて地獄絵図だつただろう……

「フツ、フツ、フツ……」

そんな中、唯一一度もペースを落とさずに走り続けていたのはシュレン唯一人。

シュレンだけが、一度も立ち止まらず、よつて恐怖の幻覚を見ていな。

流石は若くして隊長なんて呼ばれるだけの事はあるんだろうか？

「最後に戦闘訓練を行う！」

およそ三時間ほど全速力で走らせ続けた後、教官はそう声を張り上げる。

「全員これを持って！」

そう言いながら教官が指を鳴らす。

気付けばそこには何本もの木刀と、同じくいくつもの木製の盾が入れられた籠が二つ並んでいた。

騎士達は言われた通り、各自一人一セツトずつ、木刀と盾のセットを受け取った。

「よし！一人につき五人打倒せ！五人打倒した者から訓練を終了して良し！やられても立ち上がり！五秒以上寝ていた奴には私が直々に魔術を打ち込む！分かつたらさつさと戦えやあ……！」

「おおおおおおー」と騎士達は吠え、そして互いにぶつかり合つ。ガギッと木刀同士を本気でぶつけ合わせなければ鳴らない音が次々と響き渡る。

それでも折れない木刀も盾もどれだけ丈夫なんだろう……

「ハアアアアアア！！」

裂帛の気合と共にシュレンは木刀を大上段から振り下ろす。それを盾で受けた騎士が勢いを堪え切れずに後ろへ吹き飛び、地面を「ゴロゴロ」と転がつて意識を失う。

え～と…… 1、2、3、4、5……

「【精靈よ】【叱咤を求める業火の理】【寝ているクズを燃やせ】」

きつかり五秒後、そのシュレンにやられた騎士に向かつて教官から火球が放たれた。

その火球は寸分狂いなく直撃し、その騎士は大慌てで起きた。髪の毛が半分チリチリになっていた。

「さて、そろそろ晚餐の時間の様です。」

急にウルナがそんな事を言い出した。

「え？」

それに思わず問い返してしまったが、すぐに気が付いた。

校庭の部屋にいたあのメイド忍者が俺とフィニーの背後に当然の表情で突っ立っていたからだ。

気付けばいつの間にか空は赤く染まり、夕焼けの綺麗な景色が広

がっていた。

「ケント様、フィニ様、お迎えに上がりました。ただ今から、
ルヴィス皇室晩餐会に招待いたします。」

そうメイド忍者は無感情に告げた。

一十章 “騎士昇華訓練 其の弐”（後書き）

ちなみにこの騎士昇華訓練は僕が以前に実際にやらされたトレーニングをモデルにしています。

勿論、こんな地獄みたいな事はやらされていませんが（笑）

一一一章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の壱”

メイド忍者は慇懃に礼をした姿勢から動かない。これは、もつとアレだ……俺がOKって言わないと先に進まないイベントだ……

「でも今、ここと」…」

「晩餐会に招待いたします。」

黙りだこは……もつと梃子でも動かない。

「訓練の様子は後でお教えしますので、心配なく。」

そこにウルナがそう助け船を出してくれた。

まあそれなら良いか、と思い直して、俺はメイド忍者の方を向く。

「じゃあお願ひします。」

「はい。」

メイド忍者は再度軽く頭を下げる。背中を向けて歩き始める。どうやら付いて来いと囁いた事らしい。

「フィー、行け。」

「そうですね。」

フィーとしては未だガンガンと武器をぶつけ合いつ騎士達の間に怪我人が出ないか気が気でないようだが、それでも俺が声を掛けたらちゃんと付いて来てくれた。

「それじゃあウルナさん、また後ほど。ショレンにはよろしく

く伝えておいてください。」

「了解しました。楽しんで来てください。」

そして俺達はウルナに手を振り、訓練場を後にした。

メイド忍者に案内され、再び俺とフィーはランクルート城へ戻つて来た。

二重構造の入り口を抜け、真紅の絨毯の上を通り、「こちらが会場になります。招待客が全員揃うまでしばしの間お待ちください。」とメイド忍者に言わされたので、そのまま扉を潜った。その先に待っていたのはトラブルだった。

「なんだか泥臭い臭いがするなあ。」

開口一番に何なんだよ……

「おや？ 君は怒っているな？ これは驚いた。地を這いつぶにも感情があつたとはな！ ア～ツハツハツハ！」

広い部屋だ。あえて表現するなら結婚式での披露宴の会場。

地面は真紅とは違う落ち着いた色調の絨毯が敷き詰められ、その上にテーブルクロスの掛けられた丸テーブルがいくつも等間隔で並べられている。

まだ何も置かれてはいないが、恐らくは料理が並べられるのだろう。椅子が無いように見えるのは立食パーティーだからだろうか。

その部屋の中、案内されて扉を潜ると、目の前に一人の男が立っていて、こちらが何かを言いすらしない内にいきなり罵倒された。

肩まで届く男性としては長いブラチナブロンドの髪はウェーブが掛けられているかのように波打つており、その髪を搔き揚げる仕草はまさにナルシストその物と言った風体だ。

スッと通った鼻筋からも端麗な顔つきである事が分かるが、俺はとても彼が女性受けするタイプの人間には見えない。

「何か言いたまえよ。それとも、地を這う蟲には我々の言葉が理解できないのかな？」

しかし、俺もフィーも怒つてはいない。

部屋の中にこのナルシスト男以外に誰も居なかつたから。そして、そのナルシスト男の罵倒の言葉が、大人に構つて貰いたい子供の言葉ように聞こえて、なんだか微笑ましくなってきたから。最後に、そのナルシスト男が身長125センチ程度の半泣きの子供だつたらだ。

「お～よちよち怖かつたのかな？寂しかつたのかな？もう丈夫だよ～お兄ちゃん達が来たからね？寂しくないよ～。」

仕方なく、俺は生意気な感じがするこのナルシスト男、もといナルシスト少年の頭を撫でる。

「ぼ……私を馬鹿にするなよ～これでもぼ……私はバリアン家の当主サレファー＝レイ＝バリアン公爵なのだぞ～」

『僕』と言ひそうになるのを必死に私と言ひ変えてる仕草は可愛い。

まだ成長期も抜けていない少年その物……俺の世界的に言えば大体

小学校三年生くらいだろうか？

それにしても、公爵ときましたか……確かに爵位の中では一番偉い位じやなかつたつけ？

そうなると、このちびっ子はこの年で公爵なんて立場を手に入れるつわもの兵と云う事になるが……

「やーん。可愛いーー！」

「ムギュッ！？」

どうやらそんなものはフイーには関係なかつたようで、背伸びしたような仕草に萌えたのか、フイーがナルシスト少年もといサレファーを思い切り抱きしめた。……おいサレファー、俺と代われ。

だけどまあ、大丈夫、フイーのが可愛いよ……とは言わない。

「ええい離せ！貴様らの首なんぞぼ……私の一声で簡単に飛ぶのだぞ！大体誰だお前達は！……ぼ……私の次に入場するのは憎きネルグラン伯爵の奴だつたはず！」

どうやらサレファーは俺達ではなく、ネルグラン伯爵とやらを罵倒するつもりだったようだ。

「俺たちが誰かだと？フッ。そんなものは決まっているじゃないか。」

「何だ貴様……その自信は……」

俺達が誰かなんて……そんなもの……そんなもの……

「俺達は誰だ？」

ズコーつて感じでサレファーがずつこけた。

「なあフィニー？俺達の立場を分かりやすく説明してくれ。」

「えーとですね、カレイブスから村を救つた勇者とその御供の女性では？」

「フィニーはそれで良いわけ？」

「はい。」

まあそういう事らしい。

と、それだけのやり取りを交わして俺達はサレファーに向き直つた。

サレファーは何やら自信満々な表情で俺達を下から見下していた。

「そりゃ、貴様らが例の客人か。ハツー異国の、どこの馬の骨とも知れぬ蛮族を、由緒ある晩餐会に招くなび、皇帝陛下も耄碌されたものだ。」

まあじくら子供の言う事だからって、何でもかんでも見過ごすわけにはいかないよな。別に、子供の言う事にキレたとかそんななんじやないぞ！教育が必要だよ、うん。そつ、教育が……

「よしさる。今の言葉、皇帝に告げろ。」^{チク}

「めん、ブチギレた。」

「なー？お貴様！誇りは無いのか！？」

予想通り焦るサレファー。

そりや、皇帝を罵倒したともとれる発言だ。皇帝なんかに告げられたら困るだろ？

「ケント、相手は子供です。」

「いやいや、子供だからって見逃すから増長するんだって。」

「」は一度皇帝にガシンと叱つて貰おうぜ。」

「もう言つ場合、普通親に告げるのでは？」

そのフィニの発言の瞬間、俺に向かつてガーガーと吠えていたサレファーが急に黙つた。

「僕に親はない。」

あー……

「あーその……すいません。」

「ふん。気にすることではない。」

サレファーは一度だけ俺を睨むと興が殺げたとばかりに俺達から離れ、近くの壁に寄り掛かつて目を閉じた。

寝るわけではなさそうだが、誰も近寄つてくるなど言つたげだ。

「もうそういう気にする事ではありません。」

「うわっ！？」

心配そうにサレファーの方を見遣るフィニに見蕩れていたら、急に背後から声を掛けられて驚いて振り返つた。

「どうも、ヒュース＝タカ＝ネルグランです。以後お見知り

置きを。」

やや厭らしい笑みを浮かべた男性だった。

タレ目で、鼻も低く、なんだかとつてもスケベな感じ。

「特に貴女。」

「私ですか？」

「はい。今後とも好きお付き合いをお願いいたします。」

「ふえつ！？」

気障つたらしい事に、そいつはフィニーの手の甲にキスしゃがった。
キスしゃがつた！キスしゃがつた！！
ああ……こいつがサレファーの言つてたネルグラン伯爵だな……ブ
チ殺してえ。

「では、また後ほど。」

「あの……その……」

ネルグラン伯爵はそれだけ言つと、サッと身を翻してツカツカと
サレファー この場合はバリアン公爵というべきか……に歩み寄
つて行つた。

「やれやれ……」

「アハハ……」

その後、少しづつ人が集まり、やがてテーブルの上に料理が並べ
られて晚餐会は始まる。

何事もないと良いんだけどなあ……

一一一章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の弐”

帰りたい……心の叫びだ。

「俺、浮いてるよな……確実に。」

「わ、私もですよケント。」

豪奢なドレスやタキシードを着込んだ紳士淑女が談笑しながら食事をしたり、中央でワルツに合わせて踊つたり……
そんな中世ヨーロッパ的な世界にポンと送り出された現代人たる俺。格好だって白生地のTシャツにジャケット羽織つて、下はデニム生地のパンツなんていう素晴らしい私服。

フィニーの格好も到底周りの人間にマッチしているとは言い難い。

結局、俺もフィニーもそんな世界に入つて行けず、適当に皿に盛つて来た料理を隅っこで一人で食べている。

「お飲み物は如何ですか？」

ふいに横から声を掛けられた。

丸盆の上にいくつものグラスを乗せた若い男性だ。

「ええ……ああ……あの、結構です。」

しじろもじろになりながら断る。
だつて……だつて……なんか怖い。

「そうですか。」

それだけ言つて去つて行き、また別の人には声を掛けている。

丁度グラスの中の飲み物が空になつていた老紳士で、その老紳士は快く受け取つた。

「もう逃げようか？」

「ケント、気持は分かりますが……」

俺を窘めるようにフィニーが言葉を紡ぎかけたところへ、しかしフィニーが口を噤んだ。

一人の端麗な顔をした若い男性が近づいてくるのが見えたからだ。

「お初にお目に掛ります。ワタクシ、名をウェルストンと申します。」

いきなりフィニーの目を真つ直ぐに見てそんな風に自己紹介してくれた。

見た感じ若くしてかなりのお偉いさんって雰囲気だ。

侯爵とか伯爵とか地位名は知つてはいるけど詳しく述べよく分からないし、どれくらい偉いんだろう？

「貴女のような美しい方がこの様な隅で蕭々としていらっしゃつて、どうされました？」

「……」で気付く。

ウェルストンと名乗ったこの男の眼にはフィニーしか映つていない。俺なんて視界の隅どころか、脳内からも排除されている事だらう。

「もしよろしければ、お名前を教えていただけませんか？」

「……フィー。」

フィーはほんの少しの逡巡の後、控え目に答えた。
それがどうやらウェルストンの琴線に触れたらしく、フィーを見る
目が情熱的な物に変わった。

「なるほど。フィー様ですか。変わったお召し物ですが、な
るほど美しい貴女によく映える。今日この場で出会えた事を神に感
謝いたします。」

「ふえ！？／／／

ウェルストンは氣障つたらしに口上を並べると傳き、何事かと思
つたらフィーの手を取つて何の躊躇いもなく手の甲にキスをした。

ネルグラン伯爵に続いてまたあ！？

何？貴婦人の手の甲にはキスをするのが貴族の嗜みですか！？
現代日本人たる俺だけが分かつていなければなんですか！？

「一曲お相手願えますか？」

唇を話すと顔を真っ赤にしているフィーの目を真っ直ぐに見て、
そして少し頭を低くしながら右手を差し出し、そう言った。

Shall We Dance？つか？……こいつ殴つても良
い？

「おやおや、またウェルストン卿ですよ。」

「今度は異国の少女ですか。全くもって物好きな」とですな。

「関わらずに居ればいい物を、自ら関わって行くとは……」

「

そんな風にやり取りする声が聞こえた。

その話から察するに、このウェルストンといつ男は相当の女っぽい上に物好き男つてことですか……

「え？でも、その……」

フイーは困ったように俺とウェルストンの右手の間で視線を往復させる……何故こっちを見る？

そのフイーの視線を追つて、漸くウェルストンは俺がいる事に気付いた。

「おや？ 気がつきませんでしたな。女神と見紛うほどの美しい方がいらっしゃると思いや、その傍らには羽蟲の様に汚らわしい男。」

言つてくれるぜ……

俺は右手に握りこぶしを作る。

「お嬢さん、このような男は貴方に相応しくありません。是非、こちらの方で一緒にしませんか。」

ついでにフイーを攫つて行こうとしたがる……これはもう俺裁判的に死刑で構わないよな？

そういうわけで、俺は握りしめた右腕に力を入れなかつた。

「……とを……で……」

フイーの弦きが聞こえたから。

「え？」

「どうやらウェルストンには聞こえなかつたらしい。御愁傷さま

「ケントを馬鹿にしないで……」

同時に響き渡るパンという快音。

やつ、フィニーがウェルストンの頬を張つたのだ。

怒り心頭といった表情でウェルストンを睨むフィニー。
対してウェルストンは暫く何が起こつたか分からていない様子であった。

「あーフィニー？俺は氣にしてないから、そんなに怒らなくて
も……」

「私が怒つているんです！ケントの事、何も知らないのに！…
勝手なことばっかり言つて……！」

フィニーの優しさだな。

人の為に怒れるなんて、やつぱりフィニーは優しい。

「おおーあの少女、ウェルストン卿の頬を引っ叩きましたぞ。

」

「気に食わぬ若造ではあつたのだ。清々する。」

「しかし、由緒あるルヴィス皇室晩餐会でのよつた事をし
でかして、皇帝陛下殿が何を仰る」とやつ……」

会場内はざわついていた。

まあじこの馬の骨とも知れない異国の少女が、見た感じお偉いさん

を平手で殴ったのだから当然だ。

まいったなあ……

「「」の女……」

漸く我に帰つたウェルストンが怒りで顔を真っ赤にしながら、フィーを睨み返した。

う～む……ブチギレ状態だな。

「下手に出でおれば付け上がりおつて……許さん…高貴な私の顔を傷付けたその罪、万死に値する……」

いや、せいぜい傷害罪くらいかと。死刑にはならんよね。

「私だつて許しません！ケントに謝つてください……」

しかしフィーも頑として引かない。
どうやら譲れない一線がありそうだ。

「まだも言つか！ならばその身をもつて償え……【精靈よ】
【破壊を求める衝撃の理】」

「わ魔術！？」

短気過ぎだろウェルストン……

でも、まあ問題ない。

なんたつてフィーの言靈の方が圧倒的に速い。

「 上が……」

しかしフィニーが言靈を言い切る事は無かつた。
その前に、何者かの手がウェルストンの肩に置かれ、ウェルストン
の魔術の詠唱（？）が止まつたからだ。

「へ、陛下ー？」

なんとビックリ皇帝でした。

一一一章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の弐”（後書き）

いつこの話を書くと常々自分の文章力の無さと知識の無さを思い知らされます（汗）

なんたって、まず皆さんの服装の表現が出て来ない。
どんな服を着てるのかとか、そもそもどんな人達が集まっているのか、とか……

他には的確な固有名詞が出て来ない。

どんな風に書けばいいのか分からなくて適当に誤魔化した文章が二
カ所以上あります。探さないでください（汗）

文才もないですし読み辛いかも知れません。

こつしたら良いんじやないか、みたいなアドバイスがある方は是非
教えていただけると幸いです。

作品の感想も隨時募集しておりますので是非よろしくお願ひします。

一十三章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の参”

状況を説明しよう。

場所：豪華でだだつ広いとすら表現できるホール……披露宴の会場？

俺：間抜け……仕方ない

フィニー・可愛い……特記事項無し

目の前の男：名前はウェルストン。氣障、短気、フィニーに色目を使う、フィニーの手の甲にキスをした……百万回殺しても足りない

皇帝：穏やかな顔でウェルストンの肩に手を置いている……ウェルストンの顔が良い感じに青褪めている。やまあ

概ねそんな感じだ。

まあルヴィス皇室晩餐会なんて、いかにも伝統のありそうなこの場で魔術（？）をぶつ放そうとしたのを皇帝に制されているのだから、この世の終わり見たいな顔になるのは仕方ない。

大体、フィニーの手の甲にキスしたりするから、俺の怨念によつて罰が下されたのだ。

フィニーの手の甲にキスしたりするから……フィニーの手の甲にキスしたりするから……フィニーの手の甲にキスしたりするから……

だから、後でネルグラン伯爵にも天罰が下ると嬉しい。

「ケントにフイー、楽しんで貰えているかな？」

皇帝にそんな事を問われた。

正直に言えば楽しめていない。

ありえないくらい浮いていて気まずいし、高級料理の美味しさなんて分からぬし（果物とかお菓子の類は美味しい）、拳句の果てにはウェルストンとかいう意味分からんのが出てくるし……

フイーに目配せをする。が、フイーは「まだ興奮冷めやらぬ怒り心頭の表情でウェルストンを睨んでいた。よほど俺が馬鹿にされた事が許せないようだ……嬉しい。

「はい、楽しいです。わざわざ」招待いただき、ありがとうございます。」

しかしそこは流石フイー、皇帝相手に怒りをぶつける様な事もなく、素晴らしい大人な対応で皇帝に礼を言いながら頭を下げた。

「それは良かつた。さて、ウェルストン君。」「は、はい……」

皇帝がウェルストンにゆっくりとした口調で話しかける。肩に手を置いたまま……つてか見てたのかよ。

ウェルストンはビクビクしながら皇帝に応えた。

「公衆の面前で我が客人を罵倒し、さらにはこの晩餐会の会場内で魔術を放とうとするとは、当然罰を受ける覚悟はあるのかな？爵位剥奪も当然視野に入れて検討するが？」

皇帝の言葉は氷のよう「冷たい。

言葉の温度を測れるのなら、それはもう摂氏何度なんてレベルじゃなく、十一分に絶対零度にまで達していたと言えよう。怖すぎだ。

「う、それは……」

ウェルストンが若干涙目になつながらフィニーを見る。

まあ確かにウェルストンにも言い分はあるう。なんたって確かにウェルストンは俺を罵倒したけれど、先に手を出したのは……先にウェルストンの頬を引っ叩いたのは何を隠そつフィニーなのだから。

まあフィニーはそのままアッカンベーとか言いながら下を突き出し
そうな可愛い表情をしていたが……いや、フィニーの性格上アッカンベーなんてやるとは思えないんだけど、これがマジで可愛いんだつて！

といつのは可愛らしい描写で、実際のフィニーはまだ俺が罵倒された事を根にもつた様子でウェルストンを睨んでいたのだが。

「ふむ。まあ男女の諍いという物はどうしたつて感情的にはつてしまつ物だ。魔術も未遂である。」

唐突に皇帝はウェルストンを庇つ様な口上を述べ始める。

その言葉にウェルストンは光明を見た、というような輝かしい顔を浮かべた。
分かりやすい奴。

「かと言つて、それで不問にしてはフイー殿も取まるまご。」

同時に皇帝はフイーの方にも田配せす。

「セヒ、ジツしたものかな?」

セヒは皇帝が何を思ひのかと思えど、特に何もわざ思索するより手を頭に当つた。

無責任な皇帝である。

俺としてはビリでもいいのだが、皇帝がこちらの方にかまけているせいで、皇帝に挨拶できていない他の貴族の方々が何とも気まずそうにしている。

ソウコシ場での皇帝つてや、なんといつかソウ。……一段高い所にある豪奢な椅子でふんぞり返つてるもんじやないの?
何をじつそりとパーティーに忍び込んでいるんですか?

「フイー殿。」

不意に皇帝がフイーに声を掛けた。

「何ですか?」

フイーはウエルストンを睨むのに夢中だつたためか、やや憮然とした態度で皇帝に言葉を返す。

「この男、どうしたい?」

ウエルストンの肩に手を置きながら皇帝はフイーに、まるで夕食

の献立でも聞くかのような気軽な口調でそう問つた。

なんだ？ フィーイーが死刑にして欲しいって言つたら死刑にしてくれるんだろうか？

まあフィーイーの場合は、フィーイーが本氣で 死刑 つて言つたら、その場で死刑になっちゃうけどね。

「ケントを馬鹿にしました。許しません。」

でも何でフィーイーは俺が羽蟲呼ばわりされた程度でこんなにも怒つてくれるんだろう？ フィーイーが優しいから？ 優しいだけで俺みたいなやつの為に怒るか？

それとも、現代で馬鹿にされるのに慣れまくっている俺の感覚が鈍磨しているだけで、実際は『羽蟲』なんていう言葉はブチギレるくらい酷いものなんだろうか？

でもなあ……自他共に認める駄目人間な俺だぜ？

羽蟲なんて言われるよりも相当酷い暴言は色々と言われているんだけどなあ……

「許さないだと？ それはこちらの台詞であるーよくも高貴なる私の顔に傷を……」

「ふむ。色々と言つたい事がありそうだな。」

「あ、いえ……その……」

フィーイーの許さない発言に対してもウエルストンは憤慨したが、皇帝の絶妙に割り込んだ言葉に後が続かなくなつた。

「なるほど。両者ともに言つ分はあると。」

いやいやいやいや皇帝さん。

両者の言い分は明らかにウェルストンの方が悪いですよ！

「貴族は誰も例外なくその背に家の名を背負っている物だ。貴族に対して危害を加えるという事は、いかなる事情があるうと、その家に剣を向けると同じ事。顔に泥を塗られれば、貴族は当然名誉を挽回せねばならないのだ。故に、ウェルストンとて頬を張られれば、家名のためにも怒らないわけにはいかんのだ。」

俺はよほど不満な表情をしていたのだろう。背後からサレファーが俺に向かつて耳打ちをしてきた。

つていうかいつの間に俺の背後に！？
子供だから体重が軽くて足音がしなかったのか？

「男女の諍いは当人同士が納得する方法で決着をつけるもの。

」

皇帝はどこかいたずらっぽく俺に向かつてニヤリと笑つてからそ
う口にした。

「どうやら互いに相手に対する強い敵意も持つてゐる様子だ
しな。これは、ルヴィス帝国古来よりの伝統として決闘で決着をつ
けるしかあるまい。」

ふうん。

一三三章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の参”（後書き）

すいぶん遅れて申し訳ありません（汗
また頑張つて更新していきますのでどうか見捨てずにお願いします。

一十四章 “意地とプライド”

ルヴィス帝国において爵位を得る、すなわち貴族になるにはいくつかの方法がある。

一つは単純。

災害などが起こった際に人道支援に尽力することで爵位を得る事が出来る。

国家功労者に与えられるというわけだ。

最も単純であるが、これによって爵位を得ることは簡単ではない。それこそカレイブス級以上の国家を揺るがすレベルの災害を個人の実力において防ぐ事が出来なければならないのだ。

国を救い、大衆に英雄として祭り上げられてもしない限りはこの方法で爵位を得る事は無い。引いては貴族となりえない。

二つ目は大きな意味では一つ目と大差はない。

戦争などで武勲を上げる事。それによつて貴族へ迎え入れられることがある。

これも大きな意味では国家功労者に与えられる地位となる。最もリスクが高いが、ある意味最も容易く爵位を得る事の出来る方法である。

そして三つめ。

現在の貴族のほとんどはこれによるものであるが、つまり親が高位の貴族であり、親が亡くなる時、またはその以前に家名を受け継ぐ事。つまりは世襲である。

ウェルストン ウェルストン＝バダ＝ユカール伯爵はその軽薄な性格からは想像もつかないが、二つ目の方法において伯爵の地位を

勝ち取つた人物である。

そもそもコカール家は古来よりルヴィス皇室に仕える武家である。その現当主であるコカール大公は過去の大戦において並ぶ者が無いとされるほどの数々の武勲を上げた人物であり、その息子である所のウェルストンにもその才能は惜しみなく受け継がれているとのことだ。

つまりウェルストンは親の七光りではなく、自らの力によつて自らを伯爵まで押し上げた類稀なる努力家でもあるのである……ただ、無類の女好きであり、また短気である、という性格に難有りというだけの話なのだ。

「ウェルストンについて話を聞いた事を纏めるところな感じかな。」

他国の人といふことで事情には疎いであろう、といふ温情なのか、わざわざサレファーが説明してくれた。

なんかやけに馴れ馴れしい。懐かれた?

「そ、うなんですか?」

フィーは心底意外といった表情で俺の顔を見る。

武術とは心身ともに鍛えるもので、武芸に秀でる者は人格にも秀でている傾向にある。

それだけにウェルストンのあの軟派な性格は腑に落ちないのである。

「それでも私はケントを馬鹿にしたあの男を許しません。」

現在、俺達は広いアリーナに立っていた。

あれば。騎士昇華訓練が行われていた場所である。

現在、騎士昇華訓練は終了し、ベンチに座つて休憩していたシュレンやらが「何事?」といった表情でこちらを見ているのが何だか可笑しい。

さらに続けて入つて来た皇帝に労いの言葉を掛けられて恐縮していたのも笑える。

「でもさ、俺はフィーが戦うなんてなあ……」

フィーがウェルストンに対して怒つていて、ウェルストンも類を引っ叩かれた恨みをフィーに持つてているのだから、そりや二人が戦えば決着も着くだろう。

でも、女の子が、それもフィーみたいな可愛い子が男と戦うなんて、やっぱり日本男児としては捨て置けないよなあ……

的な事を皇帝に話したら、「ケント殿は女性は弱い者、男性は強い者と決めつけてあるのか?か弱き女性には男性と戦う権利すら無いとでも?」とか言われちゃあ黙るしかない。

男女平等だ……悪い意味で、と呴いたら皇帝は「男女平等とは面白い言葉だな。」なんて言い返してきた。

「ケントは……その……私の事を心配してくれているんですか?」

フィーが何やら頬をほんのり染めながら俺に問つてきた。

まあ、フィニーに怪我して欲しくないといつ意味では確かにフィニーの心配もしているけど、どちらかといつとフィニーと戦うウェルストンの方を心配している。

本気になつたフィニーに敵うはずがないのだ……ウェルストンがフィニーの言霊以上に速く動けるならば別なのがだが。

「ああ。やうだな。怪我だけはしないでくれよ。」「はい。」

フィニーは良い笑顔で俺に頷くと、再度表情を真剣な物に変えてウェルストンへ向き直つた。

「ケントを馬鹿にした事、ケントに謝つてください！」

「そのようなみすぼらしい男を庇うなんて、全く理解に苦しむよ。君こそ、私の高貴なる顔に傷を受けた事、地に額を付けて謝るのならば、特別に私の愛人として迎え入れても言い。九番目のね。」

フィニーとしてはそれは真摯な願いだったのだろうが、ウェルストンはそれを一蹴してしまう。

ウェルストンも冷静なように見えて、フィニーに平手を喰らつた事を根に持つていてるのだろう。頑として譲らない態度である。

「ケント……」

フィニーが一度だけ悔しそうな表情でこちらを見る。

しかし、もう俺もブチギレている……そう、ウェルストンはフィニーを傷付けた。

フィニーの手前、一応堪えているが、俺も今にも飛び出してウェルストンに殴り掛りたい気分である。

だから、俺はフィニーに一度だけ軽く頷いて見せた。「ちょっと痛めつけてやれ」みたいな意思を込めて。正しくその意思が伝わったかは分からないが、フィニーの表情はどこか安心したようなものに代わる。

フィニーが再びウェルストンの方へ向き直った。

「私が勝つたら、ケントに謝つてください。
『良いとも。私が勝つた暁には、そうだな……私の膝元に傳
いてもらおうかな。』

その言葉を最後に両者の間で空気が変わる。
両者同時に口を開いた。

一十五章 “フィーイ→Sウェルストン”

当然、同時に発言すれば早いのはフィーイだと……そう思った。

「【精靈よ】【雷を求める天空の理】【日に見えぬ速さにて敵を撃ち碎け】」

ウェルストンの詠唱は速かつた。

それは恐ろしいまでの速度で、フィーイが 止まれ のま を言い終わるか言い終わらないかの内に、そこまで言い切っていた。

なるほど、晚餐会場でのあれは理性を失っていたという事か……冷静ならこれほどの実力を發揮できると……

「止まれ！」

フィーイの目前。

直撃するかしないかというギリギリのところで、フィーイに向かつて降り注いできた雷は止まった。

雷が空中で止まるという不思議な現象が起こっているが、両者どちらに気を配る様子無し。

「一語法……だと…？」

何かウェルストンにとつて驚くような事があつたのだろうか？

「お返します。相手に向かえ」

フィーイの言葉通り、ウェルストンの放つた雷の魔術はそのまま方

向を変えてウェルストンに襲いかかる。

「クツ……」

ウェルストンは歯を噛み締めながらもサイドステップを用いてそれを回避。

「それなら……【妖精よ】【攪乱を求める幻惑の理】【我が分身を無数に配置せよ】」

途端、ウェルストンが一いつに分離したかと思つたら、あつという間に数え切れないほどのウェルストンがフィーを取り囲んだ。

むむ……分身の術つてわけか。

「 雜ぎ払え 」

フィーが右手を振る。

それだけで、前方に位置していた目算300人ほどのウェルストンが吹き飛ばされる。

「 むー? 」

どうやら予想外だったようで、ウェルストンの表情に動搖が走った。

ただ、全部のウェルストンが急に同じ表情を作るのはちょっと滑稽だった。

「 本物よ 」

フィーが背後のウェルストンを指差しながら囁つ。それだけで、ウェルストンの分身は全て焼き消えた。

なるほど……分身の一角を吹き飛ばして動搖を誘い、その上で本物を見抜く時間を作る……か。

策士だな、フィー。

フィーの口物が若干笑つたように見えた……来るか？攻撃の言靈

「なつ！？クツ……【精靈よ】－」

動搖しつつも新たな魔術を発動しようとするウェルストンだが、流石に今度は圧倒的にフィーが早い。

「【発破を求め……】
「倒れよ」

ズシャアと、脱力するような滑稽な音を立ててウェルストンはその場に転んだ。

「なんだこんなもの！すぐに立ちあが……
「動かないで！」

それは言靈ではなかつたがウェルストンの動きはそこで止まる。ウェルストンは当然言靈を知らないであろうが、それでも動けば自分がタダでは済まない事を察したのだろう。

「ほんの少しでも動いたら あなたは気絶します」

「言靈つてほんと万能だな……」

死ぬんじやなくて氣絶するだけってのがフイーらしげだ。

「何を馬鹿な……」

そんな事を言いながらもウェルストンは動かない。
きっと本能が告げているのだ。フイーの言つている事は「冗談ではな
い」と。

「降参していただけますね？」

「フフ……私も嘗められたものだ……」

しかし、そんな絶体絶命な状況にあって、ウェルストンは不敵に
笑う。
まだ諦めてなどいないとでも言つかの如く。

「私とて貴族としての矜持があるのでよ！【聖靈よ】【解放
を求める呪術の理】【我が身に掛けし呪詛の類を取り除け】！」

ウェルストンの体から一瞬カツと光が迸った。
その次の瞬間には、ウェルストンは全身の筋肉をフル稼働させてフ
イーから一気に距離を取つていた。

フイーの言靈を破つた……だつて！？

「そん……な……」

今度はフイーが動搖する番だった。

「そんなに自分の魔術に自信があつたのかな?」

世界すら呪める言霊術師であるフィーだ。
自分の力に自信を持つていい筈がない。

例えそのせいで化物と薙まれ、神に嫌われ、果ては世界を追放されたのだとしても、言霊はフィーが持つフィーだけの力だから、フィーが言霊に自信を持つているのは当然のことなのだ。

「そもそも、決着としよう。【精霊よ】【崩落を求める破滅の理】」

ウェルストンがこれで決着をつけるとばかりに詠唱を始める。

「ガガガガ……と、まるで大地が揺れているかのような威圧感がウェルストンから発せられる。

それほどに、これからウェルストンが発動しようとしている魔術が協力だという事か……

「私は……ケントを馬鹿にしたあなたを許さない!」

フィーはそれを見て、なお気丈にウェルストンを睨む。
その小さな体の、どこにそんな気力が詰まっているのだろうか……
と、俺は自分の竦んでいる膝を睨みながら思った。

「好きにしたまえ。これで勝つのは私だ。」

そうだな。

確かに勝負はウェルストンの勝ちだつたよ。

そんな余計な事さえ言わずにさっさと詠唱を完成させていれば。

「【大地に宿りて敵を穿つ刃とな……】

後は【れ】って付け加えるだけだったのにね。

「 衝撃を 顎へ 」

なんてピンポイントな……なんて思つ間もなく、ガキッ…ヒュウ
っと嫌な音がした。

ウールストンは少しの間その場でガクガクと震えていたが、やが
てその場に崩れ落ちて白目をむいた。

「あつー！」

そこでフイーは心底「しまった！」という様な声を出した。

「氣絶しちゃつたら、ケントに謝つて貰えない…………」

……そんなわけで、勝者フイー。

「あの、ケント……」めんなさい。」

「なんでフイーが謝るのさ。御苦労さま。良く頑張ったな。

何も出来なかつたから、代わりに俺はフイーの労を労うつもりで
軽く頭を撫でた。

頬が赤くなつていたような気がするけど……まあ気のせいだらう。
うん。

一十六章 “困惑のフイー”

訓練場内は俄かにざわついていた。

当然のことだらう。サレフナーの話が確かになら、フイーはこのルヴィス帝国内でも指折りの実力者を倒した事になるのだから。

まあそれを言えば、俺はこのルヴィス帝国内でのナンバー2であるところのシュレンを倒した事になっているわけだが、……そつちは騎士団の不名誉になるせいなのか、公には伝わっていない様子。

つてかまあ、そもそも俺はシュレンに勝ったわけではないのだから、そんな話は広まつていて欲しくないので助かる。

「ふむ。やりおる。流石は勇者の付き人と言つたところか。」

皇帝が何やら納得氣味に呟いた。

「一語法を習得しているとは……」

「よもや、他国にはこのよくな使い手が幾人もいると言つのか？」

「そんな馬鹿な。一語法の使い手など、帝国の歴史を振り返つても数えるほどもおらぬといつのに……」

他の貴族達の内緒話がちょっと聞こえた。

ウェルストンも言つていたが、ちくちく聞く『一語法』なるものがどうやらキーワードになつていいようだ。

一語法ね……一つの言語の法則ってとこか?

頭の悪い俺には分からん。誰か教えてくれ。

「でも、どうやら化物扱いは避けられそうだな。良かった……」

実のところ、それが一番不安だつたのだ。

「ケントは私を心配して？」

「そうだな。フィニみたいな可愛い子が化物扱いなんて不憫じゃないか。」

「可愛いって……私はそんな……／＼／＼」

何やら俯いてしまつたが、傷付いたわけではなさそうなので、まあ良いだろう。そんなことより……

「怪我してないか？実は魔術が掠つてたとか、そういうの、ない？」

「はい、大丈夫です。」

フィニは俺に向かつて微笑みながらそう言った……可愛い。

特に、若干頬が上氣している所とか……ヤバい位可愛かつたりする。

つて、そんなこと考へてる場合じゃない。

大丈夫だつたら大丈夫だつたなりに、男として何か気の利いた事を言わないと。

「そつか。良かつた。」

すいません。俺に語彙力という物は無いのです……

「フィニ殿とケント殿は交際されておられるのかな？」

「ふおおー!?」

「ふえつー!?／＼／＼」

一人揃つて素つ頓狂な声を出してしまつ。

そんな何もオブラーートに包まない話し方をするこいつは、予想通りサレファーだ。

「な、何故そんな事を?」

フィニーが明らかに動搖した様子で顔を真つ赤にしながらサレファーに詰め寄つた。

まあ俺みたいな駄目人間と恋人同士がなんて聞かれちゃあね。俺がフィニーの立場だつたら顔を真つ赤にするくらい激怒する所だよ。なのにフィニーはそれでも聞き返すなんて……本当にフィニーは優しいなあ。

あれ? 何でだろ? 泣が出てくるよ……

「いや、先程から一人の発す甘い空気が何とも言えなくてな。つい……」

空気の読める子供……

「ヒルヒラバリアン公爵殿。無粋ですよ。」

そこに晩餐会城でウェルストンより先にフィニーの手の甲にキスをした憎きネルグラン伯爵が現れた。

「む? ネルグラン伯爵……」

ギリッという感じでサレファーがネルグラン伯爵を睨む。

「そう睨まないでいただきたい。ワタクシはワタクシの友人の息子である君が私よりも高位の位に就いている事が妬ましいだけですから。」

うわー器の小さい人だー

「それで？無粋とは？」

「言葉の意味のままです。恋人達の睦言の囁き合いを邪魔するなど無粋だという事です。」

囁いてないし！

「恋人だなんて、そんな……／＼／＼

フィニはフィニで両頬に手を当てて顔を背けてるし……
やっぱり手の甲にキスしたような奴と顔を合わせるのは恥ずかしい
ってわけか。

全く……やっぱり許せんな。

「そんな事ばかり言つておるから、その年になつても恋人の一人も出来んだよ、ネルグラン伯爵。貴公も男であるのなら少しは自ら行動を起こしてはいかがかな？」

「フフ……所詮は世を知らぬ子供の戯言。ワタクシの心には響きませんよバリアン公爵。」

冗談みたいなやり取りのせいでき過しがちだが、この二人、互いを親の敵みたいな表情で睨み合っている……あんたら仲悪いなー

「そういえば、フィー殿はぜひここで一語法の領得を。後学の為に是非聞かせていただきたい。」

睨み合ひのむせこころで、ネルグラン伯爵がそうフィーに詰め寄つた。
フィーは少し怖がつてゐる様子で、たらたらを踏みながら少しだけ後ずさる。

「それは……私も聞きたかった事だ。フィー殿、どうか私は教えていただけないだろうか？」

そして、少し遅れてサレファーもフィーに詰め寄る。
一人の顔がフィーの前に並ぶ……あんたら仲良いな

「あの……その……」

フィーが困つたように口を噤む。

考えてみれば当然だ。フィーのは魔術じゃないんだから、恐らくは魔術関連の言葉だと思われる『一語法』について聞かれたつて答えられるはずがない。

しかし、何かしらの答えが返つてくると、サレファーもネルグラン伯爵も期待しているようで、ずいずいと少しずつフィーに顔を近づけている。

分かつてゐ?そのままキスしたりしたら殺すからね?君達。

「えつと……」

どうやら皇帝を始め、他の貴族達も気になつてゐる内容の様で、皆してフィニーの言葉に聞き耳を立ててゐるようだ。

会場内が異様なまでに静かな事から、そんな事は簡単に窺える。

さて、フィニーの空氣の中何を答えるのか……

「一語法って……何ですか？」

ですよねーそつなりますよねー

会場の中にはいる人が皆してずつとけていた。そりやもう滑稽なくらいに。

一十七章 “魔術”

元来、魔術の発動には長い詠唱を必要とし、実戦においてはそれほど役に立つものではなかつた。

剣と剣がぶつかりあい、刻一刻と状況の変わる戦場で、詠唱に時間のかかる魔術など隙を作るだけの物でしかなかつた。だから、当時の魔術は多対多の戦場で前衛が戦いながら、後方の魔術師がそれを支援するというのが一般的な戦術だつたのだ。

その状況を変えたのが、ある高名な魔術師の開発した、現在の魔術の常識とされている三段法である。

【何に力を求めるか】【どのよつた力を求めるか】【力をどのよつに扱うか】と魔術の詠唱を三段に分けて簡略化し、詠唱の加速と威力の安定を図つた物だ。

長い詠唱を唱えれば確かにイメージも強固なものとなり、魔術の威力も高まるが、その分隙が大きく、少しでも詠唱を間違えれば途端に威力が落ちてしまう。

しかし三段法であれば、まず詠唱が安定する為に間違えることが少なくなるので威力が安定する。

さらに、魔術の準備から発動までが短くなる為、白兵戦において魔術の実戦登用が可能となつたのである。

この時、力を求める対象によつて魔術の種類が変わる。

例えば、敵を打ち倒す力を求める相手は精霊。

水や炎、果ては大地から天空まで、自然界のあらゆる物に宿る精霊の力を借りて放つのが『精霊魔術』、通称『精霊術』と呼ばれる魔術である。

敵を惑わす搦め手を求める相手は妖精。

人の精神に干渉する悪戯好きな妖精の力を借りて放つのが『妖精魔術』、通称『妖術』と呼ばれる魔術である。

他にも『聖術』『神術』『呪術』など、求める相手は多岐に渡り、魔術の全てはいまだ解明されていない。

そして一語法とは、三段法が発明されたると同時期に、別の無名だった魔術師が発明した詠唱法の一種である。

目的は三段法と同じ、白兵戦高速戦闘内における魔術の実戦登用。

三段法が詠唱を三段に分ける簡略方式であることに對し、一語法とは魔術の詠唱の外殻を体内だけで組み上げ、後は口で一言発すだけで魔術を発動させるという代物である。

当然、三段法を遙かに超える速度で魔術を発動できるが、複雑な魔術の詠唱の骨子を体内で組み上げるなど並大抵のことではなく、長い詠唱を行うよりも魔術の威力が安定しない為、一般には受け入れられなかつた。

故に、ほとんど伝説上の物として、三段法の陰に隠れ、忘れられていつたのだった。

歴史を振り返ってみても、この一語法の使い手は片手で数えられる程度にしか登場していない。

『鳳印』の中には勇者が魔術師である話もあるが、その勇者とて一語法を使っている表現はなされていないのだ。
それほどの代物なのである。

「なるほど……一言で世界だって搖るがすフイーの言靈は、

「この世界では一語法として認識されるわけか……」

誰にも聞こえないよつこじつやうと呟いた。

それにしても良かつたと思つ。

これなら、フィーは天才と扱われはすれども、化物なんて呼ばれた
りはしないだらう。

と、ここまで説明はサレファーによるものである。
説明お疲れさん。

「魔術の常識を教えられぬままに教育を受けたという事かな
?なるほど、三段法という先入観がなければ、一語法が当然の物だ
といふ事も納得がいく……」

魔術について何も知らない俺達を見て、サレファーはそんな風に
解釈した。

「となれば、フィー殿の師匠はかなりの実力者……よほど高
名な方に違いない!」

ただ周りの空気がこんな感じに流れて行くのは、ちょっと好まし
くないかな……

「フィー殿の出身を是非とも教えていただきたい!そして願
わくば、フィー殿の師匠殿にお通りを!」

「あの……それは……」

ネルグラン伯爵がフィーの手を握りながらそんな事をいだした。

それにフイーが困った顔をするもんだからさあ大変。

「それならば是非とも私めにも！」

なんて言いだす貴族たちがこそつてフィーに詰め寄るのだ。

「うう……それは……」

泣き出しそうになるフイー。

二九

俺は堪えられず、叫んだ。

全ての目線が俺に向いている。

心を散らす事が出来るのか……

俺は考へに考へて、そして結論を出した。

「フイーの師匠は俺だ。俺がフイーに教えた。カレイップスだ
つて一撃で倒す俺がな！」

一十八章 “ケントのハッタリ”

何とも言えない空氣になつた。いつそのこと音が死んだと表現しても良い。

それくらい、一斉に喧騒が収まつたのだから。

そりやもう、皆して啞然だつた。

予想外、想定外、奇想天外……まあ概ねそんな感情を纏い交ぜにしたような表情で皆して固まつていた。

俺を除けば唯一固まつていはないのは当然フィー。

その表情は「ありがとうケント」と言つているようでもあって、それが救いだ。

「 「 「 「 「え……ええええええ……！」」」」」

時間が唐突に動き出したかのよう、皆さん紳士淑女らしからぬ驚愕の声を出した。

ええ、ええ、そうですよ。

どうせ俺みたいな駄目人間がこんなこと言いだしたつて、お前馬鹿じゃねえの？的な空氣が生まれる事くらいわかつてましたとも。

「だ、だが、よくよく考えてみれば、彼は南の村でカレイップスから村を守つたと聞く。」

「なるほど。一語法の使い手、それも人に教授することが出来るほどの手だれの者ならば……」

「カレイップスを一撃というのも頷けない話ではない、ということか。」

お~びひらめいて感じに興味が俺の方へ向いたみたいですよ。

「……」

なんで皆してまた静かになるのかなーなんて思つてみたりして。

「ケント殿、その話は真か!..?」

サレファーが明らかに落ち着きを失くした様子で、俺に抱き付かんばかりの勢いで詰め寄つて来た。

「あ、ああ。」

皆の食い付き方が予想外過ぎて、ここで「いや、嘘です」とか言つたらどうなるかなー、なんてちょっとと考えて、黙つてみたくもなつたけど、流石にそれはどうかと想つのでやめた。

「弟子にしてくださー!…!…

おおう……マジか!..?

…………うん?

うん、なんかシコレンも混じつてゐる……

ちなみに皇帝は呆れたような表情で頭を下げる貴族達を見ていた。

「(フヤー!……びひつよひへ.)」

「(ア、アハハ……)」

流石の俺も困り果てて助けを求めるようにフイーを見たら、フイーはフイーでとても困った顔をして苦笑いしていた。

クッ……駄目だ、ここにでフイーを頼つてちゃなんにもならない。

「そうだよな。皆魔術の腕、上達したいもんな。」

「おお！では！」

こうなつたら、口先だけの駄目人間らしく、口先だけで乗り切つてやる。

「だが、断る。」

「めん……俺は口先もない駄目人間なんだ……

「な、なぜ！？」

一番最初に顔を上げて納得いかない表情で詰め寄つて来たのは、予想外な事にネルグラン伯爵だった。

よし、ここには頑固職人っぽく行こう。
雰囲気あると思うし。

「一語法の真髓を伝える相手は生涯に一人と決めている。そしてその一人は、今ここにいるから。」

落ち着いた冷静さで着飾つて、俺はフイーを掌で示しながら穏やかにそう告げた。

それで、貴族たちはこぞつて口を噤む。

男性陣は悔しそうに頑垂れ、女性陣はうつとつしたよつこやや類を赤く染めながら溜息を漏らした。

あれ?なんかイメージした反応と違う。

俺はもつとこりでリマの頑固オヤジっぽく『弟子はひりあん!…』みたいな気持で言つたんだけど…

と、思つていたら俺の服の裾が後ろからつこつと捕まれた。うん?と思つて振り向けば、それはフイーの仕業だった。

何故だか顔が真っ赤だ。風邪か?

「ケント……その言い方はずるこです……／＼／＼

そしてせりに赤くなるフイー。

おかしいなあ……フイーは俺がフイーを庇つてこう言つた事を分かつてると思つから、俺の言う事なんて全部戯言だつて分かつてのはずなんだけど……

何に反応したんだろう?全然分からぬい……

「クッ……付け入る隙は無さそうですね。」

ネルグラン伯爵が悔しそうに唇を引き結んでいた。

そんなに一語法を教えて貰えないのが悔しいのだろうか?

「なるほど。恋仲とは僕も失礼な事を言いました。」

あ、『私』って言い直すの忘れてる。
サレファーも表面上は取り繕いながらも動搖してるなー
やつぱ子供だな。

とか、そんな事を考えていたせいで、その後にサレファーが付け加えた一言は聞きそびれた。

「夫婦でしたか。」

なんかサレファーが言つたけど、まあそんな重要じやないだろ。こんな空氣の中で言つた事だし。

どうでも良いけど、いい加減あっちで完全に伸びてるウエルストンを誰か介抱してやれよ。
あれだけ憎たらしく思つてたけど、ずっと放置されてたし、なんだか可哀想になつて来た。

「なあ、フイー？」
「はーはいー?なんですか!?」

なんかバネみたいに凄い勢いでフイーは俺の言葉に反応した。
相変わらず顔が赤い。

照れ屋さんめー、つて額をコシソシつてやりたいなー

「なんでそんなに拳動不審なの?」
「な、なんでもありません!それで、何ですか?」

何でも無いいらしーので、俺は気にせず先に進める事にした。

「ああ、いや。ウルストンもそろそろ起こしてあげても良いんじゃないかな、って思つてさ。ずっと放置されてるし、なんだか可哀想になつて来ちゃつて……」

「ケントが良ければ……」

「うん。さっきのでスッキリしたし、もつ氣にしてないよ。」「ちうですか？では……」

まあ始めからそんなに気にしてはないけどね。

「 田 覚め よ 」

その一言と同時にウェルストンが「う、うん……」って感じで起き上がり、周りからオオ～とどよめきが上がる。

「クス……」

「 なあ フィー 」。

「 何 で す か ？」

「 もし か し て 、 今 か な り 機 嫌 が 良 い ？」

「 そ そ そ 、 そ そ な こ と な 、 な い で す よ ー ？」

かなり機嫌が良かつた。

元の世界で化物呼ばわりされてたフィーだ。

それこそ言霊を使ったびに人々から軽蔑の表情で出迎えられることだってあつただろう。

それがこの場において、皆から純粹な興味と驚愕をもつて迎えられている。

目立つのは苦手そうだが、悪い気分ではないのだらう。

「あーこの小娘つ！」

ウェルストンが周りの状況を察せず、フィーの姿を認めるとき途端

立ち上がって襲い掛つて来よつとし、

「馬鹿者があーーー。」

初老の男性に一喝された。

「ランス侯爵殿！？へ？あれ？」

しかも周りの貴族全員に睨まれている状況を察したのかウエルストンは驚きの周り言葉に詰まる。

「ひがひがおわす御方をどなたと心得るー。」

先の副将軍、水戸光k…………いや、何でも無い。

「どなたも何も、ただの異国的小娘では……？」

「馬鹿者あーーー。」

「ヒツー？…………？？」

哀れウエルストン。

状況が察せせず、何故自分が怒られているのかも分かつていませんでした、とさ。

一十八章 “ケントのハッタリ”（後書き）

初の一日に三章アップ。

今日は良くネタが出て來たので頑張つてみました。
この先もこんなペースで投稿できたらいいのですが、
また試験も始まりますし、暫く更新できないかも……＾＾；
できるだけ頑張ります！

一十九章 “言靈についての疑問”

なんだかんだで時間もかなり遅くなっていたので、結局あの場は解散となつた。

晩餐会でのあの事は、決闘に負けたウェルストンが全て悪いという事になつたが、周りから見てももう充分に罰を受けたうつという事でお咎めは無しになつた。

まあフィニーの言靈をその身に受け、さらに罰を喰らつたんじゃあいくらなんでも可哀想だもんな。

……あれ？なんだか、フィニーの言靈を喰らつて、さらに騎士昇華訓練なんて罰を喰らつた誰かがいたような気がするけど……まあいいか。

とりあえず、俺はこの現状をどう打開するか、それを全力で考えないといけない。

何が起こっているのかと言つと……

「ケント……」

ドキドキが止まらねえー……と、取り乱した……

つまりだ、俺とフィニーは皇帝によつて王宮にある客人様の部屋を宛がわれ、そこで休むことになつたのだが、如何せん俺とフィニーが同室だつた。

なんで、部屋は有り余つてゐるだろうに、わざわざ人間を一人、それも男女を同じ部屋に押し込めるのだろうか……

これは陰謀の香りがする。それもかなり俺にとつて好都合な。

「あの……、どうしましょ?」

せりに、部屋の中にある寝具はやや大きいが、しかしシングルの域を出ないベッドが一つあるだけなのだ。
この状況下で余計な事を考へない奴は男じゃない。いや、人間じゃない。

だがしかし、俺は駄目人間ではあるが紳士である。
まさか夜の闇の中で婦女子を襲うなどと、とてもではないが看過出来るものじゃない。

それもフイーのよつな可愛らしい女の子だなんて、例え明日死ぬとしても俺は傷つけたくない。

それでも『俺の倫理観と理性VS俺の本能とフイーの可愛さ』といふ構図の中で、前者の勝率がいかほど残っていると言つのか。
それは例えるなら『銃器を持った成人男性（戦闘力5の「ミリ」）VS とある惑星の某戦闘民族（地球を何度も救つた英雄の兄）』へくらいの差があると言えよう。

つまり、瞬殺の、それも返り討ちだ。

「だだ、大丈夫。フイーはベッドで寝て良いよ。俺は廊下…
…いやトイレで寝るから。」

「そこまではしなくても…?」

思わずと言つた様子でフイーが驚いた声を出した。
どうやら俺の冗談を真に受けたらしい。

「や、それならケントこそベッドで寝てください。私がトイ
レで寝ますから…」

「フイーをそんな所で寝かせられるはずがないじゃないか。

トイレは俺にこそ相応しい寝床だ。」「

変な奪い合いが始まった。

「いえいえ、私がトイレで寝ます。トイレで寝る女だと元の世界では有名でしたよ。」

それで良いのかフイー・フイアン・ショルツ……

「何を? トイレで寝る男とは俺の事だとも。」

つていうか、アレだよね。

夜遅くまで起きると変なテンションになるよね。

今日は実際いろいろあって、疲れ過ぎて寝れないせいか俺もフイーもテンションがおかしなことになっていた。

「ブツ、クスクス。
「ハハ、アハハハハハ。」

暫く俺とフイーは不毛な言い合ひを続け、やがてどちらからともなく笑い出した。

「なんだ、フイーってそういう愉快なところもあったのか。」

「私、こういう[冗談の言ひ合ひ]って本当は好きなんですよ。」

この世界に来て、いろいろあって緊張してて、そんな余裕もありませんでしたから。」「

それは良い。また今度フイーにネタを振つてみるとしよう。フイーとなら楽しいやり取りが出来る筈だ。

「まあ、眞面目な話、ベッドではフイーが寝てくれ。女の子がベッドじゃない場所で寝るなんて、俺の精神衛生上良くない。」

「そうですか……では、お言葉に甘えて。」

そう言つてフイーはベッドに腰掛けた。

「そう言えば格好……」

「そうですね。このままでは寝苦しいですよね。清めよ」

なんだか暖かい光が俺とフイーの体を包んだ。

その光が収まるごと、なんだか風呂上がりでも感じないような清潔感が俺を呑みこんでいた。

服もまるで新品の様にピカピカで、ノリが付いてパリッとしていた。

「後は…… 睡眠に相応しい格好に」

再び俺とフイーを光が包む。

気付けば俺の格好は上下紺色のスウェット。

フイーは薄手のブラウスらしき服と、それと同じ生地のパンツというラフな格好になっていた。

「へえ、やっぱり便利だな。荷物いらずだし。」

「ア、アハハ。」

照れくさそうにフイーは髪を搔いた。

「でもさ、ちょっと不思議に思つてたんだけどさ。」

「何ですか？」

折角だから、一つ疑問に思つてた事を聞いてみる。

「俺の服つてや、やっぱり俺の世界独特の物なわけだぞ、フィーも俺の服の事なんてこれっぽっちも知らなかつたわけだろ?」

「はい。そうですね。」

「言靈で服を出すつて言つてもさ、俺の世界の服がこうして出てくるのはおかしくないか?」

「ああ、その事ですか。簡単な事ですよ。私が言靈で『服』という単語を言つた瞬間にケントは元の世界で來ていた服を想像しますよね?」

確かに、俺はある草原で服を着たいと思つた時、真つ先に元の世界で來ていた服をイメージした。

「言靈は、そのケントの想像した服の材質や形状などを、こちらの世界にある物を使って再現したのです。だから、厳密に言えば、その服はケントの世界の物ではなく、あくまで良く似た物というんですね。」

ふーん。何となく分かった。

「じゃあさ、例えば『ダウンジャケット』みたいに情報を付け加えれば、言靈で何でも取り出せるつてわけか。」

「ええ。ただ、私が知らない物である場合は、ケントが脳内に正確に思い描ける物に限りますが。」

だから俺が正確にイメージした服は取り出せたつてわけだ。

「じゃあ、武器はどうだ?」

「……でも、一つ教えてた事をフイーに訊いてみる。

」のまま駄目人間としてフイーに頼りっきりになるのは、いくらなんでも駄目すぎる。

いざという時には俺だって身を守るくらいの手段は欲しい物だ。さらに望むなら、俺がフイーを守りたいしな。だから、俺の戦う手段として武器が作り出せるのなら、それがそのまま俺の戦う手段になる。

「武器、ですか？」

「ん。武器。」

「どうでしょ？私は武器に触れた事が無いので、刀剣や銃器の類は……ケントには武器についての素養が？」

あるわけがない。

現代日本人である俺に武器の素養があつたら大問題だ。

「形だけは作り出せても、その用途を達成できる物は作れないのではないかと。」

じゃあ駄目だな。

「そつか。分かつたよ。」

「すいません。言靈は今ここにある物をどうにかするには向きますが、新たに何かを作り出すには向かないんですね。」

心底申し訳なさそうにフイーは叫ぶ。

そんなフイーを見て、俺は心苦しくて……

「なんでフイーが謝るんだよ。フイーは全然悪くないって。」

と、そう慰めた。

「ありがと、ケント。」

俺の言葉を受けて、フイーは微笑んだ……まさしく、凄く可愛い。

「あ、ああ、寝ようぜ。俺、あっちのソファで寝とくからさ。

「はい、ねやすみなさい。」

思わずフイーの笑顔に見蕩れた俺は、頭をぶんぶんと振つてから、フイーに「ねやすみ」を告げてソファの方に横になった。

疲れていたのか、すぐに睡魔は襲ってきて、あいつこいつ間に俺は眠りに落ちた。

思案 “ケントヒツヒ”（前書き）

フイニ視点
短めです。

思案 “ケントについて”

駄目人間……ケントはよく自分の事をそう言ひ。まるで、それが当然、自分はそつあるべきだという戒めであるかのように、ケントは何度も何度も言うのだ。

特に大きい声というわけじゃない。誰かに聞かせようというわけでもない。ただ、ケントが何かをするたびに、小さく、自分を律するように駄目人間だと口にする。

一体ケントは元の世界でどれほどの迫害に合つたのだろう……自分が駄目人間だと、そう妄信的なまでに断言するケントは、元の世界で一体どれほどの重圧の中を生きて来たのか……私には分からぬ。

ケントは駄目人間なんかじゃないと私は思う。

ケントは優しい、凄く……優しい。

ケントが行動する時、ケントは我が身を顧みていない。

例えば、村がカレイブスに襲われた時、ケントはカレイブスに踏み潰されそうになつた女の子を見を呈して守ろうとした。

あのときのケントからは、その後助かる術を考えてあつたとか、何かしらの打診があつたとか、そんな雰囲気を一切感じ取れなかつた。それはつまり、ケントは何の見返りも求めずに、何の関係もない赤の他人の為にだつて咄嗟に命を掛ける事が出来るほどに優しい。

そんな優しい人が、自分の事を駄目人間と言い続けるなんて……私にはとてもケントの心理的な重圧を推し量ることができない。

私にベッドを譲り、ソファの方で横になるケントを見ながら、私はそんな事を考えていた。

「……ケントの疲労を取り除け」

既に静かに鼾をかき始めたケントを指差しながら、私は静かに呟く。

ケントは頬を少し緩めながら寝返りをうつた……あ、ソファから落ちちゃった。

「うべっ」と呻き声を洩らしながらも、ケントはそのまま眠り続ける。

私はそれを見て、少し微笑んでから続きを考へる。

私が元の世界で聞いた“声”は「別の世界で人生をやり直さないか」と訊いた。

ケントだって同様だったはず。ケントも、私と一緒に人生をやり直したかつたんだ。

私は、この世界で、新しい自分を探していけると思つ。

言靈を使って、そのたびに恐れられる自分じゃなくて、そのたびに人が喜んでくれる道を探していける自分。

私はやり直したい。

ケントはずつと引き摺つている。

元の世界の自分を引き摺つて「どうせ自分は駄目人間だから」と諦める……それを悪い事だとは思わない。弱い事だとも……思わない。そんな風に考えてしまったくらい、元の世界はケントにとつてどうしようもなかつたんだ。

でも、私はケントに新しい自分を見つけて欲しい。

自分を駄目人間だと蔑んで、それでケントにもある良い所を自分で見つけられないなんて、そんなのは悲し過ぎる。

私はケントの良い所を知っているから、ケントにも自分で自分の良い所を知つて欲しい。

それは、難しい事じやない筈。

「ケントは、強いですね。」

自分の事を駄目人間だと思い込んでしまったの重圧が常に掛け続けられるなんて、私には絶対に耐えられない。それなら、自身の行動の責任で化物と呼ばれる方がまだマシ。

私が化物だつて呼ばれるのは、私の行動の結果だから、私はそれを享受しなきゃいけない。

でも、ケントはなにも悪くないのに、それで駄目人間だなんて、そんなの酷い。

私にはない強さ。

ケントは……

「ケントをベッドへ」

私はベッドの上で少し左にずれながら、言靈でそう告げた。
ケントの体が、スウと浮いて、そして少しだけ大きいベッドの、私の隣にすっぽりと収まる。

「ケント、おやすみなさい。」

「グウ……」

寝息で返事が返つて来て、それに私は微笑むと、自分も目を閉じて、やがて眠りの世界に落ちた。

三十章 “朝日覚めて”

「う
ん」

なんか……凄い良い匂いがする。

と朝の陽気を肌が感じ始め
眼鏡が若干冷め始めた俺は
膝蓋と

人並みの大きさの、柔らかくて、暖かくて、それで良い匂い何かを俺は抱き締めていた。

そんな風に思つて、再びまどろみかけた頃……

1
?

本当にこのまま死んじゃうような気がして、思い切り目を開いた。

11

.....

不安に……」

「斐二だつた。

人並みの大きさの、柔らかくて、暖かくて、良い匂いの何かは……
フィニーダった。

」

「？」

思い切り息を吸って

「お、驚かされた?」

何故！？どうして！？ why!?

俺つてソフトで寝たよね！？
なのに何で！？

まさか……駄目人間である俺は頭の中も駄目人間で、まさかの欲求不満が爆発し、無意識にフィニーのベッドに潜り込み、そしてチョメチョメがチョメチョメで……駄目だ意味が分からぬ。

「あの……ケント？」

「フイーの声も俺の頭に入つてこない。」

「駄目だ……駄目人間過ぎる。紳士で真摯である事が、俺みたいな駄目人間の唯一の矜持だったはずなのに……なのに、紳士ですら無かつたなんて……」

「あ、あの……ケント。」

まさか夜中に無意識に起き出して女の子のベッドに潜り込むなんて、これはもう駄目人間なんてレベルじゃない。人として終わつてだ。もう俺を駄目人間と呼ぶなんて、全国の駄目人間様に失礼な話だ。

「これはもう死んだ方が良い。死ぬべきだ！死ななきや駄目だ！！」

死んで良い人間なんていないけど、死ぬべき人間はいる……そつ、俺だ。

「ケント、あの、落ち着いてください。」

「俺みたいな駄目人間は死んだ方が良いですか！？むしろ死んで良いですか！？」

「ケント、落ち着い……」

「いっそ殺せええええええええ！」

「落ち着け」

落ち着いた。

落ち着いたのにオチ付かず、なんちゃって……座布団没収。

「落ち着きましたか？」

「うん。落ち着いた。落ち着いた結果、俺は生きるに値しない駄目人間だと判明しました。なので、俺は今すぐあの窓から飛び降りて、死んで償おうと思います。では！」

そうフィニーに告げ、俺は青い空の見える窓に向かつて昂然と猛ダツシューを……

「待つてケント！」

フィニーに後ろから抱き止められた。

フィニーみたいな可愛い子にそんな事をされでは、止まらざるを得

ない。

「ケントが寝返りを打った時にソファから落ちまして、それで寝苦しそうだったので私がベッドまで運んだんです。ケントが悪い事なんて何もありません！だから、早まらないで……」

危うく自殺しかけた俺を宥める様にフィーはそう告げた。

「な、なんて優しいんだ……そんな優しさを俺に掛けてくれたって言うのに、俺は変な事を勘違いして……もう俺は生きている事が恥ずかしい！死んで償うよ……！」

「待つて！」

一度目は冗談だつたんだけど、フィーは真剣な表情で俺を止める為、俺の腰に回している腕に力を込める。

そのせいで、その……フィーの豊満な胸とか、あのその……俺みたいな駄目人間には刺激が強いと言いますか……そのあのえーと……

「ケント、そんな、自分を責めないでください……」

「ハハ……冗談だよ。もつ死のうとしたりしないって。だからさ、もう離しても大丈夫だよ。」

むしろこのままじゃ、心臓が破裂して死んでしまう。

「本当にですか？」

上田遣い……めっちゃ可愛い。

こんな顔されたら、死ねるわけがない。

「本当だつて。『めんよ。』

「はい。」

やう言ひ途端にフィーは笑顔になつて俺を止めていた腕を離した。

当然、俺の背中に触れていた柔らかな二つの膨らみも離れる。
それが少し残念で名残惜しいけど、まあもう一回抱きついてとは言
えないし、仕方ないから諦める。

「なんか……腹減ったなあ。」

「そうですか?」

とりあえず色々誤魔化そうと思つて「そうですね。朝食は何でし
ょう?」みたいな返事を期待して振った話だったけど、そんなフィ
ーの返事で俺はある重要事項に思い至り、両手を地について落ち込
んだ。

「そうだつた……」この世界やフィーの世界じゃあ朝食を摂る習慣は
無いんだつた……ああ、腹減った。

「ケント、ランクルートの街を見て回りませんか?もしかし
たら、軽食を摂れる店があるかも知れませんし。」

フィーが氣を使ってそんな事を言つてくれる。

「そうだな。ちよつと朝の散歩と洒落込もうか。」

そんな気遣いが嬉しくて、俺は「承した。

ただ一つだけある問題は……

俺達、この世界の金持つて無いんだけどね……

三十一章 “朝日覚めて”（後書き）

お気に入り登録件数が百件を突破しました！
皆さん読んで下さって、本当にありがとうございます！
これからもよろしくお願いします！

三十一章 “テートか！？これはテートなのか！？”

俺とフィーは身支度を整えて、番兵さんに挨拶をしながらランクルート城を出た。

中途ですれ違ったサレファーは俺達に付いて行きたがっていたが、それはネルグラン伯爵に諫められていた。

何やらいきなり口喧嘩が始まつたが、そちらは無視する方向で。

「賑やかですね。」
「そうだね。」

フィーと並んでランクルートの街を歩いていた。

周りでは八百屋らしき店の店長さんが威勢の良い声を張り上げて客引きをしていたり、玩具屋らしき店の前で子供たちが集まっていたり、小道の奥にちょっと怪しい感じの大人な夜のお店があつたりと活気に満ち溢れている。

「さて、こちらが確か貴族街だそうですね。」
「そんなこと言つてたな。」

ランクルート城から続いていた道の途中の坂道になつていての丁字路を見上げる。

その先には、ここから見るだけでも分かるくらい華やかに装飾された豪奢な建物の数々が見える。

「どうする？ちょっと探検してみる？」
「え？ そうですね……ケントが……その……行きたいのであ

れば。「

顔を赤らめてもじもじとした仕草でそんな事を言つフイー。
思わずして俺の心臓は口から飛び出した……様な気がした。

「はっ！？」

ちょっと待てよ……冷静に考えよつ。

得意の状況整理だ。

俺・駄目人間……問題ない

フイニ・可愛い……問題ない

状況・一人つきりで街を歩いている……デート？

「これはやばい！

どうやばいのか俺には欠片も分からぬけど、なんかやばい！

「それで、あの……どうしますか？」

どうしようね。

正直貴族街なんて見ても良いとこないと思うんだけどね。

でもまあ、中世ヨーロッパ的街並（中世ヨーロッパ的街並を俺は知らないのだが）に見える優雅に立ち並ぶ建物は、確かに平民と貴族とを分ける絶対的境界線にも見えて、一度くらいは見ておきたい衝動にもかられる。

「そんじゃ、一回行つてみよつか？」
「はい。」「

「 フィーはニコラと微笑んで見せた。

「 グハッ、俺の心臓に45のダメージ。ちなみに最大HPは50...
もう死ぬ寸前です。でもたすけなくて良いよ。

「 そんなわけで、俺とフィーは二人並んで貴族街の方へ足を向けた。

「 シューレンの話によると、ここランクルートは皇帝が治める街という事で特別貴族が幅を利かせているという事は無い、とのことだつた。

「 そもそも貴族とは、領地を持ち、そこを治める領主の事を言つ。単なる金持ちを貴族とは言わないのだ。

「 無論、現在ランクルートにいる貴族達も自分達の領地を持っている。それがなぜこのランクルートに集まっているのかと言えば、今回の晩餐会出席の為という納得の答えが返つて来た。

「 兎も角、その領地内でこそ権力を發揮できる貴族だが、皇帝の治める土地の中で自分勝手などいかな貴族といえども出来るわけがない。と、いうのがシューレンの談だつた。

「」

「 俺とフィーは無言で立ち尽くすしかない。

「 なんせ、貴族街に足を踏み入れた途端、鎧甲冑（シューレン達の鎧とは違う）を着込んだ兵士に囲まれて槍を向けられたからだ。

「ここは貴族街である。貴様ら下々の者に足を踏み入れる権利など無い。」

ショレンの嘘つき！

ビックリするくらい貴族と平民の格差あるやん！？

「おい！聞いているのかーー？」

いつまでも黙っている俺とフィーを見て、痺れを切らした兵士の一人が槍の先を牽制するように俺に近づけた。

「うわっー？」

「ケントーー？」

兵士の方に攻撃の意思など微塵もなかつたであろうが、武術の心得など皆無の俺には近づいてくる槍の先が俺を刺し貫こうとしているようにしか見えなかつた。

結果、思わず後ずさりして躊躇って、無様にすつ転んで尻餅を突いてしまひ。

「何だ貴様、この程度で尻込みか？ハツ、これはとんだ臆病者だ。なあ？皆？」

一人の兵士がそんな俺を見て小馬鹿にして嘲笑う。周りの兵士達もつられて晒い出す。

さて、俺はその程度全然構わないが、しかし俺が嘲笑のためにされると怒ってしまう人が俺の隣になる。
そう、フィーだ。

「ケントを馬鹿にしましたね。許しません…」
「な、何だ貴様！」

ドックと怒氣を剥き出しにして、フイーは兵士を睨む。
それに気付いた兵士がややたじろぎながらも、いかにも詰氣を強め
てフイーを威圧せんと言葉をぶつかる。

「ケントは臆病者なんかじゃないんです！ 何も知らないのに
！ ケントに謝つてください！」

あれ……なんだかデジヤウを感じるよ……

「そんな虫けらこも見るよつた男を庇つかのか？ ハッハッハ！
こいつあ傑作だ。虫は虫らしく醜い地の底から光だけ羨ましがって
いれば良いんだよ。」

まああんまりな言い方ではあると悪づけど、それぐらこじやあ俺
の心には響かない。

虫けらなんて言われ慣れてるぜ。

それよりも……

「うう……」

今にもブチギレで言霊をぶつ放しそうなフイーに、そ注意しない
とな……

「スウ……」

とか考えていたそばから、フイーは言霊を使ひべく息を吸い込み

始めた。

兵士たちはそれを怪訝な表情で見守っている。

やばっ……

「衝撃をあごムグッ！？」

「はい、すいませんでした！すぐに去りますーー。」

咄嗟に俺は左手でフィニーの口を塞ぐと、右手でフィニーの体を抱きかかえ、兵士たちが何かを言おうとするのも聞かず、回れ右して一日散に駆け出した。

中途、何やら柔らかな感触が俺の掌から伝わって来たけど、必死だつた俺にはそれを楽しむ余裕は無かった。

「騒ぎを起しちゃ駄目ーーー。」

冷静沈着で頭脳明晰な俺だけど、この時ばかりは流石にちょっと

声を荒げた。

え？冷静沈着で頭脳明晰ってどの口が言つのかつて？良いんだよ。日本には発言の自由という物が……とか、考へてるから俺は駄目人間なのかな。

「すいません。つい、頭に血が上つてしまつて……」

正直に言えば、つてか正直に言つまでもなく、フィニーが俺の為に怒ってくれる事は嬉しい。文句無く嬉しい。嬉しいの最上級。嬉しいです。

でも、あそこで貴族街の入り口守つてゐる番兵さんをぶちのめしちゃつたら、流石にこのランクルートにはいられなくなるだろ？

まあ、既に一人貴族をぶちのめしてゐるわけだけど、まああはれは合意の上での決闘だしノーカンね。

「分かってくれたらいいんだ。それにさ、俺は罵倒される事なんて慣れてるしさ、いちいち俺の為に怒つてくれなくても良いんだぜ？ そんなことしてたらフィー、疲れ切つだろ？」

俺が罵倒されてフィーが傷付くなんて、そんなことあつちやいけない。

「そんなことあつません！」

しかしフィーは、きつぱりと俺の言葉を否定した。

「そつか。優しいなフィーは。」

「そんな……私なんて全然……ケントの方が……凄く優しいじゃないですか……」

最後の方はボソボソとした小声だったので聞き取れなかつた。

「ん？ なんて言つた？」

「な、なんでもありません！」

と、そう言つてフィーはそっぽを向いてしまつ。

心なしか頬が赤い。

あ一分かつた。

分かる分かる。

人に聞かれると恥ずかしい独り言を言つたりやう事つてあるよねー特に、愛と勇氣すら友達になつてくれない俺にとつては話相手が空氣つてこともままあつたし、そういう時つて人に聞かれたくないよね。

つてことはだ、これ以上の詮索はすべきじゃないつてことだな。

「ま、良いや。貴族街は駄目つぱいけど。もう少しランクルート見学しようぜ。」

そう軽くフイーに話しかける。

「はー。」

フイーは笑顔で頷いた。

三十一章 “テートかー？これはテートなのか！？”（後書き）

すいません更新が滞つております^ ^ ;

大学の春休みは無駄に長いのに、なぜこいつが長いのか……

補講補講補講……いずれ歩行も入る勢いです(え

でも頑張ります！

こんな作者ですが、皆さん応援よろしくお願ひします。

応援のメッセージなど送つていただけると、なんと更新のペースが三倍になるー……と良いなと思います。

三十一章 “街の中”……肉一?”

腹減つた。

「じつじょひ、空腹を通り越して田畠がしていくへりこ腹が減つて來たよ。

よく考えたら、ここから世界に来てまともな食事なんてほとんどしてない。

鹿鍋は美味しかったけど、量としてはやっぱり不満が残るし、いきなりの騒ぎのせいで晚餐会ではなくて食べれていな。

昨日寝る前に空腹を感じなかつたのは奇跡だ。

「お腹が空いたよ。」

「やつですね。私も軽く何かを食べたい気分です。」

フィーは機嫌も治つたらしく、今はランクルートの街中の商店街にあちこち日を光らせていく。

「早く何かを食べないと……お腹と背中がくつ付いくべや。」

幼い頃に聞いた童謡の一つフレーズを口ずさんでみる……懐かしい。しかし、じつして元の世界の事を思い出すなんて……俺は帰りたいのだらうか?……いや、それはないな。

「お腹と背中がくつ付いたら大変ですね。急いで何かを食べまじょひー。」

やや切羽詰まつた口調でそうフィーが言つので、言葉の綾である

事を伝えるべく急いでフイーを見たら、その表情は笑っていた。

「お腹と背中がくつ付くですか。面白い表現ですね。」

流石のフイーもそこを本氣にするほど天然さんではない様だった。

「おや? 良い匂いが……」

その時、肉の焼ける芳しい香りが俺の鼻腔を掠め、その匂いに同時にフイーも気付いた。

その香りは馬車の行き来する大通りを越えた先から匂つて来ているようだ。

「これは行ってみるしかないな。
「では行きましょうかケント。」

俺とフイーは並んでその匂いの下へ向かい歩いた。

突然だが、ケバブという食べ物を知っているだろ? 俺は知らない。

聞く所によると、ブラジル辺りの食べ物で、街頭で串に刺さった大きな肉の塊を堂々と焼き、それを細かくスライスして客に分け与えるという、なんとも垂涎な食べ物のことだ。

「う・ま・そ――! ?」

その光景は思わず我を忘れるほどに衝撃だった。

なんと、人間の三倍は軽くあらうかという巨大な肉が、道のど真

ん中でキャンプファイヤーのよつた大きな炎の上で吊るされて焼かれているではないか。

しかも肉はジュー・ジューと小気味よい音を立てて焼き上がっているし、もうその光景は垂涎なんて言葉じゃあとても表せそうにない。つていう様子。

その光景に見蕩れているのは俺達だけではなく、他のランクルートの人々も「何だ何だ」とその巨大な肉に集まつて来ている。みすぼらしい格好をした人も幾人か見られ、貧民街の方からも集まつている様子。

どうやらこれはランクルートでは当然の日常風景というわけではなさそうだ。

- グ～ギュルギュルギュル -

思いっきり俺の腹の虫が鳴った……

「クス。」

「 フイーに笑われた！？……可愛い。」

「お腹が空きましたね。私もあれを見たらお腹が鳴つてしまいそうですよ。」

ふいにフイーがあ腹を鳴らし、恥ずかしそうに俯く姿を想像した。やばい……可愛過ぎてクラリとくる。

- グウ …… -

その時、フイーのお腹が控え目に鳴つた。

「お...」

俯くフイニ。

可愛えええええ！？！？？？

まさに俺の妄想……もとい想像通りのその仕草に思わず取り乱してしまったぜ。

「… も置けました？」

俺は嘘をついた

「…………聞こえた?」なんて聞いたなら何の事がモロハレたってことくらい、駄目人間な俺だつて分かるよ。

さて、フィーの可愛らしさに悶えるのも良いが、いい加減この上手そうに焼ける肉を前にして食えないなんて言つ生殺しの状況を何とかしたい。

冷静に考えよ。」

周りに集まっている野次馬の物珍しそうな表情から察するに、これはランクルートでの当たり前な日常風景ではない。となれば、何かしらのイベントだという発想が一般的だと思うが、その割には祭り特有の雰囲気は無い。

「以上の推察から求められる答えは……」

分からん。

「多分ですけど、あの人ではないですか？」

フィーが指差す方向を見る。

周りの野次馬とは明らかに雰囲気の違つ男が一人、肉の傍らに座っていた。

一見して旅人だと断定。

なんといっても服が襤褸い。

継接ぎだらけの外套を羽織り、脂っこくてぐしゃぐしゃの髪と伸びきつた無精髭を蓄えたやや汚らしいその姿は、旅人と表現するにぴつたりである。でなきや山賊だ。

時折肉の焼け具合をチェックする為か、少し肉を削ぎ落として口に入れている様子からもフィーの推測は間違いないと思われる。やや表情を幸せそうに緩めて頷いている様子を見ると、あの肉は相当上手いのか……って、これは今関係ないな。

「どいたどいた！道を開ける！」

と、ここで見知った顔登場。

人垣が割れ、そこから五、六人ほどの甲冑を着込んだ騎士達が現れる。

青系の装飾の施された鎧を着ているその人物は、言つまでもない、シュレンだった。

「往来で堂々と肉を焼き、その為に交通の妨げになつてゐるとの苦情が殺到ため参上した。早急に撤収せよ。さもなくば、実力行使により強引に撤去せねばならなくなる。」

シュレンが旅人らしき男に向けて口上を述べる。

まあ確かに、広場でもないこんな場所で肉を焼けば迷惑だよな。実際、シュレンの言葉を聞いて気付いたけど、馬車なんかがあの肉のせいで通行できず、渋滞になつてている事が分かる。

「んあ？誰だお前えさん。」

男は潰れたような嗄れ声でシュレンに名を問しながら、のつそりとした仕草で顔をシュレンの方へ向ける。

「私は帝国騎士団シュレン隊隊長シュレン＝クル＝ルグタンスである。」

と、其の名乗りを聞くと旅人の男は露骨に深い溜息を吐いた。

「全く……この国の人間はどこへ行つても心が狭いの……食事くらいゆつくりさせい。」

なんとも横暴な物言いだった。

俺みたいな駄目人間でもここまで自分勝手な事は言わないだろ？

「ならば向こいつの広場でも使えばよからう。わざわざこの場所で焼く必要などないはずだ。」

お～シュレンらしからぬ当然の指摘……って、それは流石にシュレンを馬鹿にし過ぎかな。

「ここの場所の日当たりが最高だつたんじや。」

沈黙。

「はあ！？」

シュレンの素つ頓狂な声が木魂した。

三十三章 “旅人の話術”

日当たりが良いとな……？

それって肉を焼くのに何か関係があるんだろうか？
もしかして、この世界の肉は特別製で焼くのに日当たりが関係しているのか！？

そういうえば元の世界にいた時に聞いた事があるぞ……超一流の料理人はその日の天気に合わせて料理の作り方をえるとか何とか……

「おい、日当たり方で肉の焼け具合が変わるものか？」

やや不安になつたのか、シュレンがボソボソとした声で部下に向うに何やら訊いている。

「さあ……自分は料理には疎いもので……しかし、向うの広場とこの場所でそう日当たりに違があるとは思えませんが……」

良く分からないうしい。

「フィーは知ってる？」

フィーに訊いてみた。

「どうでしょう？私にも分かりません。」

フィーも分からないうしい。
どうじうこと……って……

「あつ！？」

思わず素つ頓狂な声を洩らしたのは俺だけではない筈だ。

なんと、旅人が良い具合に焼けていた肉をそのまま担いで、物凄い速度で逃走し始めた。その速さたるや、旅人の意味深な発言を深く考えていた俺達には誰一人追いかける事が出来なかつたほどだ。

「に、逃げた？まさか先程の発言は……」

「混乱させて逃げる隙を作る為の口から出任せ……でしょう
ね。」

そんなもんに引っかかるなんて騎士団は馬鹿だなあ、と一概には言えない。

なんせ、その場にいた野次馬も含めて全員があの旅人らしき男の口車に見事に乗せられていたのだから。

普通なら「何を訳の分からん事を」で切り捨てられるような発言。だといふのに、「まさか本当に何か意味が？」と考えさせられてしまふ様な力が、あの男の言葉にはあつた。

だから、階して「田当たり？」と考え込んでしまつたわけだが……

「それにしたつて『この場所の田当たりが最高だつたんじや』
はないよなあ？ フイーもそう思うだろ？」

「あ、アハハ……そ、そつですね。」

ちょっと笑い方が引きつっていた。

まんまと引っ掛けた事が悔しいのだろうか。

「それより……肉は置いて行つて欲しかつたよ……」

両膝を地面に突いてガックリと頃垂れる。

あんな上手そうな物を背中にぶら下げて遁走……これはもつ許されないな。

さあ騎士団の皆さん！

頑張つてあの旅人……いや、山賊男を捕まえて罰しちゃつてくれさい！

そして肉は俺に……

「あれ？ シュレン、追いかけないの？」

「おやケント。いたのか？」

シュレンは俺達に気付いていなかつたらしい。

「もともと私達の目的は彼をこの場から立ち退かせる事でしたので。」

自分から荷物も担いで逃げ得出した以上、追いかける理由もない。とシュレンは語つた。

「斧が屋根から飛んでったよ……オーノー……ヤーネー……」

ショックのあまり口からつまらない洒落が飛び出した。

日本人にしか通じない……

「あの、ケント？ 大丈夫ですか？」

再び頃垂れた俺を見てフイーが心配そうに声を掛けてくれた。

優しく俺の肩に置かれたフイーの掌から伝わる柔らかい温度が俺の

心を癒してくれる。

「大丈夫だよ。ただ本格的にお腹と背中がくつ付いちやうかなーってだけで。」

「アハハ。心配しなくてもお腹と背中はくつ付きませんよ。」

フイーが朗らかに笑って穏やかなツツコミを入れてくれた。うん、これもツツコミの一種だよね？

「撤収するぞ！各人、軽く昼食を摂った後、再びランクルート城門前の広場に集合！」

フイーとやり取りをしている間にシュレンは部下達にそんな指示を出していた。部下達は「ハツ！」と短く返事をすると、さびしきびとした仕草で散つて行つた。

まあ、『軽く昼食』の部分に俺が反応したのは言つまでもない。

「この後も何かあるのですか？」

その指示に何か思う所があつたのかフイーがシュレンにそう訊いた。

「もともと、午後から遠出する任務がありましてね。苦情のあつた通行妨害の処理はついでだつたのですよ。」

まあそもそもなきゃあ、帝国騎士団の中で三番目に強いらしいシリエン隊がこんな苦情処理に駆り出されたりはしないだろう。どんな人員不足やねん、と一応心の中では思つておぐ。

「それで、今から私の昼食にするが、ケントもフューリーも一緒にどうかな？勿論、支払いは私に任せて欲しい。」

そのショレンの言葉に俺とフューリーは顔を見合わせ……

「行く！」　「行きます！」

即答したのだつた。

三十三章 “旅人の話術”（後書き）

友人に言されました。

「ケントってさ、別に言つほど馬鹿じやなくね？割と色々なこと知つてるしさ、思慮も微妙に深いし。」と。

僕は言い返します。

「そだろ？ 実はそなんだよ。ケントって実は馬鹿じゃないの。

なんせモデルになつてるのは僕だから。」と。

友人はさらに言い返してきました。

「あー、そりゃ文句無く究極にして極限の馬鹿だったわ。ごめんなケント君。」と。

どういう意味なんでしょうね？（え

三十四章 “旅人の罠”

やつとなのか……やつと、この世界に来て初のまともな食事が摂れるのか！？

考えてみれば騎士昇華訓練の時の焼きそばみたいな何かも美味しかったような気がしないでもないけれど、やつぱりこうして食事としてちゃんと食うのは大切な事だよね、うん。

「あれ？ 良い匂いが……」

ふいにタンパク質の焦げる独特の芳ばしい香りが俺の鼻腔を撲つた。

これは……まさか……

「む？」

自分の体よりも遙かに大きいその肉に下品なかぶり付き方をしているやや小汚い男がこちらを振り返った。

「あ、ーー！」

と思わず叫んでしまった俺をどうか許して欲しい。

「誰じや貴様。ワシは見てのとおり忙しい。食事の邪魔をするでない。」

そう、例の山賊風の旅人男だ。いや逆かな……肉にかぶりついているその様子は、どちらかといつと旅人風の山賊男だ。

ところで、俺はここで初めて近くでその男の風貌を見た。

近くで見ると、顔には歴戦の勇士でさえもこつは成らないだらうと言つほどの無数の傷跡が縦横無尽に走り、もはや整形手術でも元の顔を取り戻す事は出来ないほどに歪んでしまつていて。

継接ぎだらけのボロボロの衣服の隙間から見える体には袈裟切りに巨大な傷跡が走っている。それも未だ血が滲んでいる様子からみて、新しい傷跡であるようにも見える。

だけどまあ、空腹もそろそろ限界に達し気味な俺にはそんな男の事情など知った事ではないわけで……

「よし奴だ！ シュレン、捕まえろ！」

そう頭で思つ言葉をそのまま叫んだ。

「いやケント、気持は分からんでも無いが、この場では私に彼を捕縛する権限は無いのだが……」

場所はシュレンが近道だと言つて通つた広場。そんな場所でこの男は肉を食つているのだ。

周りには先程肉を焼いていた時のように何事かと人も集まっている。まあ今回は変な人がいると言つだけで先程の様に迷惑を掛けているわけじゃないから逮捕とかはできないのだろう。と、理性で納得は出来ても、空腹により極限まで苛立つている感情では理解できない。

腹減りと酔つ払いに理屈は通じないので。

「ええい！ その肉を俺にも食わせりつ……！」

結局のところ、文句無い解決策としてあるのはそれである。何も問題がない。

俺の怒りは収まるし、空腹は満たされるしで悪い所がない。

「なんじゃ、そんなことか。ええぞ小僧。貴様も食え。」

「そう言つと思つたぜ。だが何度も断られようとも、俺は何としても、例え力尽くでもゴリ押しでも反則技を使おうとも、全身全靈を掛けその肉を食べさせていただけるのですか？」「…」

肉ではなく一杯喰わされた感じだ……上手い事は言えていないが。

「そんなでかい声出さんでもくれてやるわい。ほれ、後ろの騎士と小娘も欲しいじゃろ？食え。」

そう言つて男はわざわざ食べやすいよつてでかい肉を一部切り分けて、俺とフイー、それとショレンに押し付けて来た。

「い、いいの？」

「なんじゃいらんのか？」

「頂きます！」

俺は徐に肉に齧り付いた。

マジで美味しい。滴る肉汁が口の中で弾け、柔らかいその肉質は舌の上で蕩けるようだ。

これといった味付けは施されていないのに、ほんのりと感じる甘さは肉そのものの素材の味なのか。

ああ……ご飯が欲しいなあ。せめてパンか……兎に角炭水化物が欲しいよー

と、俺は遠慮なくお肉と頂いたわけだが、シユレンとフイーは若干戸惑った表情で渡された肉と男を交互に見比べている。

「ほれ、食え。何を遠慮しとる。食わんか。」

「いえ、名も知らぬ方に御馳走になるわけには……」

そこには眞面目なシユレンの「」ことだ。せつぱりと、とは言えないが断つた。

「トールじゃ。」

「え？」

「トール＝テン＝ハリエニー＝ラジや。ほれ、これで名も知らぬ他人ではあるまい。顔見知りじや。食えるじやろ？。」

良い人だ！？

「む……」

しかしあ、そこで固まるシユレンはアホだ。

「私は……その……頂きますね。」

フイーは俺が美味そうに食べてこるのを見たが、空腹に耐えかねてか、おずおずとそう囁くように言つて肉に口を付けた。

「……お、美味しい。」

驚いたように口元に手をやつて、やや頬を赤らめながら感想を口にした。

「そんなにか！？……オホン。私も頂こう。」

結局、シュレンも肉の誘惑に勝てず、躊躇いがちながらも肉を齧つた。

「クク……全員食つたな？」

その瞬間、トールは表情をニヤリと不敵に歪めた。

「 「 「え？」」」

そんな素つ頓狂な声を俺達三人は同時に洩らしたのだった。

三十五章 “突撃獣”

象の様に巨大で、チーターの様にしなやかで、亀の甲羅のように頑丈な体を持つ獣。

名を『エイングンバー』、通称『突撃獣』だそうだ。

「あのヤロー……」

「あ、アハハ。仕方ないんじゃですか？あんなに美味しいお肉を御馳走になつてしまつたのですし。」

エイングンバーの額には一本の立派な角が生えており、その尖った先端は先程巨大な岩に綺麗な円形の穴を開けた所だ。頑丈で、尖銳で、そして格好良い。つて最後のは関係ないな。

エイングンバーはその通り名の示す通り、額の角をこちらに向けて突進してくる以外の行動をしない。

故に動体視力という特殊技能を持つ上に身体能力的にはそれなりに優れている駄目人間である俺を始めとして、フィニだつて突進自体の回避はそれほど苦ではない。

かと云つて、それが現状を楽にする理由にはならないのだが。

「来るっ！」

俺がそう言つと同時に、やつと背から角を引き抜いたエイングンバーが再びこちらに照準を合わせ、突進するべく地面を足で搔き始める。

「はい。」

それに対しても、俺達はすぐさまサイドステップで避けるべくやや腰を落として構える。

そんな俺達の準備を知つてか知らずか、エイングンバーは構わず突進を開始する。当然、俺にもフィーにも当たらない。

「で、どうしようか？」

「どうしよう？」

フィーも困つてゐる感じ。

「依頼内容は捕獲……でしたら……」

フィーの無敵の言霊の出番である。

「拘束」

フィーがエイングンバーを指差してそう言つと同時に、地面から伸びる無数のロープが振り向きざまのエイングンバーの体に絡みついた。

雁字搦めになつたエイングンバーの動きは封じられる。

しかし……

「で、どうしようか？」

同じ問い合わせ。

「どうしましょうか？」

フイーの反応も同じく困りて頭を傾げた。

暴れるのである。

「のままじゃあ持ち運べない。

いや、そもそも象に様に巨大な生き物である。

とても俺とフイーだけで運べる重さではないだらう。

「まずは……」ひしまじょひ。 困倒

捕獲され、なんとか抜け出せうと暴れているエイングンバーを再度指差してフイーはそう呟く。エイングンバーは一瞬でフラッと倒れて氣絶した。

相変わらず、えげつない能力である。

「で、どうじよっか?」

再びの同じ問い。

「どうしましよう?」

やつぱりフイーの反応も変わらない。

「浮け」

浮いた。エイングンバーの巨体が羽のようにフワリと浮いた。

「これで運べますね。」

魔靈の便利さは異常である。

そもそも何故こんな事になつたのか説明しなければなるまい。

「クク……全員食つたな？」

「「「え？」」」

三人揃つてアホみたいな声を洩らしたこの時のことである。

「何、そんな不安そうな声を出す事は無い。別に取つて食おうとこうわけじゃないからのっ。」

ちゅうと[妙]心。

「依頼じゅよ。もともとこの騎士団の方へ依頼するつもりじゃったが、この国の騎士団は心が狭いからのう。」

自分の所属する騎士団が悪く言われたのが悔しいのか、シュレンはやや唇を引き結んだ。

「実はその肉、ワシが先程西の平原で仕留めて来た『フーガ』といふ獣の肉での。」

「フーガ！？」

フーガといふらしい獣の名前にシュレンが過剰に反応した。見れば、フィーも若干ながら驚いた表情をしている。

「知つともうづじやの。」

いや知りませんが。

「知つての通り、大柄の癖に臆病で『逃亡獣』と呼ばれるくらい逃げ足の速い獸じや。それ故、なかなか仕留める事も出来ず、市場にも殆ど出回つておらん。何が言いたいか分かるじやろう?」

分からぬ俺は駄目人間ですか?はいそうですね。その通りです。

「ほんの一欠片でもなかなか口に出来ない高級品。食べた分は働いて返せ、と。」

「小娘の方はまあまあ頭も回るようじやの。もっとも、こんなことも分からぬようでは人間をやめた方が良いかもしけんがのう。」

人間までやめちやつたら俺はもうただの駄目じやないか!?
あ、シユレン落ち込んでる。やつぱりお前も俺と同類なんだなあ。
ちょっと嬉しい。

「そういうわけで依頼じや。ここから東の方へ20キリほど
行くと、エインゲンバーの巣がある。言いたい事は分かるな?」

そりゃあ俺だって分かるわ。

エインゲンバーなる生き物を見物したいからそこまで護衛しろって
ことだろ?

「食べたいから捕獲して來い、ですね?」

「その通りじゃ。」

違つた。

「騎士の小僧も頭は悪そりじゃったが、流石にそれくらいは分かるか。もつとも、分からぬ方がどうかしとるがの。」

俺はどうかしているらしい。まあ、今更か……泣かないぞ！

「やつと分かりましたよ。トール＝テン＝ハリヒー＝ラ……世界を渡り歩く美食家で、人の思考を縛る話術の使い手……」「ホツホツホ。ワシも有名になつたもんじやの。」

なんか、それだけ聞くと、物凄く悪い奴っぽいよな。

「それで、ワシの依頼、受けるじやろ？」

まあそんなわけで、こんなわけである。

ちなみにショレンは「午後は別の依頼で遠出しなければならないんだ。本当に申し訳ないが、この件は任せる」とか言つて、騎士達の集合場所であるランクルート城の方へ行つてしまつた。

最初は逃げたかと思ったけど、本当に申し訳なさそうなその表情を見て、仕方なく認めた。

「さて、帰りましょうか？」
「そうだな。」

駄目人間、もとい駄目と美女が並んで歩き、その後ろに氣絶した象の様な巨体の獣がフワフワと浮いて付いてくる、という奇妙な構

図がそゝにあつた。

三十六章 “幼生エイングンバー”

何も問題は無かった。

フイニーの言靈の最強っぷりは良く知っているし、怪我もせず、依頼も最速タイムでこなされたと言つても過言ではないだひつ。そう……本当に問題は無い。

それでも問題があるとすれば……

「可愛」「……」

ちよっとフイニーが壊れたことかな。

まあ失念していたわけだが、ここはエイングンバーの巣付近。この辺りを探索した所、運良く即座にエイングンバーと遭遇した為に忘れていた。

巣である以上、ここには……

「囮まれてるなあ。」

十数匹のエイングンバーの子供に。まあ構わないんだけどさ。

エイングンバーの成獣からは想像も出来ないほど幼生のエイングンバーの可愛らしさは異常だった。

小さくて滑らかな体、クリクリとした何かを訴えたそうな眼、そして申し訳程度に額にあるタンコブの様な角。

可愛い……思わず撫でたくなる子猫のような愛くるしさと、小突きたくなる様な生意気さを兼ね備えた最強の愛玩動物がそこにいた。

彼等は、恐らくは自分たちの親が捕獲されているところに、何

も分かつてない様な無垢な瞳で俺とフイーを見上げている。憎むどころか、むしろ懐いて来そうな勢いだ。

「ケント、これは撫でても良いんでしょうか？」

構わないと思つけど、現在進行形で彼らの親を捕獲しているフイーの言葉ではないと思つ。
普段の優しいフイーなら、親を捕獲しているなんて、それだけで罪悪感に苛まれてしまうだろうに……

可愛い物を見るとフイーは若干壊れる……覚えておいつ。

「やめておいた方が良いじゃろ。」

ふと背後から声がした。

「幼生のエインゲンバーの角には強力な毒がある。彼等は彼等の親を攻撃した者に懷くフリをして近づき、その角に含まれる毒で襲撃者を殺そうとする。子が親を守る珍しい習性のある生き物なんじやよ。」

驚いて振り返れば、エインゲンバーの子供たちの輪の外にトールが立っていた。

「しかし驚いたのう。一人だけではエインゲンバーは厳しかろ」と思つてこうして援助に来てみれば、依頼のエインゲンバーは既に捕獲され、だというのにお主ら一人は生命の危機に瀕してあるとは……なかなかないぞ。こんな状況。」

え！？俺達今死にそうなの！？

「はつーあ……」

そこでフイーは自分が彼等の親を捕獲している事に今更ながら気づいたらしい。

途端、表情が一気に沈み込む。

いけない……このままではフイーが傷付いてしまう。

「私……は……」

「……今にも泣き出しそうだ。

でも、仕方のない事だとも思つ。

多少脅迫氣味だつたとはいえ、エインゲンバーの捕獲の依頼を受けたのは俺達である。

その捕獲対象に子供がいたからと云つて、それだけで罪悪感を感じるなんて、少し自分に甘えが過ぎるような気もある。

生きて行く上で俺達は何かを食べる。

野菜も食べる。魚も食べる。肉だつて食べる。

何かを食べると云つ事は、食べられた何らかの生物の命を犠牲にしているという事で、自分では殺さなければ、人が殺した物は平気だなんて、そんなことは甘えだと駄目人間な俺でも流石に分かる。

しかしまあ、それはそれ。

今俺の目の前で女の子が傷付いている。

俺にとつてはそれだけが重要で、それ以外に大事な物なんてない。

俺が今すべきことは「気にするな。フイーは悪くない。」とフイー

一を慰める事。

慰めないといけない。可愛いフィーに泣いて欲しくないから。

「や」「……」

「甘えるな小娘！」

俺の言葉はトールに被せられた。

「え？」

フィーは困惑した表情でトールの方を振り返る。

「貴様とて肉を食つだらう？その肉はどこからやつて来た？ランクルートの町で貴様が食つた肉は何の肉だとワシは言った？」

あ、それ俺も思った。

「ルヴィス帝国は生態系を崩さぬため、法で幼生の獣を狩猟する事を禁じている。つまり、この国の中で肉を食つ時、その肉は必ず成獣の物であるのだ！食う事と殺す事が違う事などと、子供の様な事は言わぬであろうな？」

捕獲する。その生物のその先の人生……つていうか獣生を奪う。それでもフィーは自分が殺すわけじゃないから平氣だと言うのだろうか。

カレイプスを消した時、あれほど涙を流したフィーが、自分が殺さないと呟つだけで平氣な顔をして笑えるのだろうか？

そんなはずはない。

あの優しいフィーが生物を無為に捕獲するなんて平氣で出来る筈が

無い。

だったら、どうしてフイーはエイングンバーに対しても靈を使つ事が出来たのか……

「ち、違います！私は、ただ……」

フイーにはフイーで何か思う所があるらしい。

それはもしかしたら人間至上主義のエゴの塊なのかも知れないし、ひょっとしてカレイプスくらい大きくないとフイーにとつては生物として認識できないのかも知れない。

どんな思想の持ち主だったとしても、俺はフイーの考えを尊重するし、それによって俺がフイーを嫌うなんてありえない。俺にとって、俺の目の前で女の子が傷付かない事だけが重要なのがから。

「まあ良いじやろ。その論議は後にしよう。それより、今はこの状況を何とかする事を考えんとのう。」

気付けば、つぶらな瞳をしたエイングンバーの子供はジリジリと俺達への間合いを詰め、その円陣を狭めてゆく。何も知らずに見れば抱き締めたくなるほどの可愛らしさだが、先のトルの話を聞いてからだと、こいつらは凶悪な獣にしか見えない。いや、実際に凶悪な獣なのだろう。

親を攻撃した者を子が殺す。

それはつまり、幼生の方が成獣よりも強いという事で……

「幼生のエイングンバーの突進の速度は親以上じや。お主ら、死ぬぞ。」

と、そのトールの言葉が早いか、一気に表情を凶悪に変えた幼生のエイングンバーがロケットのような勢いで一斉に俺達に向かって飛び掛かって来た。

三十七章 “後唱法”

「フィーー！」
「え？ キヤツー！？」

俺はフィーの腕を掴むと、自分の全体重を掛けて地面に引き摺り倒した。幼生エインゲンバーの角の軌道が全てフィーを狙っている事が分かつたから。

地面に倒れたフィーの、もともと腰があつた辺りを幼生エインゲンバーは通り抜けて行つた。

「ほひ。やるもんじや。あの速度を見切るとは……小僧、良い田を持つておるな。」

そんなトールの声が聞こえたが、そんな場合ではないので無視した。

それに、一度避けただけだ。
また来る……！！

狙いは……またフィーか！？

「あ……っ！」

フィーは俺が地面に引き摺り倒してしまつたせいで身動きが取れない。

俺も体勢を崩してしまつて、フィーの身代わりに幼生エインゲンバーの突進を受け止める事もできない。

一瞬、幼生エイングンバーの突進がフイニに突き刺さる悪夢のような光景が脳裡を過る。

最悪だ……最悪の極み……俺が俺の田の前で女の子が傷付くのを救えないなんて……

ドスッと鈍い音が俺の隣から聞こえたような気がした。俺は思わずその方向から田を逸らす。見ていられなかつた。最悪の光景がそこにある気がして……

「仕方ないのう。小僧、貸しじやぞ。」

そんなあてつけがましいトールの言葉。しかし結果として誰も傷ついていない。俺もフイニも。

何が……起こったんだ？

「やれやれ、依頼が高くついたわい。これなら一人で狩つた方がマシだったかのう。」

恐る恐る声の方向を見る。

「受け……止めて……！？」

そう思つたが違う。

地面上へたり込んでいたるフイニに向かつていた幼生エイングンバー達が全て固まっていた。まるで石にでもなつてしまつたかの如く、力チコチなまでにその場に硬直していた。

魔よ【】

「【襲撃者の動きを止めよ】【停止を求める時空の理】【悪

そしてトールの詠唱……教えてもらつたばかりだが、三段法である事が分かる……つて、うん?順番が逆じやないか?

「まさか、こんなところで秘法中の秘法を使つてしまつとは折角、秘匿としていたのにのう……小僧、この貸しは高く付くぞー!」

と、やや不機嫌な様子で俺の方をトールは向いた。

そう言ひけど、俺には何の事だか分からぬ。

「な、何をキョトンとしておる……?まさか貴様、今何が起
こつたのか理解しておらぬのか?」

大正解。

「詠唱を行わずに術を発動し、後の詠唱で威力を補完する永
続系魔術最高の秘術『後唱法』!秘法中の秘法じやぞ!?ワシが人
生を賭けて開発した詠唱法じやぞ!驚くなり感動するなりないのか
!?」

そう言われても……

「大体、魔術師ならば卒倒したとしてもおかしくないほどに
革新的な詠唱法なのだぞ!?」

「いや、だつて俺さ、魔術師じやないし。」

何を勘違いしているんだ？……

「なんじゃとお……………？？」

凄い取り乱し様だつた。それはもう、思考を縛る話術の使い手といつ格好良い称号が台無しなくらいのレベルで取り乱していた。

「フイー、立てる？」

「あ、はい。大丈夫です。すいません。」

それを無視して俺は俺が地面に引き摺り倒したフイーに手を差し出す。躊躇い無くその手を取つてくれた事が嬉しかつた。

「小僧！ではお主、魔術についての知識は……」

「『三段法』とか、伝説上には『一語法』とかいう詠唱法があるって程度なら。」

それでもトールは切羽詰まつた様子で俺に問い合わせてくるから、俺はフイーを引っ張り起こしながら適当に答える。

「で、では、ワシは何も分かつていない小僧に何十年も秘匿とし続けて来た極意をペラペラと喋つてしまつたと言つのか！？」

「まあ、そういうこと……かな？」

思いつきり頭を抱えてトールはその場に蹲つた。と思いまや元気良く立ち上がり俺の胸倉を掴んで顔を寄せてきた。

「小僧、ワシが貴様らを助けた借りの事は無かつた事にしてやる。だから、この事は一切の他言は無用じゃ！分かったな！？もしも、この『後唱法』がルヴィス帝国内で広がつたりしたのを確認

したら、貴様の一族郎党皆殺しにしてやるからなつ……！」

もし首を横に振つたりしたらこの場で首を刎ねられる勢いである。むしろ、問答無用で口封じをしてこないだけマシだと思えるほどに凄まじい剣幕だ……そして俺は命が惜しい。

「り、了解つす。誓つて俺は誰にもこの事は言ひません。フイーも、良いよな？」

「ええ。分かりました。」

聞き分けの良い子つて素敵だよね。

それにしてもトールって……意外と癪癩持ちなのかな？取り乱し方がちょっと子供っぽいぜ。

こんな駄目人間にそんなこと言われたら人生おしまいだな。

「フウ……長い間生きて來たが、こんな無様を曝したのは初めてじや。」

どこか諦めた様にトールはそんな事を呟いた。そうは言つても、俺もフイーも何もしてないんだけどねえ……

「小僧、お主魔術師ではないのか？」

「違うけど？」

「小娘は？」

「違います。私は魔術師ではないです。」

フイーは魔術師ではないよね。そんなもの遙かに超越した存在ですよ。

魔術師つてか、魔法使い……いや、もう神様とかそういうのの部類

だと思ひ。

まあ、神様つて言ひとて自称『神』のあの謎の声なんだけど……

「では、どのようにしてエインゲンバーの捕獲を？正直、体術のみでの捕獲は至難の業だと思ひのじやが……」

そりやもう言霊の力という一矢に免かれる。これ以外に無し……あつたらむしろ怖い。

「それは、私がムグツ！？」

フイーが正直に答へようとしたので掌で口を封じた。フイーの柔らかい唇の感触と、少し湿つた柔らかい吐息が俺の掌を擦る。

なんだろう……物凄い背徳感だ……

「俺の力ですよ。なんせ俺、勇者つて奴らしいですか！」

親指を立てて若干格好付けながら言つてみた。すぐ調子に乗る駄目人間の悪い癖です。

「ほほう。なるほどな。」

なんだか凄く悪い顔でトールは納得の声を洩らした。

三十八章 “トールの実力”

落ち着いた……落ち着いたけど落ち着かない。

それもそうだろう、未だ周囲には幼生のエインゲンバー達が突撃姿勢で固まっているのだから。

トールの『後唱法』といううらしい詠唱のルールを外して考えると、先程のトールが発動した魔術の詠唱は【悪魔よ】【停止を求める時空の理】【襲撃者の動きを止めよ】となるわけだ。

考えるに、発動された魔術は対象の時間を止める魔術……言靈ほどじゃないが、これはこれでチートじゃないか？まあ言靈だつたら止まれ の一言だけだ。

「まあ良いわ。とりあえず悪魔術を解除する。そこを退け。」

「どうやう『悪魔術』といいつらじい。

「解除したら……」

再び動き出す幼生のエインゲンバーを想像し、俺は慌ててフィニーの腕を掴んでその場から離れる。フィニーは驚いた様な声を出しながらも、俺と同じ想像に至ったのか、文句を言ふ事もなく俺について来た。

「ふん。」

トールはつまらなさそうに鼻を鳴らし、指をその場で振った。その瞬間、まるで弾丸のように幼生エインゲンバーが一点に集中して

突進を開始する。もし動かすにいたら、体に風穴が開いたんじゃないかな
いかと思えるほど威力で。

「逃げるのは至難の業じゃな。仕方ないのう。食うか。」

子供を食つちゃいけないんじやないの？

「緊急避難と、後で言い訳できるようにせんとの。」

トールはニヤリと笑つて見せた。

それで気付く。トールはこの状況が欲しかったのだと。
トールが食いたかったのは通常のエインゲンバーではなく、その子
供、幼生のエインゲンバーを食したかったのだ。

だが、ルヴィス帝国の法律で成獣以外を狩る事は禁止されている。
だから、殺さざるを得ない状況が必要だつたのか……

「お主ら、証人になるじやろ？異国の旅人なれど、國家の客
人となねばのう。」

「知つていたんですねか？」

なんと性格の悪い事だろ。

流石は思考を縛る話術の使い手だ。

「まさか、魔術に関して素人だとは思わなかつたがの。」

そこには苦虫を噛み潰す様な苦渋の表情で言つ。よほど悔しかつた
のだろう。

「さて、ゆつくり会話しておる時間は無いぞ。」

そのトールの言葉通り、のんびりしている時間など無い。突進を外した事を理解した幼生のエインゲンバー達が、クリクリした可愛らしい目でこちらを睨みながら、再び突進を開始しようとしているのだから。

「 フイーの氣持ちとか、悪魔術とか、トールの策略とか、エインゲンバーの肉の味とか、フイーはやつぱり可愛いな」とか、考えたい事は一杯あるのに……

考える事が多過ぎて、駄目人間の脳味噌はパンク寸前です。いくつか考える必要のない物もありそつだけど、気にしない気にしない。

「クク……幼生のエインゲンバー、どんな味がするんじやうなあ。楽しみじゃ。」

トールが薄汚いボロ布のような服の袖で口元を拭う。涎に土の色が混じつて余計に汚くなつた感がある。良い子には見せられない汚い大人の姿だろう。物理的な意味で。

ただ、生き物を殺すなんて、それもこんな（見た目だけは）可愛らしい子供を殺すなんて、フイーにとつて辛い事なのではないだろうか……

そう思つて俺はフイーを見る。フイーはいたつて普通の表情をしていた……あれ？

「フイー、平気なのか？」

人に害をなすカレイップスを消し去つた時でさえあれほど涙を流

したフィニーが、どうして幼い生き物を殺そうとしているトールを見て平氣でいられるのか……

考えたいけど、考えてられない。

十数匹の幼生エインゲンバーが一斉にトールに向かつて飛び掛かつた。

「ワハハハアー！！！」

トールは機嫌良さ気に笑うと、自身も幼生エインゲンバーの突進の中に自ら突っ込んで行き、そのまま背後まで駆け抜けた。

それは刹那の閃き。特技動体視力の駄目人間こと俺の目にさえ、閃光が糸状に走ったようにしか映らなかつた。

チン、とトールは武器など持つていないので、刀を鞘に戻す時のような音。次いだズザーという地面を抉る音は幼生のエインゲンバーが地面に着地した音だ。

「え？」

フィニーは何が起きたのか分かつていないので、不思議そうな声を出す。

バサツという音が遅れて聞こえ、幼生エインゲンバー達は一匹残さず首筋から真っ赤な鮮血を噴き出してその場に崩れ落ちた。

「さて、鮮度が命じや。早速食つとするかの。貴様らにも食わせてやるぞ。依頼達成の報酬じや。」

と、トールは良い笑顔でそう言つのだった。

色々と考えたい事があつた俺だつたが、この時だけは思わず生睡を「ゴクリ」と飲み込んでトールの言葉に頷いたのだった。

三十九章 “ フィーの気持ち ”

子供の様な輝かしい笑顔で焚火の準備を始めるトール。よほどHインゲンバーの肉を食すのが楽しみと見える。まあ、『人の思考を縛る話術の使い手』とかいう称号よりも前に『世界を渡り歩く美食家』なんて称号があるのだから、それなり以上に食べる事に関しては貪欲なのだろう。

そんな様子のトールを尻目に俺はフィーの様子を見る。相変わらず表情が曇つたりする様子は無い。むしろ、エインゲンバーの肉の味をどこか楽しみにしているかのような表情ですらある。

勿論のことながら俺はフィーが傷付かないのが一番なのだから、フィーが何とも思っていないのは大歓迎ではあるのだが、しかしどうにも俺の思い描くフィー像との食い違いが気になる。

折角だから訊いてみる事にした。

「 なあフィー。」
「 何ですか？ ケント。」

フィーは普通に俺に応える。

「 大丈夫なのか？」
「 大丈夫、とは？」
「 だつてさ…… その…… カレイブスの時とか。
「 ああ、そのことですか……」

少しだけ落ち込んだ表情を見せるフィー。

まだカレイップスを“消失”させたことはフイーの中に後悔として残つてゐるのだろうか……

少しだけフイーに思い出したくない事を思い出させてしまった事で、俺はさりげなく自分の太腿を全力で抓つて罰しておいた……痛い。

「氣を使つてくれているんですね。ありがとうございます。」

「え！？いや…………その…………／＼／＼」

しかし、直後に俺に向けられた不意打ちのスマイルで俺は思わず氣が動転する。頬も真っ赤に染まつた事だらう。慌ててそっぽを向いて隠す。

「カレイップスを、人が食べる事は出来ませんから…………」

「どうやら氣付かれなかつたようだ……が、しかし、どうこいつ」と？
駄目人間にも分かるように説明して欲しい。

「私だつてお肉は食べます…………命に感謝して…………食べます…………」

それは当たり前の事。俺みたいな駄目人間だつて、そこに実際に感謝の気持ちがあるかは兎も角、食事の前には「いただきます」の一言くらいは言ひ。

フイーほどに優しい人間ならば、食事の前に命をくれる動物植物に本当に心の底から感謝をするのかも知れない。

実際、フイーは晩餐会の時など、誰も気付いていなかつただろうけど、さりげなく黙祷を捧げてから料理に手をつけていたのだから。

「食べられて救われる事もありますよ。でないと、無為に殺された生き物の魂が浮かばれないじゃありませんか……」

類を一筋の涙が伝づ。その涙は何に対してなのか……

「元の世界で……私に食材を売ってくれない人がいました。だから、私は自分が食べる為に、家族が食べる為に、狩りをすることもあつたんです。食べる為、自分たちが生きる為……私は傲慢です。でも、殺された生物は食べられる事で救われるんだと、私は信じています。」

フィーにしては長い独白だった。

でも、お陰で分かった。言葉にするまでもないフィーの気持ち。俺みたいな駄目人間には、こうして説明して貰わなくては理解できなかつた崇高な考え。

カレイップスは食べられない。それが肉質的な問題か、それとも毒でもあるのか、それは分からぬが……食べられないカレイップスの魂が救われない。だから殺すのではなく“消失”させた。救われないかも知れないが、せめて安らかであれ、と。

でも、エインゲンバーは食べる事が出来る。命に感謝して食べる事で魂は救われる。それは、フィーにとって辛い事ではないのか……良かつた。

「お主ら何をしとる。火を起こすぞ。手伝えい。」

トールが俺達を呼んでいる。

「ああ、はいっスー」

フィーの気持ちも分かつてスッキリした俺は、そのまま手伝おうとトールの方を向く。その背中にフィーが手を添え、体重を預けて来た。

思わず心臓がドクンと脈打つて跳ね上がる。

「え？ あ？ い？ お？ う？」

緊張と混乱のあまり、俺の思考回路はまともに回らなくなり、言葉からは意味の無い疑問形が次々と溢れ出した。

すぐに離れたフィーの顔は湯で蛸以上に真っ赤だったが、俺の顔はきっと絵具のカーマイン以上に真っ赤だろ？から指摘しないでおく。

「クス。ケントって面白い。」

あ、笑った。可愛い。

「失望しましたか？ 私が、そんな女で……」

しかし途端落ち込んだように俯いてしまつフィー。

これは……男として気の利いた言葉の一つでも言わなくては！ 俺は駄目人間でも男なんだ！！

「そんなわけ……ないだろ？」

「え？」

だが、所詮俺は駄目人間。気の利いた言葉なんて知らないから、俺は自分の思う事を真つ直ぐフィーに伝える。

フィーは顔を上げて真摯な眼で俺を見つめて来た。

「むしろ安心したよ。やっぱりフィーは優しいんだなってさ。

「そんな……私なんか……全然……」

再び顔が伏せられたが、それは悲しみによる物ではなさそうなので、俺はそれ以上言葉を発す必要は無いのだと悟った。

俯いているフィーが何を考えているのか……分からぬけど、フィーが傷付いている様子は無いから、俺は安心してそこにいた。

「えいっ！」

ふいにフィーの掛け声。同時に、俺の唇に触れられる柔らかい感触。

「！？！？！？！？！？！？」

思考回路が完全にフリーズした。

「クス。ありがとうございます。少しだけ、気持ちの整理が付きました。」

と、そう言いながら、フィーは俺の唇に触れていた指を離した。

内緒のサインをするよついで、人差し指の腹を俺の上唇に当っていたのだ。

あれーチュージャなかつたのか……ちょっと残念。でもまあ、もし万が一チューなんてしていたら……うん、緊張で死んでたな。ある意味ラッキー？そんなわけない。

いやいや、そもそもこんな可愛い子が俺の唇に訳もなく触れるなんて、そんなこと天変地異が起こつたつてありえない……そうだ何かの間違いだ。

そうか！ フイーは俺に「聞くに堪えないからそれ以上喋るな」と言いたかつたんだ！ 自分が黙つてたから、もしかしたら俺がまた何かを言い出すかもとか思つてんだろうか。

でも、優しいフイーはこんな駄目人間な俺にでも気を使つてくれているんだろう。そんな言い方をしたら俺が傷付くと思つて……

じゃあ仕方ないな。これ以上余計な事は言わないでおこう。幸いフイーも思いつめた表情じやなくなつたみたいだし。

「そうだな。ごめんなフイー。」

「なんでケントが謝るんですか？ クス……変なケント。」

優しい！ 僕みたいな駄目人間の戯言を無かつた事にしてくれるなんて！！
やっぱリフイーは女神さまのように優しいよ。

「ほり、トルがそろそろ痺れを切らしそうですよ。私達も行きましょ。」

「そうだな。
」

フィニーの晴れやかな笑顔に俺はタジタジしながら、肉を焼く準備をしているトルの下に一人並んで歩いたのだつた。

三十九章 “ フィーの気持ち ” (後書き)

そんな勘違いする奴いねーよ。つてな感じの章でした。
しかし、それが駄目人間クオリティー！（え

四十章 “トールの行動理由”

矢倉状に組まれた薪を囲む。つてこりが、トール気合入り過ぎ。どんだけ楽しみにしてんねんつ！と、つこりかり関西弁でツッコミを入れそうになつたのは秘密だ。

「わい、火じやの。ワシは正直『精靈術』は得意ではないんじゃがのう。」

ヒ、ヒヒもできてトールは残念そうな声を洩らした。

「やうなんですか？」

「やうなんじやよ。いや、できないわけではないんじやが、微調整がのう……消し炭にしてしまつかも知れん。」

凶悪過ぎる。

「あれ？でも、ランクルートの街の中じやあ普通に火を起こしてなかつたつけ？」

「たまたま上手く行つたんじや。下手したら、あの辺り一帯吹き飛んでいたかもな。」

そんな危ない事を街中でやらかしたのか……

「ハ一む……全ては幼生のヒインゲンバーをヒの口で食すためよ。」

なんだか苦労話みたいな語り口調だが、言ひてみれば俺とフイーが扱き使われた話である。してやられたとはこの事なのだろう。

考えてみれば変な話だ。街中で、それも通行の止まる迷惑になる位置で肉を焼く。苦情が出る。苦情処理に騎士団が出張る。

つまり騎士団は軍隊的な立ち位置とは別に警察的な側面も持つてゐるといふことだらう。お役所仕事御苦労さん。

それは兎も角、騎士団が出張つてくる。本来はその中の誰かにでも押しつけようとしたのだろうけれど、偶然にも国家の客人だとか言う異国の一人がそこにいた。しめたどばかりに俺達に押し付けたとこわけだ。

でも変じやないか？この状況を作るには、成獣のエインゲンバーに勝てる実力が必要な上に、幼生のエインゲンバーに関する知識の欠如が不可欠だ。でなきや、幼生エインゲンバーを殺さざるを得ない状況が完成しない。

どうして、俺達には実力があり、かつ知識が無いと判断した？俺には実力もないし知識もないぞ。

「不思議そうな顔をしどるの。そんなにワシの行動が不可解か？」

そんなに不思議に思つてゐるつもりは無いんだけどな……俺って顔に出やすいのかな？

「ワシには貴様が、」

「あ、俺の名前ケント。いい加減さ、小僧とか貴様とかそんな呼び方やめるよな。ちなみにこっちの可愛いのがフイー。」

空氣を読まないのも駄目人間クオリティー。

不意に紹介されたフィニーは咄嗟の事に驚いたのかやや頬を赤らめて俯いた。可愛い。

「ふん。ワシには貴様が不思議に思つている事など手に取るように分かるわい。」

あ、無視された。

よほどセリフを遮られたのが不愉快だつたのだろう。明らかに不機嫌な表情になりつつも、トールは何事もなかつたかのように同じ言葉を口にした。

「ま、貴様のアホ面が気に入つたんじやよ。」

サラッと酷い事を言われた。

「何だとつーこんなイケメンを捕まえて何を言つ……」

軽くナルシスト入りなのは勿論駄目人間クオリティー。

「そう我鳴るな小僧、底が知れるぞ。」

なのに、特にツッコむでも無く、トールは軽く受け流した。

「国家の客人、異国の旅人となれば、ルヴィスの、それもランクルート付近にしか生息していないエインゲンバーについての知識など無いと踏んだだけじゃ。それに、風の噂では南の村でカレイブスを討伐したと聞くではないか。これ以上に適した人材などおら

んよ。」

ま、カレイブスは言い過ぎじゃろうがな。なんてクックと含んで笑いながらトールは言った。全然言い過ぎじゃないですかねー、と口から出かかつたが、一応堪えておいた。

「でも、もともとはこの国の騎士団に依頼するつもりであつたと言いましたよね?」

フィーがおずおずとやう切り出した。

確かにそうだ。ランクルート付近にのみ生息するエイングンバーとなれば、異国の旅人となつていてる俺達が知らぬのは無理のない事。だが、最初は騎士団に依頼するつもりであつたとトールは語つている。まさか騎士団が幼生エイングンバーに付いて詳しい知識が無いとは思えないし……

「あんなもん、口から出任せじゃ。」

せりふと言つた!?

「ワシは始めから貴様ら一人を利用するつもりでいたし、その為に行動していたつもりじゃ。概ね、ワシの予想通りに事は進んだしの。愉快じゃ愉快。」

そんな風に囁きながら軽快に笑う様子は、子供が自分の悪戯を自慢するかのように誇らしげだった。つまり、苛立しかつた。

「さて、肉じゃ肉。食つや。」

と、そう言つてまだ火も付いていなかつた事に気がつく。

「あ……」

なんか世界の終わりを見たかの様な絶望の表情だった。どれだけ楽しみにしていたんだろう。

「フィー。良い具合に火、付けてあげてくれ。」

なんだか無性に哀れに思えて、俺はフィーに火を付けるよう頼んでいた。俺が食べたいわけじゃないんだからなつ！勘違いするなよな！とかツンデレを気取つてみたり……絶対この世界じゃ通じないよな。

「あ、はい。」

フィーも似たような事を感じていたのか、特に躊躇いもせずに頷く。

「燃えよ」

燃え盛る薪。轟々と炎を上げ、矢倉は一瞬で崩された。

「あの、フィー？」

「すいません。私も力加減、苦手で……」

「つおい！？マジで！？またフィーの可愛らし一面発見しちゃつたぜーじゃなくてー！」

「ま、まあ火は燃えてるし、これで肉も焼けるつしょ。ほら、

トールのオッサン。肉焼くぜ。」

予め皮を剥ぎ、食べやすい大きさに切り刻まれている肉を指差す。ちなみに、切り刻んだのは俺。

バーチャル世代な俺は調理もゲーム感覚なので、実はそう言うのは得意だつたりする。生きているのを殺すのは、正直ゴキブリが限界だけど、死んでいればそれはもう食糧なので平気なのだ。

「おおー。」

トールも火が燃え上がっている事に今更ながら気付き、パアツと表情を綻ばせた。だから、どんだけ楽しみやねん。まあ俺も楽しみだけどや。

「では、命に感謝していただきましょ。」

そんな風にフィニーが祈りの言葉を捧げ、適当に木の棒に突刺された肉を火に翳して焼いた。

成獣の肉の方は筋張つていてあまり美味しいとは言えなかつたが、しかし幼生の肉の柔らかさと甘さたるや、その美味しさは尋常ではなかつた。

依頼は達成された。どうにも納得のいかない結果ではあるが、何にせよエイングンバーを捕獲し、トールに献上すると、^{いつ}当初の目的は達せられたわけで、もう俺達はトールに関わる必要は無いわけだ。

考えてみればこんな汚らしい形したオッサンをよくもまあ信用した物である。いや、信用していたと言つほどに積極的にトールに関わったとは思えないけど、しかし助けられたというのも事実なわけで、汚らしいなんて言つちやあ流石に悪いかなーとか考えたり考えなかつたり……

「じゃあ俺達はとりあえずランクルートに帰ろ。朝の散歩がとんでもないことになつちました。この調子じゃあ街に帰る頃には日が変わっちゃうよ。」

空には既に赤みが掛り、夕暮れ時である事をそこはかとなく知らしめていく。

街からこの場所へ来るまでに多分三、四時間歩いたから、帰りもそれだけ掛ると考えて……空の具合的には今五時から六時くらいだと思うから……まあ夕飯時には帰れるかな、なんて夕食の遅い俺駄目人間。

まあ今現在、腹がはち切れんばかりにたらふく肉を食べてしまつたわけだが、二時間も歩けば腹も減るだろうと、ひとまず俺はフィーに帰ると言葉を掛けた。

「 もう…… ですね。」

フィーも思案しつつ同意を示してくれた。

「 さうか。お主らランクルートに帰るのか?」

と、その時、何やら意味深な口調でトールが疑問を発す。

「 いや、のう。戻らない方が良い様な気がするのじゃが……」

え、なぜ?と言葉を発す余裕は無かつた。

「 三人とも動くなっ!」

鋭い声がその場に響き渡つた。

「 チッ 遅かつたか……」と舌打ちと共に発せられたのはトールの呟きだ。

「 え? え?」

俺は何が何やらわからず意味の無い音を発しながら口をパクパクされるとしか出来なかつた。

右後方には鬱蒼とした森、左手の後方には先のエインゲンバーの巣と思われる岩場から削り取られたかのような洞窟。そして、前方にあるのは先程矢倉を組んで火を起こし、肉を焼いて食べた隠れることなど出来ないだだつ広い草原である。

そこから、まるで湧き出て来たかのように一人の人間が、次いで

沢山の似た甲冑を着込んだ無骨な騎士達が現れて来た。感覚的には地面から生えて来たのかと言つた感じである。

見た感じ50人強の人数で、シュレン隊の三倍以上の人数。

甲冑には橙色の紋章が刻んであった。

シュレン達の着ていた鎧に刻まれていたこれと同じ模様は、確か青色だつただろうか？

「我々は帝国騎士団ハイラル隊である！貴殿等を幼生エインゲンバーの狩猟及び捕食の容疑で連行させていただく。」

その団体の中から一人、薄緑の髪を短めに切り揃えた、一目で歴戦の勇士と分かるほどに精悍な顔つきをした壯年の男性がそう口上を述べながら一步前へ踏み出してきた。

「そ、それは……その……」

「弁明は帝城で聞こう。」

なんとか釈明を試みるも、有無を言わさぬ調子で封殺された。

言葉に詰まつてトールを見る。トールは険しい表情で口上を述べる男の顔を凝視していた。相當に情けない顔をしているであろう俺に気づかなかつたようで何よりだ。

次いでフィーを見る。フィーは俺と同様に困つた表情で俺を見返してきた。自分達がとんでもなく悪い事をしてしまつた事に気付いた、と言つた風体の表情である。

「手荒な事はしたくないので、大人しく御同行願いたい。」

口調にセーラー寧ではあるが、その言葉の節々には「抵抗するなら斬つて捨てる」という明確な意志が感じ取れる。『』は逆らわないが吉と言う物だね。

「一つだけ、訊かせて貰いたいんじゃが、よろしいかの?」

そんな中、トールが釈然としない事があるとでも言つたげにおずと口を挟んだ。

「まあ良からい。」

男はトールが質問することを許可した。

「先程『容疑』といったの。と云つ事は、ワシらが幼生のエンゲンバーを食つた証拠が無いどころか、その様子を叩撃するらしくおらん。何故、そもそも明確に罪状を言つ?」

んん?ちょっとトールの言つてゐる言葉の意味が分からぬいで。ちよつと待てよ。

容疑つてことは、つまり疑いだ。「お前ら子供のエンゲンバー食つただろ」と、今容疑を掛けられているわけだ。

……そつか!俺達はさつき食べたばかりで、その時周りに人はいなかつた。こんな大群が隠れていられるスペースもなかつた。なのに、なんで俺達に『幼生エンゲンバーの狩獵及び捕食』なんて疑いが掛けられるんだと、そつとトールは言つてゐるのか。

「そんな事が。何と言つ事は無い。丁度任務を終えて街に帰

る途中、どこからか幼生エイングンバーを食つためだとかいう計画が聞こえたのでな。任務の報告のために隊員の殆どは街へ帰らせつゝ、じうして部隊の一部を引き連れてやつて来たというだけだ。」

ということは、五十人強はいそなこの大群は部隊のほんの一部に過ぎないってことか……って、そんな事はどうでもいい。肝心なのは、つまり、肉食つてる最中の俺達の会話を聞かれていたという事だ。

……えりや?..どりして?..どりやつて?..?

「流石は……音に聞こえた『千里眼』とこいつとかの。」

千里眼つて……

「『千里眼』などと言ひ言葉は聞こえが良すぎるな。私は所詮ハイラル＝イデ＝ケスターードといつ名の一個人でしかない。」

んー?ハイラルつてどこかで聞いた事があるような……

「シュレン達の話にあつた、帝国騎士団最強の騎士の名ですよ。」

戸惑う俺にこいつやうとフイーが耳打ちしてくれる。

あーそっかー。あのねえ……あの……唯一帝国内でシュレンに勝つことのできる騎士だったつけ!?

「もしかして俺達つて、物凄く危険な人たちに目を付けられた?」

「かも、知れません。」

その後、俺とフィー、そしてトールの両腕には何やらよく分からぬ模様の施された手錠を掛けられた。話を聞く限り、体内の魔力出力を乱す機能があるらしく、ようは魔術を封じる手錠のことだ。

特に逆らう事は無く、俺達はハイラル隊の皆様に連れられてランクルートの街に帰る事になったのだった。

四十一章 “投獄”

気が付けば俺達には一人一部屋の個人部屋が用意されていた。

四畳半ほど^{いちまい}の広さの部屋は鉄格子で区切られ、その中には硬質^{やわらかい}ベッドにフワフワの毛布、そして申し訳程度に区切られた区画に和式っぽい様相の廁^{トヤレ}が一つ……いや、まあ現実逃避はやめよう……言うまでもなく牢獄だつた。

牢獄同士の間も鉄格子で区切られているので隣の牢獄に入つているフィニヤトルの様子も分かる。

ちなみに向かつて左からトル、俺、フィニの順番だ。

武装は解除^{スル}とは言つても俺もフィニも武器らしい物は何も持つてないけど、され、入念な身体検査をされた後、手首に填められた手錠はそのままにランクルート城の地下にあるらしい牢獄に放り込まれたというわけだ。

「緊急避難なら大丈夫じゃなかつたのかよ~」

半ば愚痴るよつこ、俺はトルに対する恨み事……嫌味を口にする。

「ふーむ……帝国最強の騎士があそこまで頭が堅いとなるとのう……本当にこの国の騎士は心が狭くていかんのう。」

当の本人のトルは俺の批難には特に堪えた様子もなく、単に自分の読みが浅かった事を悔いているよつに見えた。

「話も何も聞いて貰えませんでしたね。」

ハイラルと言つあの男、「話は帝城で聞く」とか言ひながら、俺達を牢獄に放り込むなり「裁決が下されるまでそこで待つよつ」とか何とか言つてさうひとどどこかへ行つてしまつた。
取り付く島も無しとはこの事だろつ。

「しゃーないし脱獄しようか。」

カラツと言つてゐる。場を明るくするためのジョークだと思つてもらえればそれで良い。

「あ、逃げますか?では、壊れよ。」

ガシャンといつ音と共にフィニーの手に填められていた手錠がアツサリと碎け散つた。

「何つ……じゃヒー。」

ホールの恐ろしさに驚愕した声。当然だろつ、言靈の最強つぶりを田の前で見せられたのだから。

それにしてもフィニーは逃げる事に何ら抵抗は無いのだろうか?自分達は悪い事など何もしていないのでだからこのような扱いは不当である、と言わんばかりの軽はずみな行動だよ。

そういや、フイーって案外喧嘩つ早い性格なんだよね。

「いや、逃げるなんて冗談だから!そんな荒っぽいことしちゃ駄目だつて!」

「やつですか？では、直れ」

砕け散った手錠が再び寸分の狂いもなく元の形状に戻りフィーの腕に填められる。

ビデオの逆再生を見ているよつて、何とも形容し難い光景である。

トールが啞然として言葉も出ない様子だった。

「『一語法』じゃとー？」

あ、驚いてたのそつち？

ウエルストンとの決闘騒ぎの時の反応もそつだっただけど、どうも『一語法』というものは俺の予想以上に凄まじい物であるらしい。伝説上の存在とか言ってたし、日本人の俺の感覚からすれば、そうだな……マンガやアニメの魔法の様な物を現実に見せつけられた感覚に近い……のかな？

「それに『魔封じの枷』を物ともせずには……」

この手錠って『魔封じの枷』っていうんだ。俺みたいな駄目人間でも分かりやすい。

「クス。『冗談ですよケント。いくらなんでも誤解を解かずには逃げるなんてしませんよ。』

そりやそうだ。むしろフィーのジョークを理解せずに真剣に受け取った俺の方が悪いという物だろつ。

それにして驚いてるトールはスルーなんだ……

最近気付いたけどフイニーって若干うつ氣あるよね。優しいのにな
あ……いや、むしろ優しいからこそなのかな？根は優しいし咲いて
る花も優しいからこそ若干の棘付き的な……その棘も、まあ結構柔
らかいけどね。

「驚いてるけどさ、トールの『後唱法』なんて詠唱せずに魔
術発動するだろ？そっちのが凄くない？」

あの時間を止める魔術をやられたら、もしかしたらフイニーでも勝
てないかも知れない。なんせ魔術の発動まで一言も発しないのだ。
フイニーが 止まれ と一言叫びよりもさらに速い。
となれば、下手しなくとも一語法を超える詠唱法なのではないかと
思うんだけど……

「そうでもないんじゃよ。どうしてワシが貴様らをすぐに助
けなかつたと思うんじゃ？わざわざ解除して動き出してから狩つた
のは何故じや？」

むむ？トールから質問を質問で返されてしまった……う~むむむ

……

助けなかつた理由か……俺達が困つてる様子を見て楽しんでたと
か？

解除してから狩つた理由……実力を見せつける為とか……

「それと、見られたくない技のはずなのに、動きを止めたの
はエイングンバーだけで私たちには作用していなかつた理由……も
ですね。」

「小娘の方は賢いの。その通りじゃよ。」

意味が分からぬ。

見られたくなかったのに、あの魔術に俺達を巻き込まなかつた理由つて……ああ、そつか分かつた！

「条件があるのか！」

例えば、人には使えないとか、使つてゐる間は動けないとか……そういうのがあるんだな。

「概ねその通りじゃの。やつと氣付いたか。」

なるほど。いろいろと条件が厳しいせいで、一言で魔術を発動する一語法とはまた凄さに天地ほどの差もあるわけか。

「『後唱法』は『一語法』とは似て非なるものじゅよ。もつとも、『一語法』の使い手にわざわざ語つて聞かせる必要などないだろうがの。」

いや、『言靈』と『一語法』もきっと似て非なるものだからぢゅやんと教えて欲しいなー、なんて言えるわけがない。

「まさか小娘が伝説の『一語法』の使い手だったとは……ふむ、そういうえば名前、聞いていたかの？」

「言ったよー俺が教えたよー完全に聞いてなかつたのかよーーー！」

「フイーです。」

「フイー……か。覚えておこりうかの。」

「じゃ、じゃあ俺の名前も……」

「無能者の名前など覚えるに値せんわ。」

バツサリ言われてしまった。これは落ち込むしかない……思いつき落ち込んだ。ズーンって感じで両膝を地面に付いて落ち込んだ。

俺みたいな駄目人間にだつて感情はあるんだぞ……

「ケントは無能なんかじゃありませんー！」

落ち込む俺を見てフイーは声高く叫んだ。

「やうか。それは悪かったの。訂正します。名前は……そうケントじゃつたな。」

あれ？ 隨分とあつさり覆したな。まさかフイーの心の叫びが届いたとかいうわけでもあるまいに。

フイーも拍子抜けと言わんばかりのポカンとした表情で頭を傾げている。

「ケントにフイー。覚えておぐれ。またいつか出会つ事があれば、の。」

そんなまるで別れの挨拶の様な言葉をトールは口にする。その次の瞬間だった。

「ハリエーラ様。お迎えにあがりました。」

音もなく、ともすれば始めから牢屋の中にいたかのようにそいつ

は現れ、そして片膝をついてトールに頭を垂れた。

四十二章 “忍者……それも『くノ一』”

疑問はそいつ、一つだけ。

「忍者?」

それも、皇帝のところにいたメイド忍者なんて言つた愛と勇氣が口吻ボレーションしたような紛い物じやなく、鎖帷子に忍装束といつ『忍者』といつ単語からイメージする姿そのものである。

体格はスレンダーと言つよりも痩せぎすと言つた感じの細身。一見すると小学生にも見えてしまいそうなほどに小柄だ。
さらりと言えば、聞こえる声はソプラノな高い女の声。つまり、女忍者。すなわち『くノ一』。

何と言えば良いのだろう。

美しい?……違う。

可愛い?……田元はクリツとしているけれど、つてそういうじやなくて、真っ黒な忍装束によつて口元は覆われているため、容姿全体はわからないため違う。

となれば、格好良い?……そう、格好良いのである。やはり忍者と言えば、影に潜み、素早い動きで攪乱し、時には音も立てずに対象を暗殺するという、そんな格好良さの代表格。それも女忍者、『くノ一』なのだ。格好良い以外の形容詞など思いつかない。

「遅かったの。」

「ハツ、申し訳ありません。予想以上の警護の厳しさに少々
梃子摺りました。」

「ここので「敬語は難しいよね」とか言つたらどうなるかなー、みた
いなことを一瞬考えたけど、空氣を読む駄目人間の俺は頭を振つて
脳内から追い出した。

「しかし問題はありません。ここから脱出口までの経路上に
ある障害は全て眠らせました。」

「「」苦労じゃったの。」

「勿体無きお言葉。」

そう言いながら忍者は再び恭しく頭を垂れる。トールって何者な
んだ？

「あの、トール？」

何が何だか分からなくて、俺は思わず空氣も読まずにトールに声
を掛けてしまう……その瞬間だった。

「ハリエニーラ様の御名を口にする」とすらおこがましいと
言つのに、それに留まらず呼び捨てるとは、貴様一体どうア見
だ？」

恐ろしく冷え切つた絶対零度の声音で気付く。先の一瞬までトー
ルの前で跪いていた『くノ一』がどうやったのか目にも止まらぬ速
さで俺の背後に回り込み、そして俺の首筋に冷たい刃を押しつけて
いたのだ。

油断していたせいもあるかもだけど、俺の動体視力でも追えなか

つたとは凄まじい速度……だけど、それっておかしくないか?ビックリして俺の背後に?

先にも言つた通り、俺達が押し込められた牢屋は一人一部屋で、言つまでもなく俺とトールの牢屋の間は鉄格子で区切られている。牢屋のカギは開いていないし、いくらこの『くノ一』が小柄だと言つても鉄格子の隙間を潜り抜けられるといつほどでもないし、言つまでもなく鉄格子も壊れでは……いた。

何かしら鋭利な刃物で切断されたかのように、人一人が余裕で通れるであろう程度の大きさで鉄格子が円状に切り裂かれていた……つて、荒業かよつー?

「ケント!貴女、ケントから離れてください!」

フィーもワントンボ遅れて状況に気付いたらしい。驚きから怒りへ感情が切り替わり、今にも俺の首筋を搔つ切りそうな『くノ一』に向けて強く言葉をぶつける。

「いやー俺としても勘弁して欲しいなーなんて、ほら、呼び捨てた事なら謝るよ。ごめんなさい、ハリエニーラ様。えーと……これでいいか?」

「良いと思つのか?」

駄目ですかねー

なんて若干刃に力が込められたような気がする圧力を感じながら、俺は悠長に考えていた。

「離れよ」

言靈炸裂。

『くノ一』は何か見えない壁に弾かれたように吹っ飛んだ。

「なつ今のは！？クツ、不覚！」

悔しげにそれだけを吐き捨てるが『くノ一』はシコツというわずかな衣擦れの音と共に再び姿を消す。しかし、タタタタという何かが走っているような音だけが牢内に不気味に木靈して、しかもその音は俺ではなくフィーに少しづつ近づいているようにも聞こえて……

「……つー」

一瞬の後、『くノ一』はフィーの背後に現れる。その手には銀色の煌き。フィーは、気付けていない！

俺とフィーの牢屋も鉄格子で分けられている。俺は今この場ではフィーを助けられない。『ヤバい』といつ三文字だけが俺の脳内に響き渡り、そして、

「ふざつけんなああああああああああああああ！」

気付けば全身全靈を掛けて叫んでいた。

そのあまりの声音に鉄格子はビリビリと振動し、『くノ一』も驚いたのかフィーの首筋に刃が触れる寸前で手が止まっている。

フィーが傷付いていない事に一応安心し、ホツと息を吐いてから『くノ一』をギロツと睨む。

「テメエ ふざけんな！ フイーの陶磁器みたいな綺麗な肌に少しでも傷付けてみろ！ 泣いて謝つても赦さねえからな……」

トールことハリエーラ様とやらに不敬を働いた（らじこ）のは俺である。先は俺に向きてこそすれども、フイーを狙う理由は無いはずだ。

「ほれ小僧、ケントじやつたか？ 落ち着け。それにリザもじや。ワシは氣にしておらん。そう熱り立つな。」

そこにまさかのトールから仲裁が入る。いやまあ、フイーが状況を無視して「綺麗な肌だなんて、こんな時にケントつたら……／＼／＼」なんて咳きながら照れている現状ではトールしか仲裁役はないんだけどね。

「ハツ。申し訳ありませんハリエーラ様。出過ぎた真似を致しました。」

「よいよい。」

リザと呼ばれた『くノ一』は再び一瞬でトールの下へ戻り、深々と頭を垂れて跪いた。

ただ、俺の前を横切るその一瞬にだけ、確かに彼女は俺に向けて言葉を発した。

ただ一言「チカイウチーロロス」と、どこか遠い世界から聞こえてくるような聲音で囁いた。

「殺す」だなんて一日に10回も言われた事のある俺に、その程度は響かないぜ。って言おうと思つたけど、流石に怖いから、聞か

なかつた事にして、別の質問をする事にした。

「結局、ト……ハリヒーーラ様つて何者なわけ？」

ギロッヒリザが睨んできたので言い直す。

「ふーむ……」いつなつては止む無しか。教えておいておいつかのう。」

「内密じやぞ」と付け加えてトールは続ける。

「カテアテ集合団の國主じやよ。」

と、内密の事だと呑のこまゐで何でも無い事であるかのよつし、
トールはアッサリと告げた。

四十二章 “忍者……それも『ぐー』”（後書き）

活動報告でも書きましたが『神勇者と死神魔王』が削除されてしまい、ややモチベーションを持つて行かれてしましました。まあ、投稿が遅れた言い訳にするつもりはありませんが、しかしさはリショックだったのか思ったよりも文章が進みませんでした。これからも頑張つて行こうと思うので、見捨てずに読んでいただけたら幸いです。

さてさて、新キャラです。

彼女の作品内での役回りは実はまだいまいち定まっておりません（
オイ

ですので、彼女はこんなキャラなんぢゃないだろ？か、とあれこれ想像して読んでいただければ幸いです^_^

四十四章 “様子見のつもりが泥沼”

カテアテ集合国。

それは、シユレンとウルナに地理を聞いた時に出た名前。ルヴィス帝国の西にあるといふこの国には「変わり者が多いらしい」とシユレンは言った。

第一、俺やフイーも最初はシユレンにカテアテ集合国からの旅人だと思われていたようでもあるし。

どうやら、少なくともルヴィス帝国には、変な奴を見かけたらカテアテ集合國の人間だと思っておけば良い、といつよつな風習でもあるようだ。

つてな感じで、トールが去つて行つた後の牢屋の中でつらつらと思索に耽つていた。

ちなみに、トールの手錠はリザガが手刀で一撃で粉々にしていた。

「フイーはびつ思つ?」

駄目人間の思考能力では限界があるので、俺はフイーに話を振つてみる。

「そうですね。変わつた方だとは思つていまつたが、まさか國主であつたとは……」

フイーも概ね俺と同意見と言つた所なのだろう。

まさかお国のトップが護衛も付けずにあんな汚らしい格好をして

歩き回っているとは…… カテアテ集合国とやらは予想以上に変わり者が多いそうだ。

それに、世界を渡り歩く美食家として有名つてことは、実際にこんな事を相当長年続けていたという事で、今回は運悪く捕まっちゃつたから自分の部下に頼んで救出して貰つた、ってところのかな。

「悪い奴だな。」

「そうですね。悪い奴ですね。」

フィーもクスクス笑いながら俺の言葉に同意を示した。

そんな悪い奴の口車に乗つて、自分達の立場も忘れてルヴィス帝國の法に叛いた俺達は頭の悪い奴つて事になっちゃうのかも知れないけど、そこはまあ、考えない事にしよう。

「それにしても退屈だな。いつまで俺達はここにいれば良いんだろ？！」

リザとの騒ぎの時だつて誰も駆けつけて来なかつたし、何よりリザの言つた「しかし問題はありません。ここから脱出口までの経路上にある障害は全て眠らせました。」という言葉の意味も気になる所。

となればこなはもつ……

「様子を見に行くしかないな。」

幸いと言つべきか不幸にもと言つべきか、頑強そうな牢屋の鍵はものの見事にリザによつて粉碎されている。脱獄してくださこと言

わんばかりだ。

「大丈夫でしょうか？私達は悪い事をしたから閉じ込められているのですが……」

どうやらフイーは逃げだす事に若干抵抗があるらしい。「やめた方が良い。けど、ここにこうしているのは退屈。」的なオーラを感じ取れる。

「ダイジョーブダイジョーブ。見つかったら謝れば良いんだつて。」

「ありがとうございます」「ごめんなさい」は万国共通の筈だ。え？ 脱獄？ 何それ美味しいの？

「そ、そうでしょうか……」

お、なんだかフイーが若干乗り気になつてきたっぽい。もう一押し。

「大丈夫さ。万が一何かあつても、フイーだけは絶対に俺が守るから。」

「…………」

あれ？ 黙つて俯いちゃった……ハツ！？ もしかして、俺みたいな駄目人間じゃ頼りないと思われた！？

それは良くない。ここは押すばかりじゃなくて少し引いてみるか……

「まあ、フイーがどうしてもつて言うなら、俺一人で行つて来るよ。ちょっと寂しいけど、フイーの気持ちを尊ちょ……」

「行きます！」

俺の言葉を遮って、頬を赤くしたフィーが叫んだ。

「そ、そつ？ そりゃ良かった。じゃあとりあえずこの邪魔な手錠をこわ……」

「粉碎」

「壊れよ、じゃなくて！？」

ぶつ壊れた。原型さえも分からぬほどに粉々に粉碎された。手錠が人間だったら「解せぬ」とか咳きそうなくらいバラバラになってしまった。良いんだろうか？

「まあ行きましょう。」

鉄格子の方は既にリザによつて切り裂かれているから言霊を使つまでもない。

俺とフィーはそれぞれに宛がわれていた牢屋から抜け出すると、一端額を合つてから出口の方を目指した。

「なんだよ……これ。」

道理で誰も来なかつたわけである。

「酷い……」

フィーも口元を掌で覆い、その光景に衝撃を受けていた。

「眠らせた……か。良く言つぜ。」

死屍累々。

この光景を表すのに的確な表現と言えばこの言葉しかないだひつ。

牢屋の扉の外にいた二人、恐らくはこの牢屋の見張りだろう兵士たちはものの見事に昏倒させられていた。

「うう……」と唸つている所を見ると、どうやら生きていらぬようだ。

牢屋へ続く細道を抜けるとランクルート城の城門前広場がある。そこにも何人もの兵士たちが倒れている。全員、先の見張りの兵士と同様の状態で死んではない様子。

怪我らしい怪我もしていないからフィーもどう治せば良いか迷っているようだ。

「おいこっちだ！」「人も逃げているぞ！」

やや遠くから聞こえるそんな怒鳴り声。

聞き覚えのあるその声の主は……

「やっぱ、ハイラルだ。」

帝国最強らしい騎士が十人程度の部下を引き連れて、こちらに走つて来ている。

「なんだこの惨状は…まさか奴らがやったのか！？」

そしてこの惨状に気付いたハイラルがさうに声を荒げ、さりとてちらに迫りくる速度が上がる。

あれー……なんかあらぬ嫌疑を掛けられてね?

「ケント……これは……」

フィーが不安そうに俺の服の裾をちゃんと抓む。

多分、あの牢屋は脱獄すると分かるシステムになっているのだろう。

トールトリザは何かしらの方法でそれを避けて逃げたけど、俺達は間抜けにも何も考えずに牢屋から出でてしまった。

それがこの結果なのか……となれば、騎士達はまだトールは牢屋内にいると思っている筈。その辺りから切り崩して活路を見出す……

そう心に決めて、俺は大きく息を吸い込むと、騎士達の足を止めるべく第一声を放つた。

「トール＝テン＝ハリエニーラは実はカテアテ集合国の國主なんだ！」

ハッタリで乗り切るつもりが、なんかとんでもない暴露話になつた。

解説 “逆回転の歯車”

そろそろ彼の話をしよう。

名を來生賢人。年齢は18歳。体格は中肉中背。頭は悪いが身体能力は標準強。

目の前で女性が傷付く事を極端に嫌う。

特技として動体視力が優れている。

『自他共に認める駄目人間』を自称する。

ここまでが彼が自分で認識している來生賢人と言つ人間像である。しかし、彼の本質はそんな所にあるのではない。

駄目人間だと、自らを表現するその彼の言葉は奇しくも本質を突いていいると言えなくもない。しかし、それは本質と言える中での表層、氷山の一角でしかないのである。

世界に存在する全ての人間を歯車に例えるとするならば、つまりこの世にいらない人間などいないという説を肯定的に捉えた仮定で考えるならば、彼の存在はすなわち『逆回転の歯車』であるといえる。

きつちりと噛み合い、それぞれが互いの動きを補助しながら複雑な役割を作り出す歯車の中に、ポツンと一つだけ独立して逆回転する歯車の様な存在。それこそが彼の本質なのだ。それも、単体で回っているのならばまだしも、その存在は他の歯車と下手に噛み合ってしまうのだから性質が悪い。

いらないどこの話ではないのである。

彼一人がそこに存在するだけで、この世の全てを狂わせる。誰も彼もが彼の前では所謂『いつもの自分』を保てない。誰も彼もが不安になる。誰も彼もが不安になる。自分は絶対にこんな奴に劣つていないと信じ込みたいくなる。信じ込まなければ自我が保てなくなる。

そういう意味での駄目人間。「こんな奴に自分が劣つているわけがない」と、意識的にしろ無意識的にしろ相手にそう思わせる。意図せずして人間の深層心理に自らの存在を捻じ込むような、そんな特性。

彼が謎の声に導かれ世界を渡つてからも、その彼の特性に何人も犠牲になつてゐる。

シュレン＝クル＝ルグタンス……サレファー＝レイ＝バリアン……
ウェルストン＝バダ＝ユカール……トール＝テン＝ハリエニーラ
……そして、リザ。

その全ての人間が、彼の前でいつもの調子を崩されている。それは彼らだけではない。その影響は大なり小なり、彼と言葉を交わした人間……否、彼と擦れ違つた人間全てに現れている。

そういう星の元に生まれている。神に操作出来る確率の範囲外。天文学的確率なんて生易しい数字を遥かに超越する確率のもと、彼はこの世に生を受けたのだ。

纖細な世界の機構に仇なす存在。いるだけで人の輪を乱す逆回転の歯車。これでは神に、引いては世界に嫌われざるを得ない。

かと言つて、全員がその影響を多大に受けているわけではない。一部、殆どその影響を受けていない人物がいる。

語るまでもない。代表例はフィニフィアン・シュルツである。他

にも数名。彼の影響にはかなり大きく個人差がある。その差がどこに現れているのか、定かではないのだが……

勿論、世界を渡つた程度で彼の本質は揺るがない。渡つた先の世界でも、彼は変わらずその『逆回転の歯車』としての性質をいかんなく發揮し、人の精神を狂わせる。

フィニーとは違う意味で世界を揺るがしかねない様な存在を、なぜ謎の声の神は彼の世界の神から受け取ったのか……『逆回転の歯車』が新たな世界で何を為すのか、どのような影響を残すのか、それは今はまだ分からぬ。

解説 “逆回転の歯車”（後書き）

すいません、この章の文章に滅茶苦茶手間取つてました。そう、滅茶苦茶手間取つてました。はい、大事な事なので二回言いました。
……つてな感じで、更新が遅れた件について誤魔化されてください
＾＾；

嘘です、『ごめんなさい。勿論これからもがんばるので見捨てないでください。

さて、ここにきてやつと、物語の根幹に関わる主人公の特性についてちょっとだけ明かしました。

ちょっとと言いつつ、結構色々言いましたが＾＾；

まあ章自体は短いですし、実はこの章を読まなくとも暫く話の展開で困る事は全くなかつたりするんですが（オイ
実際、この章の最後に言つている通り、物語の進展については一切触れていませんし、こんな主人公とあんなヒロインの『神に嫌われ主人公ペア』がこの先どんな風に活躍していくのか、あれこれ想像してみたら楽しいんじゃないかと思います＾＾
でもあんまり深読みし過ぎると、浅い展開に失望、なんて事にもなりかねないので程々に……（え

まあこんな感じです。

感想、評価など常に大歓迎ですので、この小説を読んで何か気になつた事などありましたら一言だけでも感想ページに残して頂けたら嬉しく思います。

では、今回はこの辺で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6556o/>

微妙な勇者と最強なヒロイン

2011年10月7日07時42分発行